
なぜか選ばれた俺の異世界冒険記

藤龍

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

なぜか選ばれた俺の異世界冒険記

【Nコード】

N82010

【作者名】

藤龍

【あらすじ】

ありえないことで死んだ俺、神谷聖夜。

神を名乗る変なじいさんからマジありえない力をもらい、そのじいさんの依頼をこなすために異世界へGO！ っとなったのだが……？

なにがなにやらわからないほどの超・異空間物語。

リクエストやネタなどを募集してます！ ドシドシおねがいします！（まあ、知っているものに限る事があるかも）

プロローグ

「神谷聖夜君^{のくさ}、君は選ばれた」

真っ白で、何も無い空間にて、俺はものすごい髭のじいさんにそう言われた。

……っていつか、何？ 選ばれたってどういつこと？

「君にはこれから異世界を渡る旅にでてもらう。そしてその世界であることをしてもらいたい」

はあ、何を？ それからアンタだれ？ 二ごど二ご？

「わしは神と呼ばれる存在じゃ。そしてここは現世と冥世の狭間」

「いや、それって俺、死んだってこと？」

「まあ、そういうことじゃ」

「……なんで死んだ？」

「君は大雨の下校途中、突然雷に身を打たれた」

「……それで、死んだ、か…… 納得いった。で、俺にや
つて欲しいことってのはなんだ？」

「それはその時行った世界によって異なる。だから世界を移動
したらその時に言う」

頭に直接響くようにしてじいさんの声が聞こえた。

「お、じいさん。 無事にドラクエの世界に着いたぜ」

『なぜ、ドラクエだと分かった』

いや、そりゃ目の前にスライムがいるからな……。 ま、それはさておき……

「この世界で俺にやって欲しい事ってな、なんだ？」

『この世界は全ドラクエシリーズが入り混じっておる。 そしてすべての魔王を集結させようとしている者がいる。 もうすでに8体集まった。 残り1体がその者の手に渡る前に、倒せ』

……無理DEATH ってか、絶対無理！！

『だが、今の君ならそれくらい簡単な事だ』

チート能力使えってことか？

「俺がこの世界の人たちと関わっても大丈夫なのか？」

『ああ、構わん。 君がこの世界でどんなことをしようが、何の影響もない』

「わかった、やってみるよ。 その悪玉を倒せばいいんだな？」

『そうだ。 ……健闘を祈る』

声が聞こえなくなった。

……さて、これからどこへ行くところか。

まずは「脳内世界地図」を展開。
いのは……。

現在位置から考えて一番近

……

……なあにこれえ。この草原、岩山に囲まれているんですけどw
ww さっそく詰んだか？

いや、でもチートある訳だし「ルーラ」使えばどっかいけるんじゃない？
そうでなくても「トベルーラ」とか……。

そうと決まればとっとと行くか。

「ピギーッ!」

「ん？ お前まだいたのか？」

「ピギーッ!」

そんなつぶらな瞳で見られても、お前がなにを言いたいのかわからない……

……

だからそんな目で、俺を見るな！（カイン風に）

「ピキーン」

これは…… どういうことか？

スライムは仲間になりたそうな目でこちらを見ている！
仲間にしてあげますか？ ってことか？

「ピキーン！」

らしい。(は?)

とりあえず…… 「はい」。

「ピキピキーン！」

スライムが仲間になった！ のか？

「とりあえず、お前の名前を決めないとな……」

スラりん…… これじゃ普通すぎるな。

……

よし、分かった!!

「今日からお前の名前は『スランボー』だ！」

「ピキーン……！」

スランポーは嬉しそうだ！！

ちなみに元ネタ分らんやつ、スマン。

「じゃ、行くかスランポー！」

「ピキーツ！」

「『ルーラ』！」

バイーン！ ドガツ！

いってー！ー！ー！ー！

ノエルは天井に頭をぶつけた！

「いや、天井ってなんだよここー応屋外だろ！？」

「ピキーツ」

なんか結界でもあるのか？ それならこの超チート能力で……

「作成^{メイク}・斬鉄剣」

ふっふっふっ…… この剣に斬れぬ物などないわ！！

「おらおらおらおらおらおら……！！！！！！！！！！」

空を斬りまくった、いやマジで数え切れないほど……。

……手応え無し!!

結界じゃないらしい。

だとしたらなぜ飛べないんだ？

……

あ、そうか。俺がこの世界でいったことがある場所がないんだ。

「だったら『トベルーラ』！」

俺とスランポーは飛んだ！止まった！あたりを見回した！

「とりあえず、ここから見える範囲だと一番近いのはあの村か……。
いってみるか、スランポー？」

「ピキピキーツ！」

「よし、行くか！」

俺達は岩山を越え、ドラキーなど飛行モンスターをぶっ倒し、村の入り口近くの岩の陰に降りた。

……だって直接降りていたら大騒ぎだろ？

さて、村に入るか。

「旅の人かい？　　ここはエリクス村だよ」

エリクス村……。聞いたことねえな。　　この世界の村かな。

「いい時に来たね！　　ちょうど明後日、この村で祭りが行われるんだ」

「どんな祭りだ？」

「10年に一度行われる祭りだ。　　俺は2年前に来たばかりだから詳しい事は分らんが、なんでも精霊を呼び出す祭りらしい」

精霊を……。　　どんな精霊だ？　　セイレーンとかそういう系か？

「とにかくゆっくりしてくるといいよ」

「ありがとう」

俺は礼をして、村に入った。

スランポーは……。　　表に出しても大丈夫だろう。　　さっきの人も驚いてはいなかったし。

あとは祭りでも見て、さっきの人のいうとおりゆっくりしていくか。いざとなったらこのチート能力でなんとかするか。

第一話 初ミッション始動！ そして最初の世界は……（後書き）

藤「ども、藤龍です。 このたびは「なぜか選ばれた」ryを
よんでいただき……」

ノ「そんなことどーでもいいから俺にひとつ質問させる」

藤「せっかちですね」

ノ「まず、スライムの名前だが、なんでスラりんじゃなくてスラン
ポーにしたんだ？」

藤「スラりんだとよくありすぎて面白くない。 ただそれだけ」

ノ「じゃ、なぜスランポー？」

ス「ピキーツ？」

藤「スランポーに関することはgoogleで『ドラクエ 片乳首』
で調べてみてください。 ニコニコでも調べられますよ」

ノ「じゃあ、次だが…… 次回はどうなるんだ？」

藤「あくまで予定ですが、文中で出てきた祭りが行われ、そしてポ
スのなキャラとバトル！ って感じですね」

ノ「…… ポスキャラ登場早すぎね？ いくらなんでもそりゃLv
1でラスボスと戦うようなもんだぞ？」

藤「例え死んでも死ぬのはノエルですから……」

ノ「…… なんだと！」

藤「それでは、また次回！」

ノ「…… メドローアア……」

藤「のぎゃあああああ……！！！！」

第二話 エリクス村の人たちと精霊を呼ぶ祭り

エリクス村に着いた俺達は、早速宿を取った。

ここの宿は一見教会と見間違えるほどのものだった。だつて入り口に聖母像(?)が置いてあるんだもん!

……

よく見ると普通の家にもその系統のものが置いてある。と精霊を呼ぶとかいう祭りの影響だな。

きつ

「部屋ひとつ、空いてる?」

「はい、空いてますよ。 お客様はとても幸運ですね」

「え?」

「ちょうど残り一部屋だけだったんですよ」

「全部で何部屋あるの?」

「合計で44部屋になります。 お客様のお部屋はもちろん幸運の数字である44番です」

ありえねー……!! なんて44が幸運なんだよ!!

普通二桁で幸運ついたら77だろうが!!

「はい。 これがルームキーです。 部屋はここから階段を上って一番奥に行つたところです」

「……ありがとうございます」

「お祭りまでゆっくりしてってください」

ゆっくりしてってね！！
って聞こえた俺はなんだ、あほなのか？

「まあ、そういうことはおいといて……。行くぞ、スランボ」

「ピキーツ？」

「ん？ どうしたんだ……？」

スランボーが見ていた先には、一人の女の子（年は俺と大差なさそうだがロビーの中心にある天井にもとどきそうな大きさの神像の前に立っていた。その表情はどこか悲しげだった。

「あの、どうかしましたか？」

俺は声をかけてみた。
振り向いたその顔は、やっぱり悲しげだった。

「……この村の、人じゃないですね？」

「え？ ああ、そうだが……」

「だったら、あなたに頼みたいことがあるのですが…… いいですか？」

「ん？ 構わないけど……」

「なら、後でここから南西にある家まで来てください。
聞かれるとまずいから」

……

「わかった。 10分くらいで行く」

俺はその娘と別れ、部屋に向かった。

44号室……

「なんつーか、不吉な匂いがするぜ……」

「ピキー？」

「……部屋も見だし、南西だっけ？ さくつと行くか！」

南西にある家……

来てみたはいいが、家多すぎ!!

どの家だよ!!

プレートはあるが名前聞いてなかったし、意味ねえ!!

「どうすりゃいいんだ!!」

「ピキーツ!!」

「だから何が言いた……」

閃いた!

『千里眼』

別名「第三の眼」だ。これを使えば遠くのものが見えたり、未来が見えたりするが、あいにく俺は未来なんて知りたくないんでね。

……見えた!!

目の前にある家!!

ってマジかよ

!!

「おじゃましまーす」

「! あ、さっきの……」

「さっそくだが、俺に頼みたいことってなんだ?」

「それはですね……。いませんでした?」

この村の人たち、何かおかしいと思

「ああ、家の前に神様像があったり、44がラッキーナンバーだっ

「……………」

「おい？」

「……………私たちは昔から『善の魔物』と『邪な魔物』の区別がつく……っていうか、そういうオーラが見えるんです」

「で、だから？」

「あの時はチャンスがありませんでしたがこの鏡があれば、本当の姿を現すことができます」

その鏡は、ラーの鏡か……。

「お前、名前は？」

「あ、はい。　私はフィーナと申します」

「フィーナか。　俺はノエルだ。　あと、こいつはスランボ

」

「ピキーツー！」

「明後日までには準備しておく。　情報も欲しいしな」

「はい、それではまた後ほど……」

俺達は家を出て、宿屋に戻った。

……そして二日後

「今日が実行の日だが、念のために聞いておく」

「はい」

「すきを見て攻撃すればいいんだな？」

「ええ、動けなくなつてからは私が何とかしますから」

「……無茶すんなよ」

祭りは村の中心で行われるらしい。俺達が行つてみたときはもう準備が終わっていた。

……速いな

「それでは精霊様を呼ぶ。皆、心からの祈りを捧げろ」

「」「」ははあ」「」

どこの宗教団体だ、貴様ら。

「神の世界より出し精霊、マゲ様。　どうか我々の祈りに答えて、我々にまた希望を与えてくださいまし……」

この後はなんだかよく分からんお経っぽいのが続いた。
マゲってなんだ？
……

「……ミルドラス！」「」

「はあ！？」

なぜミルドラ！　なぜお経のしめがミルドラ！？　まじ
で訳分からん！

そのとき祭壇に光が現れた……　空から。

「……我が名はマゲ。　エリクス村を守る精霊なり……」

光の中から人？　エルフ？　が出てくると同時にその場にいた全員
が土下座した。　いや、それはもう全員同時に。

っていうかあの顔、人でもエルフでもねえ。　どっかで見たこと
が……

「まず、我を殺そうともくろむ不屈き者を始末しなければなりません」

「そ、それは本当ですか！？　一体誰が……」

「……フィーナです」

「「「なんですよ！！！」」」

ほぼ全員がハモった。

「まあ、落ち着きなさい。　我が始末します」

「な……！！」

「フィーナ。　あなたの罪はとても重い。　まずはあなたの家から滅しましろう」

「や、やめてください」「メラガイアー」「やめて！」

巨大な火の玉が家の上に浮かんだ。

「……落ちなさい」「マホカクタ！！」「え？」

超ぎりぎりのところだった。　メラガイアーは俺の目の前で跳ね返っていった。　……危なかったあ。

「あなたは、この村の人じゃないですね」

「そのセリフは二日前にも聞いたぜ。　俺は旅人だ」

「では旅の方。　私の邪魔はしないでもらえるか？」

「そうはいかねえな。　俺はあんたを倒さなきゃならんのでね、
マゲさん、いや『ゲマ』かな？」

「？ それはどういう「その顔だよ」「なに!？」

結局はラーの鏡は必要なかった。 思い出すのに時間がかかったが、こいつの顔は紛れもなくゲマだ。

「なにを言うかと思えば「じゃ、これ使ってみるか?」「それは!」

鏡から光が放たれ、マゲを包んだ。

なんとマゲはゲマだった!

ま、いちいちそんなことやらなくてもいいんだがね。

「マゲ様が!！」 「あの旅人がやったんだ!」

「マゲ様を魔物に変えた!」

「「「やつを殺してマゲ様を救うんだ!」「」「」

おまえら—————!! どこまでこの魔物を信じてるんだ

!!

「ホーツホツホツホツ!! まずはあなたから殺すとしてしましょ

う!」

まさか一番最初のボスがゲマとはな…… しかも負けフラグ
じゃねえだろ、これ。

第二話 エリクス村の人たちと精霊を呼ぶ祭り（後書き）

藤「どうも」 藤龍です！」

ノ「早速死ねと言いたげな展開だな」

藤「そう？」

ノ「なんつーかゲマだし、村の連中操られてるし……」

藤「大丈夫。 スランボーとフィーナがいるから」

ノ「次回はまるまるバトルか？」

藤「そう。 そしてエリクス村編終了」

ノ「はやっ！！ いくらなんでも早すぎだろ！！」

藤「まあ、チート主人公だから大丈夫だろ？」

ノ「他の一匹と一人はどうなる！？」

藤「死ぬかも」

………

ノ「てめえが死ね、『ザキ』！」

藤「………」

返事がないただの屍のようだ。

第三話 初バトルⅡ初ボス！？

まさかチート能力初バトルがボス戦とはな……。その上ゲマ……
… いやマゲかよ。

でも勝たなきゃこの村の連中やバイんだろ……。

「そんなじゃ、バトルモード入りますか。作成・隼の剣（改）
デュアル
双」

殺す気で行かないとこっちが死にかねんからな。

チート能力、みやぶる！！

名前：マゲ（ゲマ）

性別：不明

耐久：闇

弱点：光

吸収：光、無以外

……なにこれえ？

ゲキヤバじゃん。

「ライトフォース！」

「準備はよろしいですか？」

「ああ、いつでもいいぜ。

勝つのは俺だな。

お前ら、

遅れるなよ？　俺は速いぜ！」

「え……　は、はい！」ピキーツ！」

……バトルモード、始動。

「まずは俺から行くぜ！　はやぶさ斬り！」

ノエルは少し腰を落とした体勢からゲマに向かって突進した。

「もらった！」

ノエルは剣を二本とも振ったが、ゲマはそれぞれ二本の指で挟んだ。

「なっ……」「これしきの速さでわたしを斬れるとお思いですか？

ドルマドン「げっ！」

ゲマは目の前で闇の球を集め、巨大な球体を作り上げた。

そして作り終わると同時にノエルに向けて放った。

「ぐぎゃっ……！」

暗黒の巨球はノエルを包んだ。

「ク、クソ……」「まだまだこれからですよ」「え？」

ゲマは両手を剣からはなし、何かを包み込むようにして両手の指を絡めた。

「死になさい！」

両手をだんだんと近づけ、手を合わせた。

バーバーバーンツ！　　っと大きな音がし、球は破裂した。

ノエルは体中から血を流し、その場に倒れた。

「ノ、ノエルさ……」「やったぞ！　マゲさまがあの小僧を殺してくれたぞ！！！！！！」！　　そ、そんな……！！」

「ところで、なんなのですか？　このスライムは」

ゲマは、スランボーを握りつぶすかのようにつかんでいた。

「ピキーツ！　「ス、スランボーちゃん！」」

「ほう、これはあなたたちのモノですか。　　では、始末せねばなりませんね。　　……ザ「おい、てめえ。　　いつ誰が死んだって！？」……なに！？」

ゲマがザキを唱えようとした瞬間、ノエルは立ち上がり、スランボーを掴んでいるほうの腕を掴み立ち上がった。

「勝手に人殺すんじゃないよ」

ノエルはゲマの腹部に一発蹴りをいれた。

「くっ…それから、人の大事な仲間を物扱いするんじゃないかねえ！」
次はパンチを放った。

その衝撃でゲマはスランボーを落とした。

「おっと、危ねえ」

ノエルはとっさにスランボーをキャッチし、それと同時にもう片方の手のひらでゲマを吹っ飛ばした。

「ピキーツー！」

「ん？ どうした、スランボー」

「あ、あの…… 大丈夫ですか？」

「え？ なにが？」

「だからその…… 体中から出ている血です」

「え…… あ、気づかなかった」

(……ある意味すごいです)

ノエルはスランボーを降ろすと剣をしまった。

「どうしたんですか？」

「……俺、素手で戦っわ、やっぱ」

「な、なんですか!？」

「武器持ってる勝ち目なさそうだし、素手のほうが確実だからな」

「あの小僧、立ち上がったぞ！」

「マゲ様の偉大なる魔力を受けても無事ではいるとは！」

「やっぱり悪魔だ！」

「我々もマゲ様とともに戦おうではないか！」

「「「オーーーーーーッ！」

「」

村人達の大声を聞き、ノエルたちはギョツとした。

「まさかマジでこうなるとはな……。おい、フィーナ」

「はい？」

「お前はどっやって戦うんだ？」

「わ、私は回復とか補助とかが得意なので……」

「わかった。じゃあ、できるだけサポートに回ってくれ。」

俺とスランボーで攻撃する」

「あ、はい……」

「話してる場合ですか？」

突然、ノエルたちの頭上から巨大な火の玉が落ちてきた。

「危ない！！」

ノエルはとっさに二人をかばった。

火の玉はノエルを包み爆発した。

「ノ、ノエルさん！」「ピキーツ！」「」

「だ、大丈夫だ……。それよりも周りを良く見てみな」

フィーナが周りを見ると、目の前にゲマ、そしてそれを取り囲むように武器を構えている村人たちがいた。

「！」「な、ヤベエだろ」「ど、どうすれば……」

「村人を攻撃しないようにゲマを攻撃する。これだけだ」

ノエルは立ち上がった。その背中焦げている。

「かまいたち、爆裂拳、せいけん突き！！」

「ピキピキーツ！！」

ノエルは素手技を連発し、スランボーは突進で攻撃した。

「ござかしい！」

ゲマは死神の鎌を振り回した。

「スランボー、掴まれ！」

ノエルはスランボーを掴み、軽やかに攻撃を避けた。

「チート能力、オート見切り！」

「ピ、ピオリム！」

フィーナがピオリムを使い、ノエルのスピードを更に上げた。

「よっしゃ、燃えるぜバーニング！」

メラミをスランボーにあて、炎を上げる。そしてその状態でスランボーが突進するという合体技だ。

「名付けて、『スラ・バーニング』！」

(……そんなこと考える余裕があったんだ)

つくづく不思議な人だなあ……と、フィーナは思った。

スラ・バーニングは敵の腹部に見事に当たり、小さな爆発を起こした。

「ぐっ……コレでトドメだ！ カ〜メ〜ハ〜メ〜……「マゲ様に手を出すな！」なに!?!」

ノエルは村人達によって取り囲まれてしまい、確実に「ゲマだけ」を狙う事ができなくなってしまった。

ノエルは慌てて手を閉じてしまい、溜めていた「気」は手の中で暴発した。

「オワチツ！」「いまだ！」「……おい！」

羽い絞めにされ、ノエルは動けなくなった。 目の前には様々な武器が刃を向けている。

「やっちまえ！」 「オーーーーー」

村人達は武器を構えながら突進した。

「チツ！ しょうがねえ……『絶』！」

ノエルは瞬く間に消え、村人達の武器はノエルを羽い絞めにしていた男に刺さった。

「！」

無数の刃が刺さり、男は体中から血を吹き出しながら倒れた。

しかし村人達は気にしていなかった。

「あの小僧はどこだ！」 「知らねえ！」

「なにをしているのです。早くあやつを捕らえなさい」

「はっ！！」

しかしみつかるはずがない。「絶」は某ハンターの使う技で、完全に気配を消す事ができる。さらにノエルのチート能力を上乗せして、すり抜け効果も追加された完璧な技だ。

(トドメだ…… ジゴデイン！！)

無数の雷が一齐にゲマを襲い、その後地面から激しい放電が起こった。

「グギヤアアアアア……！！！」

「マゲ様！！」

放電が終わった後、ゲマは瞬く間に消えていった。

「……『絶・解』」

……バトルモード、終了。

第三話 初バトルⅡ初ボス!? (後書き)

藤「ボス戦終了!」

ノ「なんか、超いいかげんなとこで切れてるんだけど……」

藤「気にしない気にしない」

ノ「はつきり言わせてもらおう」

藤「……………」

ノ「村人一人死んでるじゃねえかよ!」

藤「まあ、そこは不可抗力ってことで」

ノ「納得いくか! それにあとの二人の見せ場が全くなかったぞ!」

藤「…………え〜、次回予告に入ります」

ノ「無視すんな!」

藤「今回はエリクス村追放。 ……以上」

ノ「それだけかよ!」

藤「それでは、また次回!」

ノ「やっぱりお前、今死んどく？（青きじ風に）」

藤「いや、まだ……」

ノ「アイスエイジ氷河時代」

……返事がない、ただの氷のようだ。

第四話　オアシスと機関銃（前書き）

ノ「タイトルネタばれじゃね？」

藤「気にするな」

第四話 オアシスと機関銃

さて、これからどうするかな……。

「す、すみません…… お水を……」

「ん？ ああ、わかった」

俺はフィーナに水筒を投げ渡した。

ここで、現状説明をしようと思う。

いま、俺達は砂漠のど真ん中にいる。

理由？ 村からの永久追放に決まってるじゃん。

なんせ村の連中が酔信仰しちまっていたやつを消しちまっただからな。

「スランポー、お前も飲めるときに飲んどけ。 特にお前、見た目からして水分減ったらやばいんだろ？」

「ピ、ピキ……」

気力なしながらも水を飲む。 ……そういや、スライムって飯食ったあとどこに入るんだ？

ちなみにスランボーが飲んだ分で水はもう底を尽きた。

「あの…… ここはどのへんなのでしょうか……」

「分からん。 ころ暑くちゃ能力使ったとたんにぶっ倒れかねんからな……。 せめてオアシスでもあればな……」

ま、そんな簡単に見つかるわけないか。

「あの…… この音は一体……」

音？ なんか聞こえるか？

耳を澄ませば、水の音が聞こえる……。 …… 水……！！

俺は暑さも忘れてダッシュしてしまった。 フィーナとスランボーを抱えて。

砂漠に生い茂る樹木！ 草！ そして本命の水……！！

「よし……！ フィーナ、スランボー！ 飲めるだけ飲んどけ！ 腹を壊しても飲んでおけ！ これは見たところ湧き水だからな。 いくら飲んでも減る事はないだろう！」

俺は果実でも探しに行くか。 この辺でなら能力使っても平気そうだし。

~~~~~ファイナ side~~~~~

ノエルに言われたとおり、飲めるだけ飲んだ。そして水筒に水を淹れた。

でも、なぜか嫌な予感がしてならない。人間が忘れた動物の直感ってやつ？

それに水や木々以外にまだ何かが……いる。

ノエル大丈夫だといいけど……。

~~~~~ノエル side~~~~~

Why? なにがどうなってるんだ？

木から取ったときにはまだ何ともなかった果物(?)がついさつき見たら蜂の巣になってたんだぜ？

しかも俺の腕から血が出ていたし……もしかして俺、狙われてる？

そういやさつきからなぜか俺の頭上にヤシの実(?)が落ちてくるし、変な音が聞こえてるし、いまも聞こえるしってか近づいてるし！

バリバリバリバリバ……ってマシンガン機関銃！？

ちょっと待てよおい！ ドラクエには銃とか電波とか飛空艇とかそういう科学系統のモノは一切ないはずだぞ！！

あ、スロウやストップはダメだよ。

作品的に違うから。

いやいや、マジでなんだっけ！

やべーよ、こっつしてる間にも死にかねん！

もう、作品なんて気にするかあああ！！

「カチッ加速装置！！」

加速してみても分かった。

まさか撃って来たやつがあいつだったとは……。

狙撃手の正体

……急ごう、これが続いてる間しかチャンスがない！

「トベルーラ！」

俺は空中に飛び、あの二人と水筒を掴み無限の彼方へと飛んでいった。

……実際、どこまで行けるか分からない。

第四話 オアシスと機関銃（後書き）

ノ「……なんで砂漠なんだよ！」

藤「あ、ツツコミそっち？」

ノ「他にもまだまだあるぞ！
黒沢の説明の「14のはず」ってなんだよ！」

藤「……ノエル君、君いま何歳？」

ノ「あ？ 14だろ？」

藤「きみは一度転生した身だよ。だから異世界にいるあいだは10歳」

ノ「なんでだよ！」

ファイ「え？ ノエルって、10歳だったんですか？」

ノ「認めねえ、認めねえぞそんなこと！」

藤「ま、そういうことで……
ちなみに「素早さを下げる技」は素で思いつきり忘れていました。すみません！」

ファイ「それではまた次回……」

ノ「認めねえぞ！……！……！」

フィ「まだ言ってる……！」

第五話 死ねばいいのに(前書き)

ノ「タイトル怖え!!」

藤「これはこの話でのお前の心境だ」

ノ「作者の趣味がよ~~~~~
だからな!」

~~~~~  
く、分かる話

## 第五話 死ねばいいのに

オアシスから遠く離れ、俺達は超・炎天下の空を飛んでいる。

「あの…… どうしたんですか？」

「その説明は後だ。今はこの砂漠から抜けることを優先させる」

「は…… はい」

でもな…… いくらなんでも限界ってモンがある。それに  
この調子だと抜けるにはまだしばらくかかる。

あいつがどんなことをできるのかは知らないが、とりあえず空を飛ぶ事ぐらいはできるだろう。

この炎天下の上空でぶっ放されたらたまらん。

今は逃げるのみ！



……もうだめ、地図によればこの先に城が……  
でもつく前に、死ぬ。

今俺達は…… 歩いている。

このまま当て所なく空中をさまよっていらちが明かない……  
だから残りの体力使って地図を広げた……  
そして空から落ちた。

このままだと、ヤツが……

「……逃げられると思ったのですが、ノエル」

噂をすれば…… 来なくていいよ……。

「YOU MUST GO TO THE HELL (地獄に落ちろ)」

「撃つなああああああああ……!」

~~~~~5時間後~~~~~

気が付くと、俺は牢屋の中で鎖につながれていた。
奴隷の服で。

ちなみに

なんでこうなった？

「目が覚めたか」

檻越しに牢番に話しかけられた。

「お前がこの城に来たときは本当に驚いたよ。
女の子とスライムがはこんできたんだからな」

なんたって、

「あいつらが!?!」

「本当なら見逃してやったほうがいいんだろうけど、魔物と一緒にいるとなると魔王軍の一味かもしれないからな。以上、お前の現状説明」

……つまり誤解か。

「……あの二人(?)は？」

「女の子のほうは王様のところにいる。王は女好きだからな」

ちょｗｗｗｗ それってどこのエ○ガー？

「スランボーは？」

「あの魔物か？ あれはもうすぐ二酸化炭素と化するだろうな」

……

「てめえ、いまからぶつ殺す」

「ぶつ、つながれている状態でどうやって「俺のこの手が光ってうなる！ お前を殺せと輝き叫ぶ！ 必殺！ シャアアアアイニングフィンガアアアア！！」な……！」

両腕の鎖をぶつ飛ばし、鉄檻にでかい穴を開け、光の速さで牢番を吹っ飛ばした！

人の仲間勝手に抹消するんじゃないやねえ！！

俺はそのまま一気にダッシュした。

しばらくして、俺は玉座と思しき場所へ来た。

え？ 見回りの連中？ なにそれ強いのか？

「や、やめてください！」

「なんでやめるんだい？ こんな可愛い娘ちゃん目の前にして何をやるの？」おい、このロリコン野郎「え？」

作成・魔人の斧メイク

「……チート能力、呪い無効だけど装備可能！ 魔人斬り！」

俺は王を、殺した。

……あれ？ 殺した？

「あの…… 殺すことはなかったのでは？」

「……ああ、俺も今そう思った」

王を殺したという事でもものすごくヤバイだろう。
長い間いる事はできねえな。

この国に

「おし！！ 気を取り直してスランボー救出に向かうぞ！」

「は、はい！ ……あ、ちょっと待って」

「？」

「わたしのこの格好、何とかならないかな……？」

格好？ ……言われてはじめて気づいた。

「なんで下着姿なんだよ！！！」

「ノエルが来る数秒前よ！ あの男に服破られたんだから！！」

……作者ぶつ殺す！

そしてこの変態王^{キング}！ ロリコンは犯罪ですぞ！！

それから読者の皆さんが変な妄想しないように……

「……これでも着てる」

俺は自分が来ていた奴隷の服を脱いで彼女に渡した。

「え、いや、でも、ノエルは？」

「俺はこれでも男だぜ!？」

男なら裸一貫!!(一応パンツははいてるけどな)

「いいから急げ。見回りが来るはずもねえが、誰かに見られたくないんだろ？」

ちなみに牢屋からここまでの見回りは俺が全滅させました(気絶な)

~~~~~廊下~~~~~

「で、俺たちはどうしてここにいるんだ？」

ちなみに走りながら聞いている。

「どうしてもなにも、ノエルがいきなり倒れたのよ!？」

「は？」

機関銃マシンガン持つてる女がいたんじゃないの?」

「……あそこにいたのはミステリドール9体よ。出てきていきなりマヌーサ使ってきたからそれじゃない?」

……ミステリドール、次見かけたら木端微塵にしてやる。

## 第五話 死ねばいいのに(後書き)

ノ「小説内でも言ったがもう一度言う、作者ぶつ殺す!!!」

フィ「捕獲!」

藤「H A N A S E」

ノ「お前がこういつやっだってことはよ~~~~~く、分かった!」

藤「ひい!! 死ぬ前にこれだけはいわせてくれ!!」

ノ「なんだ?」

藤「感想、リクをくださった「きのこ」さん、「風」さん、「クロウド」さん、「トツシー」さん、ありがとうございます。参考  
にさせていただきます!」  
それから今後ともよろしくお願い致します!」

ノ「作成メイク・日本刀。 ……斬ざん!」

スパツ!

フィ「あ、これニセモノですよ!?!」

ノ「なんだと! こいつ、うる〇やつらのガム噛んでやがったのか!」



藤「読者の皆様をお願い致します。  
でください！」

変な妄想は決してしない

**第六話 スランボー救出作戦！！（前書き）**

第六話再投稿しました。

前のはすこし違いますのでご了承ください。

## 第六話 スランボー救出作戦！！

俺たちは今、走っている。

仲間を助けるために走っている。

でもよくよく考えたらスランボーと一緒に行動してるからこうなっ  
たんだよな……。

いやでも、スランボーは俺たちの大切な仲間だ！

「な、なんだ貴様ら！！！」

「ここから先は通さんぞ！！！」

あーもう、うるさい！！

作成・稲妻メイクの剣

「ギガスラッシュュ！！！！」

兵士撲滅！！

「フィーナ、準備はいいか」

「はい！！ スランボーちゃんを、助けます！！！」

俺たちは、処刑場へ続く扉をくぐった。

~~~~~処刑場~~~~~

処刑所についたときは、ちょうどスランボーが焼却炉に突っ込まれるところだった。

「よし、突っ込め!!」

「「「ヒーーーーッ!!」「」」

……どこのショッカーだお前ら。

「おい、てめえら……!!」

「「「……え?」「」」

「人の仲間…… 勝手に抹消すんじゃないやねえ!!」 イオナズン!
「!」

もちろん、スランボーには当てないようにした。

「「「ギヤアアアアアアア!!」「」」

敵はほぼ抹消。 残るは少しとなった。

「な、なんで貴様が牢から出てるのだ!!」

「さあ、なんででしょう?」

「え、え、え、衛兵！ 衛兵！！」

突然、処刑場の奥からほかの兵士達がわんさと出てきた。

……来なくていいよ。

「ご、ご、ご、こいつらの首を斬れ！！ 手段は問わん！！」

「くくヒーーーーーッ！！！！」

だからどこのショッカーだよ！！

でも参ったな……。いくらチートでも、身体は生身だ。この数千という兵士どもを相手にするのは……。

……無謀だ。

フィーナもいるけど補助が基本だからちよつと厳しい。

「やれーーーーー！！！！！！」

って考えてる間に来た！！

「……バギ、バギマ、バギクロス、バギムーチョ！！！！！！」

……え？ なんで目の前の連中がバタバタと倒れていくの？

「油断すんな！！ 今は目の前の目標だけを見る！！」

フィーナの声だが、口調が全然違う。

「お前、誰だ？」

「それは後だ。いいからまずはあのスライムを助けるんだろ？」

なんかよくわからんが、戦力にはなりそうだ。

そして、見間違いかもしれないが、フィーナの目が茶色っぽくなつてた気がした。

まあ、いいか。いまはスランボー救出の事だけを考えよう。

「ギガスラツシュ、ギガブレイク、ジゴスラツシュ！！！」

「マヒアロス、イオナロス、メラゾロス！！！」

雷の斬撃とバギクロス+その他呪文が、兵士どもをなぎ払い、一気に引き裂いた（悪いものでは5体バラバラ）。

「そいつを渡しなさい」

「ひっ！」

「おとなしく渡せばあなたに危害は加えないわ」

……いや、ここまでしておいて（ちなみにスランボーを持ってるやつは無傷）危害を加えないってのを信じろってのは無理があるぞ。

「なあ、どっしりする？」

「く、くそっ！」

兵士はスランボーをフィーナに渡した。

「覚えてろよ！！ 魔王軍め！！！」

……どうやら勘違いされたらしい。 そりゃ、スランボーのためにここまでしたようなもんだけどな。

「……大丈夫？」

「ピ……」

「どづした？」

「……ノエル、あいつをこの部屋から出すな」

「え？」

「早くしろ！！！」

いきなり怒鳴られ、俺は言われるがままに兵士Aを確保した。

「な、なにをする……！！」

「いや、俺自身もよくわからねえが…… 拷問だな」

「ひい！！！」

冗談だけどな。

「兵士A！！　お前は私を怒らせた！！　昇天呪文・ニフラー
ヤー！！」

兵士Aはまもなく逝った。

ちなみにニフラーヤは現世に縛られている靈魂をあらゆる呪縛から
解き放ち、あの世へと送り届けるための呪文なのだが……　どう
やら一般人にも効くようだ。

「……で、一件落着いたところで聞かせてもらおうか。　お前が
何者なのか」

大体見当はつくけど。

「いいだろう。　……私は、もう一人のフィーナ。　名は『エ
ール』。」

OKOK。　これで分かった。　つまりフィーナは多重人格者
って訳か。

「では、そろそろ行くこうではないか。　早くしないとまたやかま
しいのが来るぞ」

俺たちはステルスを使って、この城を脱出した。

第六話 スランボー救出作戦！！（後書き）

藤「フィーナ多重人格者確定！！」

ノ「なんかエール怖かった……」

藤「フィーナのイメージとは真逆だからね」

番外編 祝 5000アクセス!

藤「祝 PV5000アクセス、ユニーク1000アクセス!」

ノ「……それは現時点で多いのか、少ないのか?」

藤「個人的に六話目でここまでいくのは初めてなもんで」

ノ「なるほどな」

藤「では、これに祝して人物紹介でもしていきましょう!」

ノ「まだ数え切れるほどしかないぞ」

藤「いいのいいの」

かみやのえる
神谷聖夜
です。

() 内は転生前

999が最大

性別：男(男?)

年齢：10(14)

髪の色：黒と茶の間

目の色：茶

攻撃力：555

守備力：333

素早さ：111

魔力：444

魔防：222

固有スキル：ほぼ全ての技を使うことができ、武器を作る事ができる。

説明：もといた世界での下校中に雷に打たれ、間もなく死亡。

神を名乗るおっさんからほぼ無理やりな交換条件を出され、転生し、チート能力を手に入れた。その代わりに異空間移動を

しながら、神の依頼をこなさねばならなくなった。現在、

ドラクエを攻略中。どの世界でもチート能力は使えるが、

本人はできるだけ世界観に影響を与えないようにしている。

しかし裏の人（作者）により、無理やり使わされることもしばしば。ものすごく仲間思いで、仲間のためなら身をも滅ぼし

かねない。

ノ「……」

藤「どうですか？」

フィ「ノエルの裏の人って、作者さんだったのですか？」

ノ「殺す」

藤「いや、僕を殺したらお前も死ぬぞ!？」

ノ「……ふん! とつとと次ぎ行け!」

藤「はいはい」

ファイナ（エール）・アルノミア

（内はエールモード）

性別：女（女）

年齢：15（15）

髪の色：青と水色の中間

目の色：翡翠（琥珀）

攻撃力：60（750）

守備力：70（555）

素早さ：100（500）

魔力：150（888）

魔防：200（710）

固有スキル：ぶち切れ時、人格変化。

説明：エリクス村出身の少女。幼い頃に両親を失い、それから10年後の村の祭りでノエルたちと出会い、共に旅をすることになった。15歳だがとても魅力的らしく、ロリコンなら誰でも手を出してしまいそうになるらしい。ぶち切れると人格が変わり、ステータスが大幅に変化する。そして本来なら使えないはずの技も使えてしまう。

フィ「ロ……ロリコンって、貴様、殺していいか？」

藤「なぞ」ただでさえ読者が減ってるかもしれないこの状況でそんな問題発言すんな！！」「ひいひい！！」

フィ「お、落ち着いてくださ「わざわざ読者逃がすような事しやが
つてよお」落ち着けといってるだろ!」

藤・ノ「「……………でた」

エ「まったく、もし今度フィーナがこの前のような目に合っていたら
ノエル、貴様が助ければいいだろ!」

ノ「は、はひ……………」

エ「それから作者も! ……これ以上迷惑かけんじゃねえ!」

藤「す、すみません」

フィ「……………では、次ぎ行きましょう」

スランボー

性別：？

年齢：？

髪の色：髪……………？

目の色：黒

攻撃力：180

守備力：70

素早さ：100

魔力：46

魔防：55

固有スキル：?????

説明：この世界での始めてのノエルの仲間。
こい。 なぜか灼熱の炎が使える。

なぜか人懐っ

ス「ピキー？」

ノ「……これだけ？」

藤「詳細不明ですからね」

フィ「禁則事項といったところでしょうか」

ノ「言うな！」

藤「いまのところ、これだけですな」

ノ「……おい、黒沢くろさわは？」

藤「彼女は仲間じゃない」ステータスネタばれ」

ノ「それだけ……？」

藤「まあ、そうです。
くお願いします」

それでは次回は本編なので、よろし

フィ「ではでは」

ノ「もうこれ以上問題ないようにしないうちにしますんで……。

一応、「残酷描写」以外の制限つけてないんだぞ？」

藤「わかってます。 ではありません」

第七話 次元の法則が乱れる！！

どーもです。 ノエルです。

現在逃亡中です。

別にEX LEな人達に追いかけてるわけじゃないけど、まあ状況が状況だから。

「全然隠せてませんよ」

「……何を？」

「文字です」

そこはつつこまないでもらいたい。 ちなみに今俺らは砂漠を抜け、そのすぐそばにあった民家に居候させてもらっている。

そしてはやくも三日がたち……

「ノエル君、これ手伝ってくれないか？」

「あ、ああ」

この家に住んでいる発明家、リベロに呼ばれた。 ちなみに17らしい。

俺はリベロの部屋についた。

「で、何すりゃいいんだ？」

「これなんだが……」

リベロが俺に手渡したのは、超・魔道士の杖だ。

なんと杖を振るだけでメラゾーマがでるらしい！
歩くとき大変じゃないのか？

……持ち

リベロは壁の近くに置いた的に向けて杖を振った。

おお〜！

たしかにメラゾーマだ！

……でもなんでし

ターンしてこっちに向かってくる？

「おわあああああああ！！！！」

「すまん、これが結果だ」

なんで俺は炎に恵まれないんだ？

実を言うとこの三日間、スランポーの特訓に付き合っ(？)あいつの灼熱の炎を食らいまくった。なんで真っ直ぐ撃つたはずなのにこっちに向かってくるのやら……。

「そこでだ、ノエル、これはどうすればいいか知らないか？」

「……ちよつと見せる」

俺は超・魔道士の杖を受け取った。

魔道士の杖の数倍重い。

どこがおかしいのかはすぐに分かった。

「ここだ」

「え？」

「この魔石の魔力が強すぎる。杖という道具だけで魔法をコントロールするには魔力のバランスを考えなきゃいけない」

「な、なるほど」それからこのネジが足りない。あとこことここの間が0.27mmずれている。

ここからここまで1mmもずらさずに聖水をかけるべし。賢者の聖水ならもつとOK。それからゴムゴ○の実を磨り潰したものを杖の本体に加工するべき。それから「いやいやちよつと待て。ゴムゴ○の実ってなんですか！？ どうして定規もないのに何mmずれてるかなんてわかるんだよ！ 賢者の聖水なんてそんな簡単に手に入らないぞ！？」

いや、ゴムゴ○の実を知らないなんて…… 発明家失格だぞ！？

「それは君の感覚だろう！？」

……そうかもな。よくよく考えたらこの世界には無いんだっけ。

「あ、そうだ。これ作ったんだけど、よかったらノエルにあげるよ」

「え、いいのか？ 居候させてもらってる上にそんなことまで……」

「いいのいいの、気にするな。
応確認はとったから」

まだ試作品だけど、一

「サンキュ。」

……これは一体どういものなんだ？」

受け取ったものは、小型のロボットだった。
見た目は女。

ちなみに

「名前はレイア。」

簡単に言うと主人をいつでもどこで

もサポートする人工知能を積んだロボット。

だからお

そらくきつともしかしたらノエルの助けになるかも」

……自信なさげだな、おい。

そして気になる事がある。

……ロボットだと、人工知

能だと!?

なんでんなもんがこの世界にある!!

「ま、ものは試した。

起動させてみてくれ」

「あ、ああ」

俺はレイアを起動させた。

「……………System Check……………
Mat Complete……………For

……………」

『……始めまして。 あなたが私のマスターですね。 私
の名前はレイア。 マスターをどこまでもお守りいたします』

「おう。 俺は神谷^{かみやのえり}聖夜。 ノエルでいいぜ」

『わかりました。 ではマスター、これからよろしくお願
いします』

だからノエルでいいって。 フィーナだって今も敬語だけ
ど普通に話してくれるぞ。

それから、今日の夜には神のおっさんのところに行かねえとな。
なんかもう次元がめちゃくちゃになっていやがる。

……にしても、また増えちまったな。

なにがって、仲間がだよ！！

第七話 次元の法則が 乱れる！！（後書き）

ノ「ちょっと……じゃなくてかなりgdgdだったな」

藤「すみません」

ノ「レイアって、どういうキャラなんだ？」

藤「女性の人工知能を積んだ、主に地獄の底までついてゆく守護者。

他にも機能はあるが、まだ秘密だ」

ノ「ま、いいか。 って、俺が聞きたかったのはあの堅苦し

い喋り方はどうにかなんねえのか？」

レ『すみませんでした、マスター』

ノ「いや、お前のせいじゃなくてこの駄作者のせいだ」

藤「すみませんでした」

第八話 剣と魔法と幻想の星

~~~~~夢の中~~~~~

「おい、じいさん」

「? なんじゃ?」

最近、俺は夢の中でなら神のじいさんと通信する事ができるようになった。ま、ほとんどが現状説明だったけどな。

「じつはあんたに聞きたいことがあってな」

「だから、なにをじゃ?」

「……俺が今いる世界って、ドラクエだよな?」

「ああ」

「なんでドラクエなのに現代社会みたいな科学技術があるんだよ!」  
「!」

ドラクエは剣と魔法の世界! それ以外はドラクエと言わん!

「あんたなら何か知ってるんじゃないのかと思ってね」

もう俺でも分かるくらいに滅茶苦茶になってるんだ。      だか  
ら自称神様ならもうとっくになんか掴んでるだろう。

「……………」

「答えるよ」

「……………分かった。                  できる限りは話そう。                  でも禁則事項というものもあるのではな」

こんな髭ぼうぼうのじいさんに禁則事項とか言われても……………逆にいやだ。

「恥ずかしい事なのじゃが、実は干渉者<sup>かんじょうしや</sup>が現れての」

「干渉者!?!」

「そうじゃ。                  お主も一度出会っているだろう」

「は?」

干渉者に出会ってる!?!                  そんなやつ……………

「……………黒沢か?                  あいつが干渉者なのか?」

「ああ。                  黒沢夏帆も干渉者の一人だ」

「マジで!?!」

つてかなんだよこの急展開!                  干渉者とか何そのバトルマ  
ンガのお決まりみたいいな!

「干渉者は様々な世界にたくさんいる。                  そして彼らは世

界を一つに繋げようとしておる。                   しかしそんなことをしては世界の均衡は崩れ、全世界が崩壊し、すべてが消滅する。

お主を選んだのは「その干渉者を止めるため、だろ？」その通りじゃ」

「だからこんなチート能力預けたのか。                   ただたんに転生するだけだったらそんな能力無用だからな」

「呑み込みが早くて話がしやすい。                   やはりお主を選んだのは正解じゃったよ」

まさかそれだけの理由か!?

「いやいや違う。                   キミの生き方と素質から選んだのじゃ」

「ま、いいけどよ。                   ……あ、忘れてた。                   最初の

質問に戻るが、今俺がいる世界はどうなってるんだ?」

「いまそっちの世界は『ファンタシースター』の技術が取り込まれておる。                   ちなみにお主に依頼したことじゃが、その人

間はドラクエの世界での干渉者の頭なのじゃよ」

なるほどな。

「じゃ、また今度な。                   俺はそろそろ戻るぜ」

「達者でな」



~~~~~リベロの家の（一応）俺の部屋~~~~~

『マスター、そろそろ起きないと』

「ん？ ああ、ありがとう」

俺はレイアに起こされ、その後庭に出た。

……あれ？ 今日はやけに静かだな。

別にいつも騒がしいというわけではないけど、今日は笑えるくらいに静かだというか……。

……なんか、人が無い！

「まさか、誰もいない!？」

なにこのゴーストタウン現象！ まじで怖いらっているんな意味で！

俺は家に戻った。

「フィーナ！ スランボー！ リベロ！ どうしているんだ!！」

『どつやら誰もいないようですね』

俺が寝てる間に何が起こったんだ!？

『マスター、こんなところに書置きが!』

「なに!?!」

書置きにはこう書いてあった。

国王殺しの男に告げる。

お前の仲間は預かった。

開放してほしいければ日が沈むまでに王城の処刑場まで来い。

お前の首と交換だ。

少しでも遅れれば仲間の命は無い。

兵士長 ギレン

……やられた!
まさかじいさんとの通信中に奇襲を仕掛
けてくるとは!

それでもなんかあれば気づくはずだが……

「レイア、俺が寝た頃に何かしたか?」

「え、あ、はい。 いつマスターが狙われるのかわからな

いので、気配削除機能をあの部屋全体に使いました」

「……………効果は？」

『使用した範囲内の気配を完全に消し、姿も見えなくします。』

つまりあの部屋存在を一時的に消したという事です。

ですが範囲内の存在も範囲外の存在には気づかないというデメリットがあります』

お前のせいか！！

「……………いくぞレイア。」

別に今すぐじゃなくても大丈夫

だろうが、メ〇スみたいにギリギリもいやだからな」

『つまり、フィーナたちがセリヌ〇ティウスってわけですね』

「……………え？」

まあ、そうだな」

なぜだ！

なぜドラクエ出身(?)のコイツが知っている

！！

そんな疑問を残しつつ、俺たちはルーラで王城へ移動した。

第八話 剣と魔法と幻想の星（後書き）

ノ「驚いた！」

藤「なにに？」

ノ「レイアが元ネタを知っているとは、いったい何なんだよ！」

レ「もしかして、まずいことしました？」

ノ「いや、してない。むしろツツコミ役がいてありがたいんだけど」

藤「ま、フィーナたち救出できればいいけどね」

ノ「殺しはしねえよな？」

レ「マスター、殺気が……」

藤「ちなみにあと数日で学校が連休に入るのでその間更新できません」

レ「なぜ？と思う方は宿題です。次回の更新までに考えてきてください」

ノ「考えなくてもいいけどな」

藤「では、チャオ！」

第九話 レイアの戦闘能力ってwww(前書き)

藤「前回、しばらくのあいだ投稿できないって書いたんですけど…
… まだ一日あったので出しちゃいました」

ノ「兵士長コロス」

第九話 レイアの戦闘能力ってWWW

国王殺しの男に告げる。
お前の仲間は預かった。

開放してほしいければ日が沈むまでに王城の処刑場まで来い。
お前の首と交換だ。

少しでも遅ければ仲間の命は無い。

兵士長 ギレン

いいぜ
な。
その代わり兵士長、あんたの首と交換だけど
な。

俺たちは城門前で降りました。

「な、貴様は！」
「国王殺しの男！」

いきなり門番×2に出会いました。

「兵士長からのご命令だ！
貴様を殺せといわれたか
ら殺す！」

……なにそのロボットみたいな思考能力WWW
言われ
たから殺すってとんだけWWW

「「覚悟おおおおおおお!!!!!!」

二人は槍をこちらに向け、突進してきた。

……そんなものが俺に効くとも？

「……レイア、代わりによろしく」

『Yes, Master』

レイアは空中に舞い上がり集中し始めた。

『Target... Two peoples... We
apons are Lance... OK... All
complete』

「な、なんだ……？」

「なんかやばい予感がしますよ

先輩！」

『Launch, ABSOLUTE ZERO』

直訳すると「絶対零度」。

悲鳴の一つ上げずに凍りつ

いた門番達を見ると……

笑える。

「ごくらうさん。

じゃ、行こうか」

『はい、マスター』

俺たちは門を開け、城に入った。


~~~~~処刑場前~~~~~

さて、この扉を開けたら後戻りはできねえ。

「準備はいいか？」

『はい、マスター。』

マスターは大丈夫ですか？』

「ああ、大丈夫だ」

扉は音をたて開いた。

さあ、虐殺タイムが始まるよ~~~~~

「来たか、王殺しの男」

「あゝ、その呼び方やめてもらえませんか？  
ンさん」

兵士長のギレ

俺は今、兵士長の目の前にいる。

そしてその周り

を取り囲むようにして部下らしき連中が武器を構えている。

「あいつらは無事なんだろうな？」

「さあな、今後のお前の行動次第だ」

ちなみにギレンは銀髪で、どこことなく残忍な顔だ。

「まず、あいつらが無事だって事を証明してくれないか？」

「ああ、構わんよ。                    人質をここへ！」

ギレンの合図とともに俺の真上が開き、その中から鳥かご型のオリが降りてきた。

その中には猿ぐつわをされ、両腕両足を縛られたフィーナとりベロがいた。

……なんか、足りねえ！

「おい、お前！                    スランボーはどうした！」

「ああ、あの魔物ならそこにいるだろう。                    ほれ」

ギレンが指差したのは、やはりオリの中だ。

……なんか包帯でグルグル巻きにされた球体のものがある。

「あれか？」

「あれだ」

「キサマから血祭りだ」

「まあ待て。 さっきも言っただろう、お前の行動次第だとな」

卑怯なことしやがる！

「なにすりゃいいんだ？」

「ふっ、お前が抵抗せずに首をよこせばいいだけの話だ」

あの手紙どおりか。

……しょうがない。 いまのうちに首を渡す準備をしておくか。

「いいだろう。」

さっさとやれよ」

『マスター！？』

「大丈夫だから。 俺のことは守るな、今はな」

『マスター………』

「いい覚悟だな。 皆のものやれええええええええええええええええい！………！」

「「「お————ッ！………！」」」

そして、俺は何がなんだか分からないほど、武器で串刺しにされた。

え？ 首？ そんなもの渡せないほどひどいあり

さまだよ？

ホラー映画よりひどいよ？

「兵士長、首はもうなにがなんだかわからないほどですが……」

「構わん。 国王の仇を取れたのだからな。」

それより、あっちの人質もさっさと始末しろ」

「はっ！！」

オリが開かれ、中にいた全員がたたき出された。

「それでは、仲間と同じようにあの世へ葬ってやるづ。  
やれ」

武器が一斉に振り下ろされた。

そろそろ、出番かな？

「パラディンガード!!」

俺はパラディンガードを使い、フィーナたちの前に仁王立ちした。

「ふはははははははははは!!!!

今の俺は無敵だ

ああ!!」

「な、貴様、何故……!!」

フフフ…… 教えてやろう!!

さっき俺がグロイことになったのはすべて幻イ!

マヌ

ーサ使えばそれぐらい楽勝オ!!

そしてステルスつかって完全OK!

「風姿家伝!!」

俺は分身を作り、それにあいつらの猿ぐつわや縄を解いてもらった。

その間に俺は仁王立ちイ!

「ぶはっ!

ノエル!

無事だったの

ね!」

「まったく、まさかこんな事になるとはな」

「ピキーーーーッ!」

『よかった、本当によかった!』

全員集合!!

こんどこそ兵士全員デストロオオオー

ーーーーーイ!!!!!

完全無双モード、発動!!



第十話

ロリコンって言っけと手出したらっ重の票が待ち受けてるよ〜(前書

藤「帰ってきた〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜！！！！！！」

ノ「うるさい」

藤「そして久しぶりなので超・駄文です〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜！！！！！！」

ノ「だからうるさい」





ちなみに俺は斧を振り回して、レイアは氷やらなにやらを出しまくって、エールはバギムーチョ連発して、リベロはフィンガーフレアボムズのメラガイアー版発射しまくって、スランポーはとりあえずスラ・ストライクでパチンコ玉になっている。

「のぎゃあああああ!!!!」

「死ぬうううう!!!!」

「ぐわっ!!!!」

「なんでこんな呪文をそんなに!!!!!!」

ちなみに一番最後のはリベロのことだ。      リベロいわく  
これは、

「これはメラガイアーじゃない。      メラだ」

言ったああああ!!!!

……ま、そんなこんなで兵士は全滅。      残ったのは兵士長  
のみとなりました。

ちなみにこちらの危害は全体的にMPが10減ったくらいかな？

「さて、兵士長さん」

「ひいー!!」

そんなにビビるなって。

「う、動くな!」

「……別に動かなくてもお前を殺す事ぐらい可能だぞ?」

「ま、まで! どうして王を殺したのだ!」

……そういや、どうしてだっけ?

「……たしか、あの王がフィーナに手を出そうとしていたから、だつたっけ?」

「だ、だつたっけ? とはどういうことなんだ!!」

お前は一国の王を殺し、その上忠実なる兵士達をも虐殺しているのだぞ!」

「……あの国王は、いままでに何人の女に手を出してきた?」

「わ、分かん。 しかし分かる限りではざつと……」

99人ほど」

「分かる限り」ってことはそれ以上か。

「女王はいねえのか?」

「いや、王にはいない。」

だが王は『すべてのナオンは俺

のもの……!』と言っていてな」

……ここはモテ王国ですか？

「この国の法律がどうなのかわからねえけど、一つ教えてやる。

俺がいた国では、女にムリヤリ手を出した場合強姦罪で刑務所行き。

それが16歳未満の子供になったら児童虐待強姦罪、16歳未満なのでアウト。以上3重の罪で刑務所行きだ」

いや、あんまり覚えてねえけどヨ、だいたいはあってるだろ？

「ま、裁判に行く前に俺がこの手で死刑にしたってわけだ。

……あなたには何の恨みも無いけど、俺の仲間を傷つけたという事で、死んでくれ」

俺は一步踏み出た。

「え、衛兵!!」

特殊部隊、いまだ!」

扉の外から機械音が聞こえてきた。……いやな予感しかしねえ。

ボタン!!

扉が開くとそこに待ち受けていたのは……

キャスト!?

それもなんとまあ大量に。

そういやじいさん、「ファンタシースター」と繋がってるって言うてたな。

まさかこんなにも早く出てくるとは……。

あ、でも心配ねえか。 さつき扉のすぐ横の柱に仕掛け  
ておいた赤外線式プラスチック爆弾が……。

「トラップを発見。 直ちに排除します」

バンツ！！

……そうでした。 バレるんでした。

じゃあ、

「……吹っ飛べ。 バシルーラ」

さようなら。 星になれよ。

「な、あれほどの数を！」

「じゃ、死んでくれる？」

俺はまた一歩踏み出た。

「ま、待て！ こいつがどうなっても」

そっついながら腰につけていた鞭でリベロを引き寄せた。

「え？」 「あっちゃー」

「……いいのか!？」

リベロの首元にナイフを突きつけて言った。

「た、助けて」

……残念ながらあの体制では魔法をぶつ放す事もできないし、足の甲を踏み潰すこともできない。

ここは、奥の手！

「さあ、おとなしく次の衛兵が来るのをまつてろ！  
ないとこいつの命は無いぞ」

さも

「お、お願いだ」ああ、別にいいよ」「……え!?!」

どうやらうまくいきそうだな。

「だから言っただろ？」

別にいいって

「ええ、そいつ仲間じゃないし」

「「え!?!?!」」

『いままでありがとついでにありがとうございました。』  
「れません」

あなたのことは

「な……な……な……」

「ラリホー」

兵士長は眠りについた。

ナイフは手から落ち、床に転が

った。

「二人とも、ナイス演技！」

俺が親指を立てると、二人も立て返してきた。

「ひ、ヒデエよ……。」

もっと別の方法はなかったの

か!?!」

ま、無かったといひましようか。

「それより、さっさと行くぞ。」

「こんどはもっと遠くにな」

俺たちはまたばれないようにして城から脱出した。

……え？

兵士長？

ああ、殺した

よ転がっていたナイフ使って。

## 第十話

ロリコンって言うけど手出したら3重の罠が待ち受けてるよ〜

（後書

ノ「本当に駄文でg d g dだったな」

藤「恐らくわかりにくかった点多かったでしょう。

ス

ミマセン」

ノ「ところで俺って今、殺し屋みたいな立場になってるのか？」

藤「わかりません」

ノ「わかんねえのかよ!！」

藤「ま、ドラクエだからできるわけですから。入ったら人を殺すなんてできませんよ」

第二章に

103

ノ「まじで! 　　ってか、それならチート能力どうなる!」

藤「それではまた次回〜」

ノ「おい!！」



第十一話 3億の男になりました(前書き)

ノ「なっちゃんいました」

藤「ま、当然だよね」

ノ「人殺しまくってるもんね」

## 第十一話 3億の男になりました

野を越え山越え谷を越え、干渉者の親玉ぶった押すため、俺は今、ちよつとした田舎に来ている。

……なんか、どっかで見たようなマップなんですけど。

武器屋防具屋道具屋教会をすべておじいさん一人で廻している……

まじで見覚えがあるんですけど。

「どうかしたのか？」

「いや、なんでもない」

とりあえず宿でも取るか。

一応なんか国際指名手配犯になってるらしいけど、さすがにここまでは…… ないよね？

ちなみに俺の首にかかっている額、3億Gだった。

ま、この世界に来ていきなり人（じゃないが一応そうなってるらしい）殺してるしね

ここの掲示板みるかぎりだとここまでは知れ渡ってないらしい。

うん、OKOK。 ここに載ってる指名手配犯は「ソロ」ってやつしかいないもん。

「すみませんが、部屋開いてます？」

俺は係りの女性に聞いた。

「あ、申し訳ありません。ただいま部屋は準備できません」

「あ……　そうですか。　わかりました」

……どうしよう、野宿か？　いや、夜の森ってのも危険だし……。

「あ、あのさ……　この『ソロ』って、天空の勇者ソロじゃね！？」

リベロが突然訳の分からない事を聞いてきた。

「んな訳ねえだろ。　なんで勇者が指名手配犯になるんだ」

「いや、でも、モニタージュもそっくりだし、特徴も……」

「他人の空似じゃね？」

「わたしもそう思います。　だっていくらなんでもなんで勇者が……」

だよな。　勇者が事件起こしてたら大変な事になる。

『マスター、ちょっといいですか？』

「ん？　なんだ？」

『解析したところ、この人はリベロの言うとおり、勇者だということ  
とわかりました』

な、なんですと!!

なにが起こった勇者よ!

「な、なんでまた勇者が……」

『事情聴取してみるしかないと思います』

……なんで勇者が? っていうか最近昼間でも暗くなって

いるが、なんか関係あるのか?

っていうか、事情聴取って、下手に動いたらこっちが狩られるって。

「しょうがねえ、じゃあこうしよう。 フィーナとリベロは

南側、俺とレイアが北側だ。 スランポーはこの村にいる魔

物から情報入手してくれ。 一時間後に集合だ」

「了解!」

俺たちは宿屋を出て、それぞれの探索場所に移動した。

~~~~~30分後~~~~~

「だいぶ集まったな」

『ええ。 ですが、どれも曖昧なものばかりですね』

まあ、そうだよな。

「この村に勇者と深い関係がある人間がいればいいんだけど」『マスター、あれを見てください！』は？」

レイアが指差した方向には、スランボーがいた。 そし

てそのスランボーとなにやら楽しげに話しているのは……

女の人！？ しかもエルフだ。

……やっと思い出した。 やつですよ。

ここは、「ロザリーヒル」！

そしてロザリーがいるってことは恐らくピサロもいるはずだ。

そして悪漢どもに襲われていないところを見ると裏シナリオ終了後
だろう。

だったらロザリーやピサロに話を聞けば……！

「おい、スランボー。 なにやってんだ？」

「ピキッ？」

「あ、すみません。 この子、あなたの仲間ですか？」

「ああ、そうだけど……　　さっきいつと話していたところを見るともしかして、魔物と話せる?」

「はい。　　できますよ」

「へへ、やっぱりそうなんだ」

『マスター』

レイアは俺の袖を引っ張った。　　そうだった、こんな話をするんじゃないかと。

「ところで、聞きたいことがあるんだけど……　　時間ある?」

「はい、ありますけど……　　聞きたいことは?」

「さっき宿屋の掲示板で見たんだけど、あそこにある指名手配犯のソロってもしかして……」

「……そうです。　　あの勇者ソロです」

「やっぱり、か」

「でも、あの人は絶対指名手配になるようなことはしません!

きつとなにか理由があるのだと思います!」

そうか、ソロは信頼されてるんだ。　　だったら尚更、真相を確かめないとな。

「いま、勇者はどこにいるか、わかる？」

「いいえ、すみませんがそこまでは……」

まあ、それが当然だろう。

「……あ、もしかしたら」

「なにか心当たりでも？」

「はい。もしかしたら、ピサロ様ならご存知かもしれませんが……」

「わかった。じゃあ、探してみるよ」

「あの、あなたのお名前は？」

「俺はノエルだ。それじゃ、もしかしたらまたこんど」

「はい」

「行くぞスランポー」

「ピキッ！」

俺たちはロザリーと別れ、ピサロを探す事にした。

……ところで、どこにいけば会えるんだ？

そしてなんか火薬くさいというか……。

……火薬！？

「レイア、この火薬のにおい、どこからかわからないか！？」

『……門のほうです！！』

「サンキュ！！」

俺達は門に向かってダッシュした。

……そこには、燃え盛る炎と、無数の魔物の姿があった。

第十一話 3億の男になりました（後書き）

藤「やっとロザリーヒルに来ましたよ」

ノ「やっと!？」

藤「実はこのロザリーヒル編（または「指名手配犯ソロ編」）はこの小説を書き始めた頃から考えていたんですよ」

ノ「なる」

藤「というか、もうそろそろドラクエ編が終盤に差し掛かっています」

ノ「はやつ!!」 まだ十一話だぞ!!」

藤「いや、でもこのロザリーヒル編（または「指名手配犯ソロ編」）だけで約十話以上は費やすつもりなので……」

ノ「長つ!!」

藤「うん、まあそういうことで。 ちなみに第二章の世界はもう決まっています」

ノ「ま、次回がどうなるのか分かる人はわかるだろう」

藤「じゃ、サバラ!」

第十二話 魔剣士ピサロ、降臨！！（前書き）

藤「今回、オリジナル技が多くなったな」

ノ「それが？」

藤「いや、なんでも」

第十二話 魔剣士ピサロ、降臨！！

燃えている、門が燃えている！！（山の少女風に）

なにが起こったロザリーヒル！ なんて魔物がいるんだよ！！

『マスター、そんなこと言っていないではやく！』

「あ、すみません」

メイク
作成・地獄の魔槍・無限インフイニティ

イメージとしてはキングダ○ハーツのザル○インだな。

「オリジナル・無限インフイニティ槍演舞！！」

無限の槍で完全無双じゃい！！
んているわけが無い！！
これで粉碎しないヤツな

「キシヤアアアア！！」

ほら、粉碎した。

『マスター、村の中に！！』

「なに！？ いつの間にな！！」

やばい、油断してた！
でも門近くにいる魔物どもを放っておくわけにはいかねえし……。

「ジゴスパークー!!」

どこからともなく声が聞こえ、それと同時に闇色のいかづちが落ちてきた。

魔物は一斉に消え、空中から銀髪的美男子が降りてきた。

……ピサロ……!

「聞きたいことはいろいろあるが、今は村の中をなんとかしよう」

「あ、ああ」

良く通る静かでクールな声。 ここが日本ならまちがいなくモテモテだろう。

『マスター、はやく……!』

俺たちは村の中に移動した。

~~~~~

……どうやら、いらん心配だったようだ。

理由：あの魔道士二人組みがいるから。

「バギクロス……!」

「ベギラナーガ!!」

魔物どもは切り刻まれ、焼き尽くされていった。

そしてどうやらエールモードのようだ。

「ノエル、すまんが向こうのほうを頼む!!  
ちが何とかするから!!」

こっちは俺た

「早く行け!!」

「わかった! 死ぬなよおまえら!!」

「これくらいで死ぬかアホ!!!!」

すみません。 でも、大丈夫だろう。

……向こう側って、ロザリーの館かよ!!

「ピキッ!!!!」

「スランボー、どうした!?!」

スランボーは突然俺の頭から飛び降り、ものすごい速さで林のほうへ移動した。

「おい、待て、待てよ!!」

俺はスランポーを追いかけ、林の中に入った。

『マスター、待ってください!』

続いてレイアが追いかけてきた。

~~~~~ロザリーside~~~~~

私はいま、魔物から逃げるために林の中を走っている。

でも、今にもつかまりそう。

いや、助けて……!!

助けてピサロ様!!!

「ピキーーーーッ!!」

そのとき、聞きなれた声が聞こえ、それと同時に炎の音がした。

~~~~~ノエルside~~~~~

スランボーは大量の魔物の前に仁王立ち(?)している。

お前のその勇姿、しっかりと見たぞ。

でもな、スランボー。  
キミはまた炎を吐く場所を間違えた。

そのまま撃つても魔物どもが避けたらどうなる？

ボワアアアア!!

俺に直撃しましたよ。  
もう、お約束ですね。

「うがああああ!!」

「っ、スランボー!」

スランボーは目の前の魔物に吹っ飛ばされた。

「スランボー!!」

「スランボーちゃん!!」

スランボーは木に思いっきり体を打ちつけ、そのまま気絶した。

そして魔物の手は、ロザリーに伸びた。

「いやっ!!」



「させるかああああ！！！」

デスクライシス  
死去戦慄突！！！」

ドシユドシユドシユ！！

……だめだ、キリが無い！！

それにロザリーの目の前の魔物に攻撃できない！！

「いやああああ！！！」

魔物はロザリーの腕をがっしりと掴んだ。

「さみだれづき・無限インフィニティ！！！」

……くそっ、これもダメか！！

『Flaim Burst』

レイアが燃え盛る火炎を発射してくれたけどこれも無駄に終わった。

「誰か！！！！」

魔物はロザリーを抱え目の前の闇の空間に入ろうとした。

「助けて！！！！ 助けて、ピサロ様！！！！」

やばい、このままじゃ連れ去られちゃう！！

……が、魔物は突然倒れた。

「え？」

「ロザリー、大丈夫か？」

このすきとおった声、ピサロだ。

「ピサロ様……」

「もう、大丈夫だ。

そこにいる旅人も、すまなかった

な」

「いや、そんな悠長に話してる暇は無いk「ジゴデイン」……」

ジゴデイン一発で全ての魔物が消え去りました。

「その旅人。

話があるから、あとで屋敷に來い」

ピサロはそう言い残し、ロザリーを抱えて村に戻った

……話してなんだ？

第十二話 魔剣士ピサロ、降臨！！（後書き）

藤「ピサロ登場です」

ノ「キャラが違うかもしれないが、その場合は気にしないでくれ」

藤「次回、とんでもない事件が！！」

ノ「なんだよその事件って」

藤「……キミ、ネタバレが好きなの？」

ノ「……………」

藤「ではまた次回」

第十三話 いつものまにかフラグ立ってたか？（前書き）

藤「ひな祭りだな」

ノ「ひな祭りですね」

藤「妹が調子に乗り出す日なんだよね」

ノ「やな日だな」

## 第十三話 いつものまにかフラグ立ってたか？

前回までのあらすじ

魔剣士ピサロにロザリーの館へと呼ばれた。

……以上！

『……マスター、今のはいったい何ですか？』

「気にするな。ただの電波だ」

あゝ…… やっぱりそうか。

村に戻ってもあれだ、魔物がまだ大量に残ってるんだな。

……でも、その魔物は全部、動いていない！！

「そっちは片付いたのか？」

「ああ。ちよろいちよろい」

「ちっ、もつと骨のある連中かと思っただぜ」

いや、エール。 雑魚敵相手にそれは高望みだぞ。

「しるさい!」

……やっぱ人格変わつてると扱いにくいなあ。

「すまんが、フィーナと交代できないか？」

「……それは、私が嫌いだからか！」

「は？」

「答える！」

……なにこの急展開!

いつのまにかエールエンドのフ

ラグが立ってたのか!?

「……いや、そういうわけじゃないんだけどな。

とりあ

えずフィーナと話させてくれないか？」

「ふん!

まあいい、今回は許してやるっ!

……シンデレレ?

シンデレレですか?

「……あ、あれ？」

私一体いままでなにを……?」

あれ?

もしかして記憶が無い?

ってことは戦

闘中の出来事もまともに聞けないじゃん。

「リベロ、この魔物どもとの戦いで何か変わったことは無かったか？」

「変わったことねえ……」  
「さっさと移動しようとしてたからな」

「……なにか、目的があったのでしょうか？」

「……なんなんだ？ あいつらの目的って。」

「何か分らんか、ノエル」

「あいにく、俺は名探偵じゃないんでね」

「ま、今はそんなことどうでもいいや。 とりあえず、ロザリーの館へ行くでしょう。」

「~~~~~ロザリーの館~~~~~」

「コポポポ……（お茶を入れる音）」

「おまたせしました」

「どうも」

「ロザリーからお茶を受け取った俺たちは一口飲んだ。」

「で、俺たちに話してなんだ？」

「ああ。 ……だがその前に名前を聞いておきたい」

「わかった。俺はノエル。こいつはフィーナで、こっちがリベロ。ここにいるちっこいのはレイアで、このスライムはスランボー」

「『よろしく』『ピキッ!』」

「よろしく頼む。私の名はピサロ。こっちは家内のロザリーだ」

「こんにちは」

「……でええええええ!! 家内って、結婚してたの!？」

「では、本題に戻ろう。お前達は、宿屋にある掲示板を見たか？」

「……ああ。推測はできる。勇者ソロのことだろ？」

「その通りだ。あいつに関して、詳しい情報を知らないか？」

「すみません、私たちもこの村の人達から情報を聞いていたばかりですので……」

「……そうか」

「で、あんと勇者はどういった関係なんだ!？」



「……リベロ、なにいきり立ってるんだ？」

俺が聞くと、リベロは俺の耳元でこう呟いた。

「……こいつからは、魔物の匂いがする。信用できない」

ま、そういう考えもあながち間違えじゃないけどな。

「元」魔族の王だからな。

でも、今のこのピサロは信用できる。

「どづい関係か…… まあ、簡単に言えば好敵手ライバルだな」

「好敵手ライバル？」

「ああ。 よき友でありよきライバルだった。

だから私は、本当の事を知りたいのだ」

「本当の、事」

「あいつが本当に事件を起こしているのか、また、今この世界で起こっている様々な怪事件と関係があるのか」

……なるほど。 だったら俺も、手を貸さないわけには  
いかないな。

「ピサロ。 俺たちもできる限り協力する」

「そうか、すまないな。  
だが」

巻き込むつもりはなかったの

「いやいや困ったときにはお互い様」

俺は紅茶を飲み干してから席を立った。

「じゃ、そろそろ行くか。」

また明日な」

「ああ」

俺たちは館を出て、近くの林で野宿をすることにした。

第十三話 いつのまにかフラグ立ってたか？（後書き）

藤「事件がまだ起きないだろ!？」

ノ「いやお前がそうなるように仕向けてるんだろ!？」

藤「……そでした」

ノ「ったく。ちなみに次回こそ事件が起きる」「予感!

!」「またかよ!！」

藤「そうです。未来は未確定なのです」

ノ「訳分からん事言っな!！」

第十四話 情報をまとめよう(前書き)

藤「今回、オリジナル設定ばかりです」

ノ「ま、最初からそうだけど」

## 第十四話 情報をまとめよう

……さて、集めた情報をまとめようではないか。

「まずは私からです」

「おう、頼む」

「……集まった情報は少なく、どれも大差ないのでまとめて言います」

少ないのは、まあしょうがない。  
し時間もあまり無かったからな。

もともと質問が質問だ

「勇者ソロは昔、山奥の村という場所で育てられたらしいです。」

でもその村を大量の魔物に滅ぼされてしまい、その後  
旅に出たらしいです。 すみません、こんなどうしようもない情報で

「いや、ありがとう。」

それだけでも十分役に立った」

そっからでも推測はできる。

「次は俺だ。」

ま、俺も山奥の村の事がほとんどなんだが

…… 気になる事があった」

「なんだ？」

「その山奥の村で魔物は勇者を殺したらしい。  
現に勇者は生きている」

でも、

「……殺された勇者が、偽者だったってことですか？」

「ああ。……それも、勇者の恋人がモシヤスで変装したものだったらしい」

「恋人が……」

「それも婚約する直前だったとか」

……いや、ちよつとまって!!!  
なんでそんな超・裏情報  
をお前が知ってるんだよ!!!  
俺でさえも知らなかった  
ぞ!!!!

「まあ、それは小説だからと言う事で」（電波談）

電波しつこいぞ!!

「これ、信用できる話だぜ」

「なんでだよ」

「だってその山奥の村で暮らしていて、魔物の襲撃から命からがら逃げ延びたって言う人から聞いた話だからな」

「あゝ、なるほど」

ま、それなら理解可能だ。

「スランボーは……」

もう見つけたか」

「ピキ」

「じゃあ、最後は俺たちだな。

レイア、よろしく」

『はい、マスター』

「ひとまかせかよ（ですか）！！！！」

「人じゃない、ガーディアン守護者だ」

「「そういう問題じゃない！！！！」」

『とりあえずわかったことは勇者ソロが一度魔物に殺されたロザリを蘇らせたということですよ』

「そしてピサロと協力して真の黒幕を打ち倒した」

「それは、どうやって……？」

「この村にイエティが住んでいてな、人間語を話せるんだ」

「「す」……」

『他の情報はフィーナが話したのと同じですよ』

「ま、続きは明日にしよう。今日はもう遅いし、寝るとするか」

「スビ」

ってスランボーはもう寝てるし!!

「うん、じゃあ寝よ寝よ」

「おやすみなさい」

「おう」

二人も睡眠に入った。

『マスター、ガードスキル守護機能を使いますか?』

「いや、大丈夫だ。」

スリープモードに入っていていいぞ」

『分かりました』

さあ、寝よう。

明日何が起こるかわからねえからな。

~~~~~翌日・朝10時頃~~~~~

ふああ~~~~、良く寝た。

『おはようございます、マスター』

「おう、おはよう。」

あいつらは

『他の皆さんは先に村に行きました』

「サンキュ」

俺は村に向かって移動した。

……でも、まさかあんなことになっていようとは、このときの俺は夢にも思っていなかった。

~~~~~ロザリーヒル~~~~~

まずは、武器屋・防具屋・道具屋で必要なものを買って揃えておかないとな。

「すみません、買い物でしたいんですが」

「おお、客かね。あんたラッキーだね」

「へ？」

「じつは今日、とても貴重な品々が集まったのじゃよ」

「へ」

まあ、見てみようか。

オチューアーノの剣 200000G

竜神王の剣 250000G

ロトの剣 999999G

最終扇 1200000G

|           |         |
|-----------|---------|
| 銀河の剣      | 598000G |
| 如来の棍      | 498051G |
| 真・グリムガンの鞭 | 526780G |
| 円月輪       | 489098G |
| オーロラの杖    | 478690G |
| ウロボロスの盾   | 600000G |
| 審判の兜      | 548000G |
| 神話の鎧      | 786500G |
| 蒼天のトーガ    | 658400G |
| セラフイムのローブ | 456000G |
| ロトの盾      | 432100G |

これって、貴重どころじゃなくね!?

まあ、普通に全部買えるけど。

「じゃ、全部くれ」

「ぜ、全部ですと!?!」

「ああ、金なら無限にあるし」

「あ、あ、あ、ありがとうございます!?!?!」

俺は最強の武器防具を手に入れた。

「ノエルさん！」

「ノエル！」

突然、ロザリーの館から二人が飛び出してきた。

「なんだ、どうしたんだ!？」

「じ、実は、ロザリーさんが……!!！」

「さらわれたらしいんだ!!!!！」

「なんだって!!！」

「ピサロもいない! いったいどうなってんだ!？」

「おいおいおいおいおい!!!! 何が起こったんだ  
!!!!？」

第十四話 情報をまとめよう(後書き)

藤「まさか金が無限にあるとは…… 書いてるほうも驚きだよ」

ノ「数え切れないほど刺客やら兵隊やら殺してきたからな」

藤「さて、ノエル君はピサロとロザリーを見つけることができるの  
でしょうか？」

ノ「俺に聞くな」

藤「ははは」

第十五話 落ち着け（前書き）

藤「落ち着け」

ノ「何をだよ」

藤「このあとのことだよ」

## 第十五話 落ち着け

ピサロとロザリーが村から消えた。

ピサロが村を出発するのを目撃した人はいるが、ロザリーを見た人はいないらしい。

……いったい、どこに消えたんだ？

「ノエルさん」

「なんだ」

「私に、心当たりがあるのですが」

「え？」

「こつちです」

俺達はフィーナの誘導にしたがって移動した。

~~~~~だれかの家~~~~~

俺達は今、誰かの家にいる。

……ここは、どこですか？

「ごめんなさい、ミーナさん。」

突然押しかけてしまつて

「いいのいいの、気にしないでね」

そちらが、お仲間さん

ミーナと呼ばれたその少女（見たところフィーナと大差ないだろう）は金髪で、どことなく活発な感じがした。

「事情はフィーナから聞いたわ。ですって?」

勇者ソロを探してるん

「いや、今はロザリーとピサロの居場所を知りたいんだ」

「……どうして?」

「ピサロが村から出て行くのを見た人はいるが、ロザリーはいない。村の出入り口はあそこだけ。」

となると、ロザリーはどこかに消えた事になる」

「どうして?」

ロザリーが夜中にどこかへいったかもしれないじゃない

「夜中に出発したのなら、俺たちが気づくはずだ。でも、気配を感じなかった」

「なるほどね……。」

……合格よ

「は?」

合格?

なにか試されてたのか?

「はい、これ。あなたたちがロザリーのことについていたら渡してくれってピサロから」

そうやってミーナから渡されたものは、手紙だった。

ノエルたちへ

急な手紙ですまない。

だが、一大事が起きた。

もう気づいているだろうが、ロザリーが魔物に連れ去られた。

やつらのいる場所はだいたい見当がついている。

だが、そなたらに教える事はできない。

私一人で行く。決して探さないで欲しい。

私にもしものことがあった場合、この村を、頼む。

ピサロ

.....

.....ふ、ふ、ふ、

「ふざけるなああああああ！！！！」

「どうしたノエル！！」

「なにが私一人で行く、だ！　なにが探さないで欲しい、だ！！」

協力するって言ったじゃねえかよ！！！

お前ら、いますぐ探しに行くぞ！！！！！！」

『ちよつとまつてくださいマスター！　どこにいるかも

分からないのに闇雲に探すのは危険です！！！！』

「だからなんだよ！　どこにいるか分からないから探すん
じゃねえか！！」

「だから落ち着け。　まずは対策練らないといけないだ
ろ」

「そんな暇あるか！！」

「ノエルさん！」

「うるさい！！！！！！」

バチイイイイイイン！！！！

俺は右頬を強くひっぱたかれた。

「ノエル、お願いだから落ち着いて！！！！　なんかい

つものノエルじゃない。　昔、何があつたかは知らない

いけど、ノエルはいつものノエルじゃなきゃ……！！！！」

「フイ、フイーナ？」

敬語口調じゃなくなってる。
た。

でも、おかげで目が覚め

「……ありがとう、フィーナ。
着ころ」

そうだな、まずは落ち

落ち着かないと冷静な判断ができない。
れを知ったはずだ。

俺は、前世でそ

「ミーナ、ありがとな」

「どういたしまして。」

……あ、そうだった。

ピサロからの伝言はさっきので全部じゃないわよ」

「はい？」

「あたしも付いていくわ。」

これも伝言の一つ」

……ミーナが仲間に!？」

「いつとくけど、これでもバトルマスターなんだからね」

……道理で活発そうなわけだ。

バトマスか、心強いな

(少なくとも戦士と武闘家をマスターしてるわけだからな)。

「それじゃ、ミーナ。
ちも準備等よろしく」

準備が出来たら呼ぶから、そっ

「おっ……!」

そしてその2日後、俺たちは新しい仲間、ミーナと共にロザリーヒルを出発するのであった。

第十五話 落ち着け（後書き）

藤「いや、心強い仲間ができましたね」

ノ「ああ。 バトマスってなそうそういないぞ」

藤「ところで、フィーナが言ってた昔あったことってなんですか？」

ノ「……言いたくない」

藤「わかりました。 ではまた日を改めてお伺いしましょうか」

ノ「……次回は？」

藤「次回は、ちょっとしたサプライズがあります!!」

ノ「なんだよそれ」

藤「んじゃ、アディオス！」

第十六話 ちょっとした再会と戦い（前書き）

藤「今回、初のコラボです！！（作者的にも作品的にも）」

ノ「まさかあいつが来るとはな」

藤「サプライズ！！！」

第十六話 ちよつとした再会と戦い

新しい仲間ミーナとともにロザリーヒルを後にしてはや2日が経った。

そしてこの2日間で分かったのが、ミーナの戦闘能力がいろいろな意味で凄まじいということだ。

技に一瞬の無駄がなく、その上、手早い。斧を基本としているが、マジで手馴れている。

ただ問題が一つ。戦う時、味方が近くにいようがいまいがお構い無しに攻撃する。

はっきり言って危険だ。

ミーナ曰く、「単独で戦闘した事しかない」らしい。

……なんか周囲から妙な殺気を感じるんですが、気のせいかな？

「みんな臥せて!!」

な、なに!?!? 臥せる!?!?

俺たちは言われたとおりに臥せた。

バン! ドン! ズガン!

頭上で飛び交う銃声。

……銃声って事はファンタシースター系統か？

「たいぼくざん大木斬・あらのなみ荒波！！」

ちよつとまで、いまここでそれを使うか！？
辺りの木を切り倒して敵を見つげるためだけなら他の技でもいいだろ！！！

俺たちまで巻き込まれる！！！！

ズガガガアアアアアア！！！！

あたり一辺の木々はなぎ倒され、同時に機械の破片が飛んできた。

え、俺たちはどうしたか？
アストロンで緊急回避しました。

「アストラーム」

俺はアストロンを解いた。

「……ミーナ、頼むがもうちよつと見境をt sそつてんまざん「蒼天魔斬！！」う
おい！！！！」

俺に向けて放つな！！
ギリギリ避けたからいいけど！！

技が向かった方向から、機械の破片が飛んできた。

……機械つて、嫌な予感しかしねえ。

「指名手配犯ノエルとその一味、武器を捨てておとなしく投了しなさいー!」

あ……、まさかと思うがこいつら……。

「武器を捨てないのなら発砲する」

いやいや、もうすでに発砲してるじゃんか。

姿を見せたそいつらは、やはり俺が前にバシルーラで飛ばしたキャスト共だった。

まさか全員同じ場所に飛ばされたとはな。

「ったく、悪いが俺たちは急いでるんで、殺すのはあとにしてくれね?」

「全員、構え!!!」

ガシャッ!

いや、構えるなってそこ!

「討て!!!」

バンッ!!!

やべえ、間にあわねえ!

すべてがスローモーションに感じ

る。

ああ、そうか。

これが走馬灯か。

じいさんもなんで防具作れないようにしたんだろう。

なぜか買ったものも装備できなかったし（装備したら鉛100個分の重さだった）、なんでだ？

とりあえず、死……ぬかボケエ！！！！

「チート能力・超絶時空！」

時空よ歪め！！！！

………歪まない！？

なんでだよ！！！！

「無駄だ。

今のお前は能力を封印されている。

だから今の状況では、この世界の呪文しか使えない」

………どっかで聞いた声でした。

「ま、今は俺がなんとかしとくよ」

「………お前、まさか「ザ・ワールド！！」

時よ止まれ！！！！」

~~~~~

ん、ここは？

「目え覚めたか」

「……やっぱりお前か、クラウド」

「」名答」

「なんであんたがこっちにいる」

説明せねばならない！！

クラウド（さん）とは、キャラクターではなく作者である。  
おもにスマブラ系統を書いている人だ！

性格：腹黒、ドS、外道、基本冷静、メツタに切れないけど切れたらその相手をしにそうで死なないを繰り返すトラウマをおしつける拷問をする。

容姿：女顔でよく女に間違われる、髪は銀髪で腰までかかる、目は黒  
年齢：12歳

ちなみに戦闘能力は不明だ！

「説明乙。」

本題に戻るが、なんでお前がここにいる」

「ん〜、暇つぶし？」

「真面目に答えねえと斬るぞ」

「俺を斬ったら能力戻らないけど」

「……………何をした」

「ザ・ワールド使ってからイオグランデ」

……………

「……………そうじゃねえ！！  
俺に何をしたって聞いてるんだ

よー！！」

「ああ、そういうこと。  
分かりやすく説明すると、

キミから能力を奪った」

「何のためにだ」

「……………キミは少々能力に頼りすぎてる。  
だから能力無し

でどこまで戦えるかを見たまでだ」

「結果は？」

「ま、合格でいいんじゃないのかな？  
チートじゃない

状態でアストロンが使えたってのは上等だよ」

……………つまり、こいつは俺のレベルを見たわけだ。

「そっか。」

「じゃあ、能力返せ」

「いいよ、返す」

光の粉が俺に降り懸かった。

「じゃ、俺と戦ってくれないか？」

「は？」

「なんでだよ！」

「言い忘れてたけど俺、実は時期神様候補なんだ」

「……マジで！？  
……ってことは俺と戦うのが神様になる為の条件ってか？」

「いや、戦いたいのは純粹な興味。もしも俺を倒せたら、

今キミが欲しがっている情報を教えてあげる。ちな

みに、この情報を聞かないとキミは目的地にたどり着けないから」

強制かよ！

「フラグ用バトルかよ！！」

「……分かった、いいだろう。そのかわり、こいつらが目覚めてからにしてくれ。審査は公平に行いたい」

「了解」

……クラウドがここにいるとはな、それだけで驚きだったのにこんどはなんだ、神様候補！？

なんでこのドSが候補なんだよ！！

## 第十六話 ちよつとした再会と戦い（後書き）

藤「さて、今回は時期神様候補（この小説内設定）のクラウドさんに来ていただきました！！」

ク「どうも、はじめましてクラウドです」

ノ「来なくていいのに」

ク「ああ！？」

ノ「……………」

藤「さて、クラウドさんは主にスマブラ系統の小説を書いているお方です」

ク「興味があれば見てください」

藤「ところで、次回、どちらが勝つでしょうか」

ノ「…………俺に決まってるだろ？ 主人公だしフラグ立ってるようなもんだし」

ク「ふふふ………… いざとなったらキミの恥ずかしい過去を世間に公開するけど、それでもいいの？」

ノ「サーセンでしたあー！！」

藤「では、次回！

チート同士の戦いですー！！」

ク・ノ「「ネタバレすんな!!!!」」

~~~~~後書きの後書き~~~~~

クラウドさん、キャララぶっ壊れてたらごめんなさい。

第十七話 チートVSチート！ 天空大決戦！？（前書き）

藤「今回、ネタが多くなりました」

ノ「ま、しょうがないよな」

ク「にしてもグダグダな気が」

第十七話 チートVSチート！ 天空大決戦！？

「え、ではこれより天空大決戦を開始いたします！」

ひのきの棒を手に持ったミーナが実況した。

ノリがいいな。

「ルールは簡単。

地面に10秒間倒れこんだら負けです

！」

ボクシング形式だな。

「ちなみに、死なない程度ならどんな攻撃も許されます！」

では、今から3分以内に自分のスタート地点を決めてくださ

い！」

「ま、勝つのは俺だから、せいぜい踏ん張りなよ！」

「なんだと貴様！！！」

「あと2分30秒」

クラウドはすまし顔で林の中へ移動した。

俺は反対側に歩き出し、適当な木を選んでそれに登った。

「では、開始いたします！」

READY……

GO

！……！！」

バサッ！

GOの合図と共に俺の周りの木の葉が散った。

……見つかつてる。

「ランキヤク
嵐脚」

次にカマイタチが一斉に襲つてきた。

……でええええええええええ！！！！

はええよ！！

「ええええええと、そうだ、カマイタチって原理上で言えば風じゃん
！
メイク
作成・扇風機！」

スイッチ・ON！！

カマイタチは全て消え去った。

「次は俺だ！

くらえ、らせんがん
螺旋丸！！」

……いや、すまん。

じっさいナ トわからねえ。

もしかしたら届かないかもしれないし、設定すら全然分からん。

ま、なんとかなるっしょ。

「ソル
剃 ・ ゲッポウ
月歩」

ち、避けられたか。

「ロクオウガン六王銃「グハツ！！！」ゼロちてんとつぱ零地点突破」

注：この小説の作者はリーオンも知りません。

「…………マ・セシルド！！！」

チユドーーーーー！！！！

「凌いだか。でも、まだまだだな」

今の俺は、開始してから数分にも関わらず血まみれだった。

「だから言ったでしょ。勝つのは俺だって」

「…………まだ、わからねえぞ」

「なにを言ってる」「まだこの話は700字しかない！！」「は？」

メイク作成・デュエルディスク決闘盤！！

「現れよ、オシリスの天空竜、オベリスクの巨神兵、ラーの翼神竜
！！！！」

さんげんしん三幻神、降臨！！

「三幻神でクラウドを攻撃！
ツド・フェニックス・フォース！！！！」
くらえ！
ゴ

「今考えたたる!!」

「おっとこれはノエルの形勢逆転か!？」

「残念だが、畏発動！
！」
聖なるバリア・ミラーフォース！

「無駄だ、神に畏はk「ミラーフォースは対象をとらないから神にも効く」……」

神が一斉に消されたあ!!

「瞬間移動」

……え、逃げた？

「……充電率100%……120%……300%!
超電_{ルト}磁砲_{ルガン}!!!」

バリバリバリババ!!

あゝ、やばいなこりゃ。
でも、まだ1000字だ!!

「サイキックフォースオブアブソリューション
「念動！強制開放!!!」

超電_{レルガン}磁砲を相殺!!

「アルテマウエポン（鍵）・二刀流！
イ!!!」
ドラゴンデストロ

目の前に突然クラウドが現れ、腹にもものすごい衝撃を感じ、吹っ飛ばされた。

「双骨」

二本の腕で空中にいる俺を地面に叩き落した。

……骨が折れた音がした。

「ファイナルブレイク」

ちよつとまって！

この状況で連続の落下攻撃！？

俺は右手を開き、天にかざした。

「魔法の射手（サギタ・マギカ）
・ 連弾^{セリエス}
・ 雷の17矢^{フルグラリス}！」

雷の矢はクラウドに刺さった。

でも、急所には当たらなかったようだ。

「選手Aのノエル、最悪の状況です！
この状況をどうする
のか！？」

メイク^{メイク}
作成・斬月^{ざんげつ}

注：ブーチも知りません

「……俺はなあ、例え骨が折れてようが何も見えなかつたが、仲間を助けるためなら絶対諦めない！」

俺は全身の力を使い、立ち上がった

骨が痛い。

「いい心構えだな」

「げつがてんしょう月牙天衝！！」

「カミエ紙重」

「……解除」

「おっと、負けを認めるのか！？」

……んなわけねえだろ！！

「これが最後の賭けだ！ メガフレア！！」

「賭けの割にはしょぼいな、ラグナロク！！」

この場合、どちらの方が強いのだろうか。

まあ、やく一分ほどは激しいつばぜり合いが起きた事は言っておこう。

第十七話 チートVSチート！ 天空大決戦！？（後書き）

藤「さて、勝つのはどちらか!？」

ノ「だからどうせ主人公補正で俺だろ？」

ク「神に近いこの俺が勝つに決まっている」

ノ「まあ確かにおされ気味だったけどよ」

ク「お前にまけるわけがないだろう。 それにいざとなっ

たらあのノートを使ってやらあ」

ノ「ま、まさか死神の……」

藤「さすがにそこまではやりませんよ」

第十八話 絶望先生じゃないけど絶望した!! (前書き)

ノ「まじで絶望した!!」

藤「はいはい」

「え？」

「この状況で左手も使ったらどうなるか、分かるよね？」

「なっ！！」

俺は今両手を使っている。 それでほぼ互角ってことは
むこうが両手を使ったら俺の二倍の力になるってか！？

「おおっと、これは大変だあ！！ なんとクラウドがま
だ本気を出していないそうだ！！！！」

「うるせえよ、実況！！ 現実逃避しようとしたとたん
に言うんじゃないねえ！！」

「余所見していいのか？」

あ………… しまったやっちゃった。

メガフレアが一瞬にして急激に弱まった。 これでは
プチフレアだ。

「それじゃ、俺の勝ちだ」

ラグナロクが迫ってくる。

なんとか立て直そうとしたけど、間に合わない！

……負けた。

「はい、ここでタ~~~~~~~~イム、アップ!!!」

「「はい!?!」」

ラグナロクは俺の目の前で消えた。

……なんでこのタイミングでタイムアップ!?

「え、時間内に決着が付かなかったので後半戦に入りたいと思います。十五分後に開始いたします。」

後半戦は前半戦よりも時間が短いのでご了承下さい。

なお、回復等は各自でお願いします」

「「は~~~~~~~~い」」

よかった、後半戦があつてきた。

これでまた勝機が出

まずはベホマで回復。

そのあとエルフの飲み薬を飲

んで……ん?

「クラウド、お前は回復しないのか?」

「え? ああ、俺はこれさえあれば十分だから」

「これって……」

「コーヒー牛乳?」

しかもあれだよあれ!

温泉とかによくあるやつ!

「これで十分って……」

クラウドはコーヒー牛乳を飲んだ！

ポロン

クラウドはHPが全快した！！

クラウドはMPが全快した！！

クラウドはステータスが元に戻った！！

ち~~~~~ん

「なんだよそれ…… 反則だろ」

「反則じゃねえよ。 ちゃんと日本で合法的に買ったため

たコーヒー牛乳だ」

「じゃなくて効果がだよ！！」

「え？ ゲームとかでよくあるじゃん、好物だとその効

果が上がるって」

「……そうですか。 やはり神には勝てませんか。」

「あ、それからキミがいま手に持っているエルフの飲み薬、賞味期限切れだよ」

「……え？」

「……………」

「ま、せいぜい燃え尽きて真っ白な灰にならないようにね」

「……………ああ」

勝つ気がまったくしねえ！！

なんか負けそうだ！！

ちなみに、現在の俺のステータスは

HP：999/999

MP：100/999

……………絶望的だ。

もうチート乱用できねえ（一応MPを消費している）。

「では、後半戦スタートです！！」

ミーナの声でした。

それと同時に手榴弾やらロケランやらが大量に放たれた。

……………絶望した！

容赦ないクラウドに絶望した！！

第十八話 絶望先生じゃないけど絶望した!! (後書き)

藤「さて、ノエルくん早速と死に掛けてますね」

ノ「まじでまじでまじで絶望した!!」

ク「だからいったろ？」

勝つのは俺だって」

ノ「うるせえ!!」

ク「まったく、エルフの飲み薬が毒だって事を教えただけありがたい
と思えよ？」

飲んだらおまえ、もっと最悪な状態だったぞ？」

ノ「……………」

第十九話 空を越えて宇宙（そら）へ（前書き）

藤「これでチート決戦は終了です」

ノ「長かった。 予想以上に長かった」

第十九話 空を越えて宇宙(そら)へ

「では、後半戦スタートです!!」

ミーナの声がした。

それと同時に手榴弾やらロケランやらが大量に放たれた。

……早速かよ!!

容赦ねえ!!

軍隊武器が飛んできた!!

ノエルはどうする??

逃げる

逃げる

逃げる

逃げる

……俺のコマンドには、戦うという文字はねえ!!

「危なくなったらスタコラ逃げろ!!」

俺は全速力で反対方向へと走り出した。

そして大木の陰に身を潜めた。

バキューーーーーーム!!!

俺が身を潜めていた大木は、一網打尽に粉碎された。

……マンガだったら、俺の顔を無数の縦線が覆っているだろう。

「さて、きみと鬼ごっこをするには、日が暮れすぎたようだ」

いや、太陽はまだ真上だぜ。

そんなに白い大怪盗の

セリフを使いたいのか？

「クラツシュ」

俺の真上に巨大な手が現れ、お互い強く握り合い一つのこぶしを作った。

……ちなみにこれ、銅像をも砕くぜ。

っていつてる間に、落ちてきた!!

ぐしゃっ!!

「…………お、おおっと！
これはノエル選手、緊急事
態です！
巨大なごぶしに押しつぶされたまま、いつこ
うに出てきませんー！」

「おい、おめえ…………
まさか殺したんじゃねえだろうな」

「まさかそんな……………！」

「ピキッッッ……………」

「まさか、生きてるよ、あいつは」

……さて、これからどうするか。

俺は押しつぶされる寸前にバトルカードのドリルアームを使い、穴を掘って地中に非難していた。

MP：100 78

一気に22も損しちゃった。 これからは温存して以下ねえとな。

でも、バトルカードの効果はもうすでにきれている。
この地中から脱出するには、あのでかいごぶしをどうにかするしかない。

……しょうがねえ！

「地の底に眠りし守護神よ。 わが名はノエル。

しばし、力を貸してくれたもう」

俺は守護神を召喚することにした。

ゴゴゴゴゴゴゴゴゴゴ……

「我に力を貸し、共に戦ってくれたまえ。 召喚、ゴ
イエレメス！！！」

大地が激しく揺れ、俺の頭上にある天井に大きな亀裂が走った。

そして俺の足場が激しく盛り上がり、自動的に脱出可能となった。

……次が、最後だ！！

「……まさか、ゴイエレメスを召喚するとは……」
本当に賭

けに出たか

「……ああ」

俺は今、ゴイエレメスの手に乗っている。

MP：78 30

「ゴイエレメス、ありがとう。」
あとは俺一人でやる

俺はそう言い、ゴイエレメスを地中に戻した。

「どっというつもりだ」

「お前と一対一で戦い、決着を付けたい。だ」

それだけ

「なるほどな」

作成・エクスカリバー

「じゃ、こっちはブレードを」

俺たちはしばしにらみ合った。

……

……しばらくして、風が吹いた。

「おらあああああああ……!!……!!……!!」

ガキインツ!!

剣同士がぶつかり、鈍い音をたてた。

「甘い!!」

天・空!!」

俺のエクスカリバーはクラウドのブレードとともに宙に打ち上げられ、それにクラウドが続いた。

キラーン

はるか彼方で何かが光った。

「ゲー……ゲー……ゲー……ム、セット……!!」

この宇宙をも越えた戦いは、クラウド選手の勝利です……!!」

「ありがとう。」

ま、当然だけどね」

「ち、ちくしょう……」

ちなみに、今の俺はフィーナにベホマを何回もかけてもらって、もう万全に近い。

……ベホマ一回で回復できないほどだったけど。

「今回は僕の勝ちだね」

「そのセリフ言うな」

「ま、久々にいい勝負をしたから、キミがこれから俺の出す問題に答えられたら、あの二人がどこにいるか教えてあげるよ」

「マジで!？」

「サクス!」

ありがたき幸せ……!!

負けたけど情報は手に入るなん

て……!!

「では、第一問!!」

デーデンツ!!

「3以上の自然数 n に対して『 $X(n) + Y(n) = Z(n)$ 』を満たすような自然数は存在しない。これを証明せよ」

……おい。

「ふざけるな!!」

「ふざけてねえよ。
から」

ちなみに、チート使ったら失格だ

なんじゃそりゃ!!!!

「……じゃあ

「言ってみる

」

……メルメルメ~~~~~」

「……ダメ

「なんでだよ!! この質問されたらこれしか言いようね
えじゃん!! 1995年に天才数学者ワイルズが証明
するまで約360年間解けなくて、ワイルズも証明まで8年かかっ
て合計130Pの2冊が証明に必要だったんだぞ!!!」

「チャンスは三回まで。

あと残り二問」

クッソ~~~~~!!

「第二問!

829 / 735 × 961 / 527 は?」

「あ、それなら簡単。

答えは「797 / 812 / 60

5 / 345」!!!」

「……正解だ。

おめでとう」

「おっしや~~~~~!!!」

こうして俺は、あの二人の情報を手に入れた。

第十九話 空を越えて宇宙（そら）へ（後書き）

藤「よかったねえ」
情報手に入って「

ノ「おう」

ク「もうちょっと時間があればノエルをもっといじめれたのにな…」
… このジャプニカ弱点帳で「

ノ「ガクブルガクブル」

藤「あゝ、それ、一度知り合った人の弱点が隅から隅まで載ってるやつでしょ？」

ク「そのとおり！ ま、それはまたの機会にでもするか」

ノ「ガクブルガクブル」

第二十話 詐欺られた!! (前書き)

藤「……ちょっとaggaggだな」

ノ「ま、いつものことだろ」

第二十話 詐欺られた!!

宇宙を越えたチート合戦。

バトルには負けたが、さすがは神様候補。
ヤンスをくださったぜ。

ご親切にチ

そして俺は、ついにピサロとロザリーの手がかりを入手した!!

「じゃ、俺はこの辺で天界に戻るわ。
こともあるしな」

まだやるべき

「は？ さっさとこの世界に戻れよ」

「時空移動すればいつでも戻れる。
はない」

だからその必要

「チートだ!!!!」

「お前に言われたくない!!」

……じゃ、また会お

「千年後に頼むよ」

「ああ、それぐらいなら楽勝だな」

……千年後つすよ？

楽勝つつつても俺が居ないのでは？

「サバラ!!」

クラウドはそう言い残し、大空に飛んでいった（光となって）。

~~~~~

「で、これからどうするの？」

「……クラウドの話によると、ロザリーは今、天空城…… いや、今はヘルクラウドらしい、に監禁されてるらしいんだ」

「えー!?                   あの天空城ですか!？」

「まさか、そんなバカな……!」

「で、それはどこにあるの？」

……その質問に、俺は困った。

別に分からないわけじゃない。  
ただ、条件が厳しすぎる。

「どっすねばいいのですか?」

「さっさと答えろ」

「…キーッ!」

『マスター!?!』



「ま、ド・ン・マ・イ」

「これも運命さだめじゃ」

てめえら……！！

「あの…… 大丈夫ですか？」

ああ…… フィーナが天使に見える……。

「ああ、大丈夫だ」

そうだ。 金なんてまた狩人ハンターどもを倒せばいくらでも  
手に入るんだ。

「で、あたしたちはこれからどうすればいいわけ？」

「とりあえず、クラウドから教えてもらった場所を片っ端から調べ  
る」

「それは、ダンジョンか？」

「いや、全部バラバラの場所にあるみたいで、街にあつたり城にあ  
つたりダンジョンにあつたりというらしい」

『ここから一番近いのはどこなんですか？』

俺は地図を取り出した。

「いまのところ一番近いのは、ここだ」

『悪魔の巣窟』

「えー!!  
パ、バンデモニウム悪魔の巣窟ですって!!?」

ミーナが叫びだした。

……この驚きよう、尋常じゃない。

「ミーナ、お前なんか知ってるのか？」

「知ってるもなにも、そこは名前の通り悪魔が住み着いてる洞窟で、一度足を踏み入れた者は魔物となって帰ってくる、呪いの洞窟よ!!」

「……なんで魔物になるってわかるんだ？」

俺は聞いてみた。

「……あれ、言ってなかったっけ？  
と話す事ができるんだけど」

あたし、魔物

「」「そんなのか!?!」「」

「え……」

それなら納得いった。  
……でもよくよく考えてみたら  
魔物と話せるんならバトマスなんてやってられないんじゃないかね？

「そ、そんなことより!!」

そんな呪われた場所に行く



なんてお断りよ！！  
行ってきて。  
らあたしの家に来て呼んで

行くなら3人……いえ、5人で、目的のものをゲットできた

「……………どうしてもか？」

「……………どうしても！……！」

あゝ、じゃ、しょうがねえな。

「じゃ、無事に帰ってくることを祈ってるわ！！  
ーラー……！」

ル

ミーナは青い光となって飛んでいった。

……………しょうがない、魔法メンバーで挑むしかないか。

「……………お前らはいいのか？」

「あ、はい。私はたとえ地獄でも、ついていきます」

「俺も行くぜ。いい研究が出来そうだ」

『わたしはいかなる時でもマスターをお守りする。それだけです』

そ

「ピキキキ……ッ……！」

よしっ！

全員賛成……！！

「それじゃ、『バンデモニウム悪魔の巣窟』にレッツゴー!!」

……こうして俺たちは、呪われた洞窟へと足を踏み入れることになった。

第二十話 詐欺られた!! (後書き)

藤「次回、呪いの洞窟!!」

ノ「次回予告早ええ!!」

藤「いや、じつは皆さんにお伝えしたい事があったので無駄話を省きました」

ノ「え？」

~~~~~

突然ですが、「逃走中」を書こうと思います。

4つも小説を書く事になりますが、誰も読んでないようなものが一つ……。

サンデー・マガジン・スマブラのキャラで書こうと思います。

ちなみにリクエストも出来れば実施したいと思います。

詳しくは、活動報告で……。

第二十一話　　そういえば悪魔って現実的にいるのかな？（前書き）

藤「お久々」

ノ「大した時間じゃないだろ!!」

第二十一話　　そういえば悪魔って現実的にいるのかな？

俺たちはいま、呪われた洞窟「バンゼニウム悪魔の巣窟」にいる。

うん、確かにやばいよ、ーじ。

今何階かは分からないけど、とりあえず魔物のレベルが高すぎる。

並み大抵の旅人とか商人だったら入口の時点でご愁傷様だな。

「お前ら、大丈夫か？」

俺は後についてきているみんなに聞いた。

「大丈夫なわけ……　あるかよ……」

「なんで、大丈夫なんですか、ノエルは」

『マスター、そろそろ休憩したほうがいいかと』

「ピ、ピキッ……」

全員、息切れ状態だ。

そりゃね、さつきからグレイトドラゴンだのサイクロプスだのリビングデッドだのメタルキングだのラスダン並みの魔物ばっかだからな。

息切れくらいしてもおかしくない。

「いや、死ぬのが、普通じゃない？」

「え、これくらいで死ぬの？」

「なんで、お前は、なんともないんだよ！」

「まあ、その話はあとでな。……どうやら、最深部に
着いたみたいだぜ」

足場は入口（最深部の）から俺らが居る場所まで。それを囲む
ように毒の海が流れている。

近くに階段やいかだは見られない。

『ここが最深部って……じゃあ、ここにあるのですか？』

「それならすぐに分かるはずだ」

「もしかして、この洞窟の主を倒せとかそういうのじゃないのか？」

「や、やめてくださいよ、そういう怖いこと……」

「そうだ。フラグ立てんじゃねえ」

俺が言い終わると同時に、待ってましたといわんばかりに海が揺れ、
そこから大量の触手が現れた。

これは…… タコか？

「「……………！」「」

魔道士二人は声にならない叫び（ふるえ？）をあげている。

「だからフラグ立てるなって言っただろ？」

「いや、俺が言わなかったって出てくるだろ……！」

『マスター、どうすみますか？』

「ピキギーーツ……！」

「ど、どうするんですか……！ あんな気持ち悪いもの…… 武器ででも触りたくありませんよ……！」

その時、水中で何かが（恐らくタコ）の目（光り、フィーナの近くの触手が怪しくうごめいた。

……これはパターンから言います。このタコ（？）にフィーナがピキギーーツされます。

FF6にもそんな感じのがあったしファンタシースター0にもあったし、これはファンタジー系の王道つつてもいいんじゃないのか？

ま、でも俺はこの小説を18禁にする気はないから…… 討伐しよう。

「ライデイン……！」

その触手に雷がヒットし、触手は水中に戻った。

期待してたやつ？　死ねば？　作者はまだしも俺は許さねえから。

「フィーナ、気をつけるよ。　やつは恐らくお前を狙ってくる。　タコ系の魔物は変態が多いからな」

「あ、はい。　わかりまし……　って変態ですか!？」

「だからピーーーーされないように気をつけるよってことだ」

「わ、わかりました!!!」

「どうして、そんなのわかるんだ？」

「理由は簡単。　フィーナが大声上げたたん、ヤツの目が光って触手が動いた。　これだけ見れば推理可能」

『さすがですね、マスター』

「だろ。　ちなみにレイアは心配しなくてもよさそうだな」

『？　それはどうしてですか？』

「小さすぎるし、その上生身の人間じゃない」

『……小さすぎるとは、どついついことですか』

レイアから負のオーラ放たれてる！

まさかそのことにコンプレックスがあったとは！！

「って言ってる間に！ 来たぞ、ノエル！！」

「ああ！！」

メイク
作成・ガンブレイバー

……いや、ファンタシスタも混ざってるわけだしOKだろ？

シュート
「射！！」

俺は銃剣を銃モードにし、触手を撃った。

もしかしたらFF4に出てきたタコと同じ仕組みかもしれん。

俺が撃った触手は海に沈んだ。

そして次の触手が俺に襲い掛かる！！

「チツ、剣モード！」

でも切り替えてる時間が無いんだよな……。

皆はそれぞれのこととで精一杯だし……。

やばい、来た！！

「切り替え完了！！」

俺は早速触手を斬った。

グニョッ……

……斬れない、斬れないぞこいつ!!

俺の銃剣は吹っ飛ばされ、俺は触手につかまった。

「「ノエル!!」」

俺はそのまま、海に引きずりこまれた。

~~~~~ミナside~~~~~

バリッ!!

「え?」

目の前に置いてあった鏡が割れた。

……なんで?

バリッ!!

こんどはお皿を割ってしまった。

……もしかして、虫の知らせ?

ノエルたちが危ないとか？

まさか、ね……。

~~~~~ノエルside~~~~~

やばい、このままじゃ海の毒にやられる……！

この状態じゃ何もできねえし、レイアでもこの海は無理だ……！

誰か…… 来て……！

第二十一話　　そういえば悪魔って現実的にいるのかな？（後書き）

藤「いや、ノエルくんピンチですね」

ノ「お前はなあ……！」

藤「ま、せいぜい毒でやられないようにね」

ノ「うるせえ！！　　今すぐてめえのどタマかち割ってやる……！」

藤「ま、神様は君を不幸体質にしたみただけだね」

ノ「……え？」

藤「嘘だよ嘘」

第二十二話 年齢制限の変更ってできないんだ？（前書き）

藤「マジで困ったよこれには」

ノ「年齢制限のことか？」

藤「いざとなったら制限つけようかと思ったのに……」

ノ「……今年で15なんだからもう少し頑張れ」

藤「読者数が大幅に消える。それを考えると……」

ノ「こいつ!!」

第二十二話 年齢制限の変更ってできないんだ？

俺はいまタコに捕まって毒の海に沈められている。

身動きできないから呪文も唱えられない。

このタコー！！ ふざけんじゃねえ！！

……ん？ でも腕が動かないだけだから補助系のチート能力は使えるじゃん。

じゃ、早速…… チート能力、透明酸素ポンベ。

スー…… ハー……。

よし、OK呼吸できる。

あとはこの状況をどうするかだな……。

「ギヤアアアアアア！！！」

……少し離れたところでリベロが沈められた。

あいつは水中呼吸できないからもって10秒だろう。

MPを無駄にしたいくは無かったがしょうがない。

チート能力、すり抜け！！

俺は触手から抜け出し、リベロの救出に向かった。

~~~~~フィナーサイド~~~~~

な、なんかヤバイです……。

スランボーちゃんは気絶状態だしレイアさんは海に入る方法を調べてますしあの二人は海の中です。

大量の触手がこちらを向いています……。

もしノエルの言っただけが本当なら、年齢制限無しではできないあんなことやこんなことをされてしまうのでしょうか……。

怖いです。個人的にも読者数的にも怖いです。

……って、考えてる間に来ちゃってます。

グニツ

「ひっ！」

いや、来ないで……！

でもだんだん近づいてくる数が…… 増えてる……！

いや…… やめて、捕獲しないで……！





……やっぱこいつ、どっか抜けてる。

「いいか、レイア。俺がどんな危機に陥っていようが俺は自力で這い上がる。お前は、お前にしか出来ないことをするんだ。」

「わかった㇏『マスター!!』『グワアッ!!』」

タコの一撃を喰らった。

「……待てよこの変態野郎」

俺は触手を見ずに右手でそれを掴んだ。

「……お前は俺を怒らせた」

『マスター、援護します』

「しなくていい」

『マスター!!』

「レイア、命令だ。お前はフィーナを助ける」

『……分かりました』

レイアはそう言い残し、フィーナの方へと向かった。

「……さて、おしおきの時間だ」

作成・トゲ付きサッカーボールメイク

チート能力、空中浮遊

俺は左手にボール、右手に触手を持ち、空中浮遊した。

「てめえだけは許せねえ！！　喰らえ、デスゾーン！こうていペンギン2号！ザ・ギャラクシー！ザ・フェニックス！ゴッドノウズ！デイバインアロー！リフレクトバスター！イナズマブレイク！  
　　そんでもって、雷獣シュート！！！！」

注：作者はイナズマイ　ブン知りません。　ググリました。

はい、普通に3人技とか使ってますね。　そして一番最後、全く関係ありませんね。

……て、触手一本に何やってんだ、俺。

そりゃね、もうこの触手は使いもんにならないだろうけど……  
せめて本体にやるべきだった。

MP無駄遣いしちまったぜ。

~~~~~リベロside~~~~~

クソッ！　触手多すぎるぞこいつ！！

本当にタコか！？　イソギンチャクじゃないだろうな！！

一本はさつきノエルが始末してくれたみたいだけど、はつきり言っ
て一本一本相手にしてたらキリが無い!!

『リベロ! 大丈夫ですか!?!』

レイアか……。

「これが大丈夫に見えるか?」

『いえ、見えません。 全身血みどろなのがわかります』

レイアってどうしてノエル以外には厳しいのかな……。

「レイア、俺が周りの物を引き付けるから、その間にフィーナの救
出に向かってくれ」

『わかりました。 では、死なないように頑張ってください』

レイアはそれだけ言い残し、フィーナの救出に向かった。

……なんかムカつく。 作ったのは俺だつてのに。

そう思いつつも、今の状況を考えると…… 死ねる。

触手で逃げ場がねえ!!

~~~~~side~~~~~

ここか、「パンデモニウム悪魔の巢窟」は。

ちやちやっと済ませるか。

第二十二話 年齢制限の変更ってできないんだ？（後書き）

ノ「これ以上行くな」

藤「へ？」

ノ「これ以上言ったらこの小説消えるぞ」

藤「わあってる！！ それぐらい分かってる！！」

ノ「本当だろうな」

藤「ああ！！ パンデモニウム編が終わったらこれ以上疚しいことを書く気は無い！！」

ノ「本当だな！？」

藤「……あ、でも一部恋愛要素ははいるかも…… 許される範囲内で」

ノ「お前なあああああああああああああああああああああああああああああ……」

第二十三話 死ねやオラア！！（前書き）

藤「……この小説、生き残れるかな？」

ノ「小説ならまだいいが、アカウント消されたらどうする？」

藤「ガクブルガクブル」

## 第二十三話 死ねやオラア!!

「燃える俺のコモ!!!」

俺は本体に向けて流星拳を放った（水中で）。

でもダメだ、素早すぎる!!

それにこのタコ!! 死角が無い（胴体全てが目だ）!!!

しかも俺が攻撃するたびに素早く移動するから、上の連中にも影響が……!

~~~~~リベロside~~~~~

動くなよ!! せっかくパターンつかんだのに!!

「又ガツ!!」

俺は背中に攻撃を喰らった。

……にしても、身体が重い。 重力の重さではなくだるいほうだ。

……どうしてだ?

~~~~~ファイナside~~~~~

「きゃーーーーーっ!.....!」

だめ、速くて酔いそう……。

それにいつ襲われるか分からないから、怖い!!

お願いだから誰か、早く助けて!!

~~~~~レイアside~~~~~

マスターが水中で戦っている限り触手の移動は止まりません!

でも、マスターの言うとおりにこの場を離れるわけには……!!

私は、どうすればいいのですか。

~~~~~スランボーside~~~~~

.....

~~~~~?side~~~~~


やっぱり強いな、ここの魔物は。

でも、今は最深部に向かわなくては……!

~~~~~ノエルside~~~~~

ぐっ……。

なんか水圧以上のものを感じる……　　なんかダルい……。

「ぐわっ!……!」

俺は触手の一撃を喰らい、水中にも関わらず吹っ飛ばされた。

……なんか口の中で血の味がする……。　　攻撃喰らっただけじゃ

こっちはならねえのに……。

なんか錆の味もするし……　　これマジでどうしてだ?

……まあいい!!　　今はあのタコを……　　って、あいつどこだ?

ブワアアアツ!……!

「……てなんじゃこりゃあ!……!」

急に目の前が真っ黒になった。

……タコ墨喰らっちゃまったぜ。

「グワッ！！！」

くそ……、このままじゃやられる！！

だれか…… 神様！！

神様！！ あんたは見てるんだろう！？ あんたは世界を守り  
たくて俺を使っただろう！？

だったら助けやがれよ！！

「神鳴斬・真紅！！」

バリバリバリバ！！

身体にすごい電流を感じた。

……電流？ それになんか視界もチカチカするし…… ところが  
噂の感電か？

……とりあえず上がってみるか。

~~~~~陸上~~~~~

……なんか陸上メンバーに一人増えてるんだけど。

「ていうかお前、来たくなかったんじゃないのかよ」

どつちからさっきの電撃を使ったのはミーナらしい。

「……あ、ごめん。 あれ嘘」

「嘘おおおおお！……!?」

「実はあかし、このタコをぶつ潰さなければならぬ……だからそのための準備をしてきたの」

「な、なんで……」

「ま、その説明は後でね。 とりあえず今、あんたらは毒にやられてるし、フィーナは向こう側。 だれかフィーナを救出して。 じゃないと死ぬ恐れがあるわ」

「……死ぬ!?」

まあ、よくわからんがフィーナ救出に向かおう。

「作成・生物包丁!! 秘技・タコ刺し!!」

俺は包丁でフィーナの触手を切り刻み、救出した。

「ノ、ノエル……?」

「もう、大丈夫だ」

「ありがとう!! もう…… 怖かったんだから……!!」

「あつた、これが竜神王の盾だ」

「「「お~~~~~」」」

俺は竜神王の盾を見つけた。

「で、お前とあのタコ…… 一体何があつたんだ？」

「……言わなきゃダメ？」

「できれば聞きたい」

「……わかつたわ。 ……あれはあたしが戦士になりたての頃、この洞窟に来たのよ。 ……その時中の魔物は想像を絶する強さだったから、脱出しようと思ったけど道に迷って…… で、結局この最深部に來たわけ」

「で、タコと出会った」

「そう!! ……それも最悪!! ……突然海から出てきたかと思えば服破いてくるし!! ……剣でも斬れないから抵抗の仕様も無かったし!! ……おかげであたし、初めて魔物に負けたわ」

「じゃあ、恨みっつのは……」

「そのときの屈辱よ!!」

……

「で、ノエル。　このタコまだ息があるけどどうするの？」

「ん、ああ……。　そうだな、ちょうど活きのいいタコが欲しい
っていつてるやつがいるからそいつに送るよ。　……移送・クロ
ウド」

俺はタコをクラウドのところへ送りつけた。

……あいつならうまく調理してくれるだろう。

「じゃ、行くうぜ。　フィーナも良く頑張ったな」

「は、はい……！」

俺たちはリレミトを使い、洞窟を出て次なる目的地「アスカナ国」
へ向かった。

第二十三話 死ねやオラア！！（後書き）

ノ「まじで次回からは自重しろよ」

藤「はい、マジで自重します」

ノ「それからクラウド、よろしくな」

藤「うま〜く、調理しちゃってください」

ノ「ちなみにマスター学校へのおすそ分けみたいなもんだからな」

第二十四話 アスカナ国 (前書き)

藤「今回、会話文が多くなっ たな」

第二十四話 アスカナ国

「バンデモニウム悪魔の巣窟」を攻略し、そのボスをクラウドに送った俺たちは今、次なる目的地「アスカナ国」のすぐそばにいる。

え？ どうしてすぐ入らないのかって？

忘れてもらっちゃ困るよ、きみ。俺はいま3億という大金を背負ってる身なんだ。

下手に入国したらどうなるか分かったもんじゃない。

……さて、どうしたものか。

「……そうだ、ノエル。変装したらいいんじゃないのか？」

「変装？」

「例えばメガネかけるとかマスクつけるとか」

「……なるほど、そりゃいいかもな」

「でも、どついう変装にするんですか？」

「メガネならあたしが貸そうか？」

「ああ、頼む」

てかメガネ持ってたんだ。

俺はミーナからメガネを受け取り、装着した。

……スク水仮面になってないだろうな。

「すごい、似合います」

『マスターはなんでも着こなせるタイプですね』

「はは、ありがとう。でもなんか視界が……
な……」

ちよつと変だ

「あ、ごめん、それ度が強いのを忘れてた」

……ま、いつか。

「よし、行くぞー!」

~~~~~アスカナ国~~~~~

「すみません、入国させてください」

俺は門番に言った。

「名前は」

「あ、はい。俺は……」

……しまった、マズイ！ 偽名考えてなかった！

「……………」

「どうした」

『マスター』

レイアが小声で囁いた。

『……カミヤはどうですか？ マスターのフルネームは出回っていないので』

「……俺はカミヤ。 で、こっちがリベロでこっちはミーナ」

「「よろしく」」

「私はフィーナと申します」

ちなみに、スランポーはフィーナの胸の中において（そのままの意味）、レイアはステルス機能で姿を消している。

「フィ、フィーナですと!?!」

「ん？ なにか問題でも?」

「し、失礼ですがフルネームは!?!」

「え？ フィーナ・アルノミアです」

「や、やはり……!」

それだけ言うと、門番は突然大声を上げた。

「アルノミア家の一人娘、強いてはアスカナ国王女のフィーナ様でございましたかあああああ!!!」

「「「え???」「」「」

全員チンプンカンプンだ。

「どうぞお通りください!!」  
そしてぜひとも叔父上方に顔を見  
せてあげてください!!」

「あ、あの、ですから……」

「さあ、早く!!」

「……行こうぜフィーナ」

俺たちはなんかよく分からない疑問を残しながら中に入った。

「なあ、フィーナ。お前、王族の人間だったのか?」

リベロが問いかけている。

「い、いえ、そうでは無いと思いますが……」

「でもアルノミアって……」

「人違いだろ？」

「いやでもよノエ」（ギラッ）「……カミヤ、アルノミアなんて名前そうそういないぞ？」

「ま、城に行ってみればわかるんじゃない？」

「いや、それよりもまず宿を取ろう」

俺たちは宿屋に向かった。

「すみません、宿空いてますか？」

「あ、はい……っでもしかしてフィーナ様!？」

「え？」

「さきほど一番隊の方々が『青い髪で翡翠の目の少女を見つけたら白まで案内しろ』と告げられました。ですから城まで行ってください!」

俺たちは宿を追い出された。

……しょうがない、行くか。

~~~~~アスカナ城~~~~~

「も、もしやフィーナ様……!?!」

「よくお戻りで!?!」

やはりなんのことが分からん。

「さあさ、速く中に入って叔父上方に顔を見せてあげてください」

「旅の者たちも、どうぞ」

俺たちは中に入り、王の間へと向かった。

「ダルビス様、フィーナ様をお連れしました」

「な、なに!?!」

俺たちは中で王と対面した。

「お…… フィーナか……?」

「はい、そうですg」なんと大きくなって!?!」いやですから私何のことが分からないんですけど!?!」

……やっと言えた。　　いままで勢いに流されて言えなかったからな。

「……そうか。　　まあ、それも仕方あるまい。　　そなたがまだ

「2歳ぐらいのころに兄夫婦がエリクス村へ行ったのだから」

「そ、それって」

「うむ。　　フィーナ、お主はこのアスカナ国の王女なのだよ」

第二十四話 アスカナ国 (後書き)

ノ「……え？ いまこいつなんて言った？」

藤「なんとフィーナは一国のお姫様でした!!」

ノ「……ありえなくもないが、なんか偶然にもほどあるだろ!!」

藤「それが小説だから」

第二十五話 別れなきや……いけないのか？(前書き)

藤「やっぱり会話文が多い」

「フィーナ。君が持っているはずのラーの鏡。あれは我ら
がアルノミア王家に代々伝わる宝なのだ」

「……これですか？」

フィーナは袋からラーの鏡を取り出した。

「そう、それだ。やはり君が持っていたか」

……なんてこつた。マジでたまげたぜ。

「それから、カミヤと言ったな？」

「あ、はい」

「お前のフルネームは、ノエル・カミヤではないか？」

……ばれてる。

「フィーナを無事保護してくれたことには礼を言うが、犯罪者とあ
つてはな」

「……どうするんですか？」

「お前は何か目的があつてこの国に来たんだろう？」

「はい。竜神王の武器防具の一つです」

「……あれか。よし、いいだろうすぐに持ってこさせよう」

「えー!? いやいいのかよ犯罪者に渡しちまって!」

「リベロ」

「いやだって!」

少し、黙っててくれ。

「どうして、それを俺たちに?」

「……フィーナには、もう近づくな。ということだ」

「……どういう意味ですか」

「フィーナはこの国に戻ってきた。今現在王の座は私が持っているが跡取りがない。そこでフィーナをアスカナ国王跡取りにするのだ」

「フィーナに選択権は?」

「無い。拒否する事も禁ずる」

「な、なんでですか!」

「お前は黙っている。これもお前の為だ」

「で、ですが……」

「大切な姪になにかあったらどうしろと言うのだ! 兄さんに顔

「向けないではないか!」

「じゃ、俺に拒否権は」

「無い。拒むならここで一生牢獄暮らしだ」

「……わかりました」

『マスター!?!?』

「ちょ、ちょっとノエル、どうしたのよ!?!?」

「お前、仲間を売るのか!?!?」

「すまない、みんな!?!」

どちらにせよフィーナはここに残る事になる。
だけ被害が少ないほうを俺は選ぶ!

だったら出来る

「……ですが王様、ひとつ頼みがあります」

「……なんだ」

「フィーナと別れるのは明日にさせていただきます。
なんです」

大切な、仲間

「……断る」

「王様!?!?!」

「犯罪者と姫を2人きりにさせるわけにはいかん」

2人きりじゃねえよ!!

「別れの言葉は、一言にしろ」

「っ!!」

「ノ、ノエル……」

「……みんな、一人ずつ、順番にな……。俺は最後に言っ」

「わ、分かった」

正直……辛い。

「いや、犯罪者一人だ」

「「ええ!!!!?」」

「!!!!」

……くそっ。

「……フィーナ」

「ノエル……これで、お別れなの……?」

「ああ……すまなかったな、厄介ごとに巻き込んでしまった」

「厄介ごとなんてそんな……。私、ノエルと会えて、一緒に色んなところを旅できて、いろんな事を経験して、とても楽しかった。本当に、ありがとう」

「俺のほうこそ、いままでありがとうな」

……俺は正直言っつて、いっぱいいっぱいだった。

気を抜いたら、おしまいだ。

「みんなを代表して言っつ。ありがとう。そして、忘れないでくれ」

「……ノエル」

言い終わると同時に、竜神王のよろいが王の間へと運ばれた。

「さあ、よろいをもってさっさと立ち去れ」

「クッ」

俺たちはよろいを受け取り、城を出た。

~~~~~天の声~~~~~

ノエルたちが城を出たのを確認し、国王は表情を変えた。

「……フィーナを例の部屋に」

「はっ！」

「え、な、なんですか？」

王の命令により、フィーナはどこかへ連れて行かれた。

「……準備は整っておるか？」

「はい。あと1時間で開始できます」

「そうか。これで、世界は我らのものだ」

その後、国王の狂喜の笑いをこっそりと聞いていたものがいたことに、誰も気づかなかった。



第二十五話 別れなきや……いけないのか？（後書き）

今回、特に書く事がないのでこれで。

というかあってもノエル君が参加できないでしょう。

第二十六話 死ぬより……辛い事

俺たちは竜神王の鎧をもってアスカナ国を後にしようとしていた。

「あ、あのさあ、ノエル……」

「やめとけミーナ。今はほつとくのが適作だ」

『……………』

仲間が一人減るのはFF系じゃよくある話だ。正直ドラクエにもあった。

だが、辛い。理由は分からないが、胸が押しつぶされそうな感覚だ。

最後まで、一緒に旅したかった……。

『！ マスター、スランボーが！』

……………スランボー！？

「ピキーーーーー……………ッ！！！」

振り向くと、城のほうから全力疾走でこちらに向かってくるスランボーがいた。

「ス、スランボー！ そっいえばお前フィーナの服の中に隠れてたもんな、忘れてたぜ」

「ピキッ、ピキッーー!!」

「そんな話をしている場合じゃない、と言ってる!!」

「え、どういことだ!!?」

「ピキッ、ピキューーー!!」

「フィーナは確かにアスカナ国王女だった。でもあの王はフィーナのことなど全く考えてなかった。やつの目的はラーの鏡を用いて何かをすること。ラーの鏡を受け取った後、フィーナはどこかに連れて行かれたらしいわ!!」

「な! てことは全部あの王の策略だったのかよ!!」

「そういう事になるわ!!」

「おい、どうするんだノエル!!」

「ノエル!!? あれ、どこ行ったのかしら」

~~~~~アスカナ城~~~~~

『マスター、急にどうしたんですか?』

「フィーナの身が危ない。なんか、そんな気がするんだ」

『それってこの前にもなんども経験していた「それとはなんか違う。ただ、このままだと俺が死ぬより辛い！」言葉の意味が分かりませんが……』

俺も分かんない。

「レイア、とりあえずステルス機能をOFFにしてくれ。これからまた、戦いになる」
これ

『分かりました』

俺は門番がない城の門を開けた。

~~~~~アスカナ城内~~~~~

「な、なんだ貴様!!」

「貴様はこの城に入ること許されていないのだぞ!!」

………つるさい。

「それより、フィーナはどこだ」

俺はいつの間にか兵士どもに囲まれていた。

「言うものか。お前なぞに言ったところで何をしでかすか分からんからな」



「言え。 言わないのなら殺す」

俺はメラゾーマほどの火の玉を空中に作った。

「ヒイイ!!! お、王女様は、地下の記憶消去室だ!!!」

「記憶消去室だと!!!? ……すまないが、ここでお前を殺さない  
と王に密告するだろ? だから消えてもらおう」

俺はメラゾーマを落とした。

「ギャアアアアアアアアアア!!!」

兵士Aがいたはずのところには、何も残らなかった。

「レイア、そいつらを砕いてくれ」

『Nuclear LASER』

核の光線、だ。

「行くぞ!!!」

『はい、マスター』

~~~~~記憶消去室~~~~~

俺は記憶消去室に入った。

「お前は、ノエル!!」

「なぜここに来た!!」

「お前らと話してる暇は無い!!!　フィーナはどこだ!!!」

「フィーナ様ならこの奥にある特殊牢の中に移動させたが、指一本触れさせんぞ!!!」

そいつらは白衣を脱ぎ、戦闘モードに入った。

「やれええええええ!!!!」

そいつらは武器を取り出してこちらに向かってきた。

……無駄なのに。

「……レイア、緊急回避機能を」

『はい、マスター』

「……絶界ぜっかい!!!!」

俺は絶海を部屋一帯に張り、人間も物もすべて消し去った。

「解」

全てが消えた部屋の中は、引越したばかりの部屋のようにだ。

俺は奥の扉を開き、中に入った。

『マスター』

「レイア、こつから先、フィーナを救出するまで、なにもしないでくれ」

『……分かりました』

扉の奥には無数の鉄柵がありその中にフィーナがいた。

「……フィーナ!!!」

俺は駆け寄った。 だが……

「フィーナ!!! 無事か!!!?」

「……あなた……誰……?」

……記憶が、消えていた。

第二十六話 死ぬより……辛い事（後書き）

なんかシリアスな展開になってしまいました。

第二十七話 記憶の代償

「……………あなた……………誰？」

信じがたい事だった。

フィーナの記憶が、消えている。

……………くそっ！！　　なんでだよ、なんのためにフィーナの記憶を消すんだよ！！　　消す必要があるのかよ！！

俺は鉄柵をぶち壊そうとそれに触った。

バチイイイイイン！！！！

「ぐ……………！！！」

『マスター、これにはなにか特殊なバリアが張られています！！
何の対策もなしに触るのは危険です！！』

「……………黙ってる」

俺はまた鉄柵を掴んだ。

バチイイイイイン！！！！

くそ……………！！　　腕が、つぶれる……………！！

それにフィーナ、お前は どうしてそんなに怯えた目をしている。

俺の知っているフィーナは、どんな事があっても決してそんな目はない。

「ぐ……。ちくしょ……。う……。めが……。！」

骨にひびが入る音がした。

それに視界が、チカチカする……。

「ぐ……。バ、バイキルト！」

俺はバイキルトで腕力を強化させた。

それと同時に、電流が流れてきた。

……対強化呪文か！！

「ぬ……。がああああ！！！」

「……。どうしてあなたは、そこまでして私をここから出そうとするのですか？」

バキッ！！

右腕が折れた。

「……。それは、お前が、俺たちの」

バキッ！！

左腕も死んだ。

「ぐ……………!! ……大切な!」

俺は力が入らない腕に力を出来るだけ入れた。

「仲間だからだ!!!!」

「……………な、かま……………?」

『マスター!! ……それ以上は危険です!!!』

「……………う、があああああああ!!!!」

やばい、これ以上は……………でも、やめちゃダメだ!!!

「……………なかま……………」

「ノエル!! ……ここだったのか!!!」

「あんた、なに無茶な事やってんのよ!!!!!!」

「ピキ……………ッ!!!!」

あいつらが来た。

……………無茶なこと、か。

「ノエル、俺たちも協力する!!!」

「やめてくれ!!」

「な、なんですって!!?」

「傷つくのは、俺一人で十分だ!!」

「お前なに自分勝手な!!」

「ピキーーーーッ!!」

俺は左手をあいつらに向けた。

「すまない!!　イオラ!!」

俺はイオラの爆風であいつらを牢屋の外へ吹っ飛ばした。

それと同時に爆風でドアも閉まった。

「ノエル!!」

「あんたまさか命かけるんじゃないでしょうね!!?」

「リベロ!　ミーナ!　スランボー!　お前達に頼みたいこ

とがある!!」

「なんだよ!!　ここまでしておいて他になにかあ!!」ここまで騒ぎを起こせば城のやつらが気づくはずだ!　だから連中を、この部屋にこないようにそこで始末してくれ!!」ってなに無茶言ってるんだよ!!」

「頼む！！　今この状態で連中が来たら間違いなく終わる！！
レイアがいるが、レイアは攻撃するまでの準備に時間が掛かる！
！　これは、お前達にしか頼めないことだ」

「……………分かったわ！！　その代わり、死んだら許さないからね！
！！」

「おう！！」

俺は外に来るであろう援軍の始末をやつらに頼んだ。

俺はまた鉄柵に向き直った。

「……………ノエル……………なかま……………」

「そうだ、俺たちは仲間だ！！　俺たち全員が揃ってなきゃこの
パーティーは成り立たない！！」

「なかま……………ノエル……………全員……………」

「だから俺は、お前を命がけで助ける！！！！」

……………腕が完全につぶれそうだ。

「ノエル……………なかま……………。」

フィーナの顔に光が戻ったような気がした。

「……………ノエル……………」

「頼む！　思い出してくれ！！」

バギッ！！

俺は一本の鉄を捻じ曲げた。

あと、一本。

「ぐおおおおおおおおお！！！！！！」

「……………ノエル！！」

「な……………んだ」

俺の腕はもう血まみれだ。　恐らくもう動かす事もできないだろう。

「もうやめて！！　これ以上やったらノエルが！！」

「……………」

「ノエルが、死んじゃうよ！！！！！！」

「……………良かった」

「何がよ！！」

「……………思い出したんだな」

第二十七話 記憶の代償（後書き）

……シリアスな展開になった話ってどうしたら明るく出来るんだろ
う。

第二十八話 生と死（前書き）

今回は、フイーナsideから始めます。

第二十八話 生と死

「早くしろ!!!」

私は言われるがまま、ノエルが作ったスペースをくぐり外に出た。

ドサツ!

「! ノエル!!!」

ノエルが倒れた! やっぱり、やっぱり……。

「やっぱり、私のせいなんだ!!!」

私が……もっと、もっと……!

「フィーナ!!! 無事か!!!」

向こうの部屋からリベロ、ミーナ、スランボーの3人が入ってきた。

「私は大丈夫!!! でもノエルが……!!!」

「なに!?!」

「ちょっとまちなさいよ!!!」

2人はノエルの元に駆け寄り、リベロが左胸元に耳を当てた。

「……大丈夫だ。呼吸はしてないけど心臓はほんの微かにだけ

ど動いてる」

「リ、リベロ！！ それは本当なの！？」

「ああ。 ただ、このままだと助かる命も助からない。 誰か人工呼吸を！！」

「良かった……って、え？ 人工呼吸……ですか！？」

このとき、一瞬の沈黙が流れた。

「……誰がやんの？」

「そ、そうですよね……」

「あ、先に言つとくが俺はやらんぞ。 男同士だなんて気色悪い」

「じゃ、じゃあスランボーちゃんとかレイアさんは……」

「スランボーはまず無理ね。 人間の身体とつくりが違うから」

「レイアも無理だ。 人工呼吸機能をつけてない」

『そうだったんですか』

「そうなんだ」

……ということとは、やるのは私がミーナとなる。

「で、ミーナはやり方わかるのか？」

「いいえ、知ってるわけ無いじゃない」

その途端、みんなの視線がこっちに向いた。

「……え？」

「フィーナ、お前は？」

「ごうごう時ってやっぱり正直に答えないといけないんでしょうか？」

「……知っています」

「よし、じゃあ、フィーナ！ よろしく頼む！」

「え??？」

「まあまあ、いいチャンスじゃない！」

そう言っつてミーナは私の耳元でこう呟いた。

「あんた前にノエルのこと好きだって言っつたじゃない」

「……！　　そ、それとこれとは……！！！」

「いいからいいから、ほらさっさとやる！　　人の命が関わってん

だよ……！」

私はそうやって言われるがままにノエルのもとへ移動させられた。

「わ、わかりました……。では、行きます！」

~~~~~ノエルside~~~~~

ここは……どこだ……？

俺はまたあの真っ白空間にいた。

ていつか、俺どうしたんだ？

「ノエルよ」

「ん？ ああ、じいさんか。 挨拶の前に教えてくれ。 これは夢を通じて会話してるのか？ それとも一番最初にあんたに会ったときのように移動させられたのか？」

俺は率直に聞いた。

「お主、覚えてないか？」

「え？」

「お主は仲間であるフィーナ・アルノミアを救出する為にその身を滅ぼした。 幸い、心臓はほんのかすかにだが動いている」

「……つまり俺「現世と冥世の狭間」ということだ」「マジか……」

「いま、そなたの仲間たちが助けようと手を尽くしておる。

蘇

生されるのは時間の問題じゃな」

「……そっか」

「だが、次死んだら、もう戻れないと思うがいい」

……分かった。

~~~~~ファイナ side~~~~~

「よし、呼吸も戻った！　あとは時間の問題だな！！」

「ファイナもよく頑張りました！」

褒められたけど、なんだか複雑な気持ちです。

「じゃあ、俺がノエル背負ってくからさっさと次の目的地へ行こう

「待って」「は？」

私はリベロのセリフをさえぎった。

「待って。　まだ私には、やらなければいけないことがあるの」

「やらなければならぬことって、なに？」

「お父さんの唯一の形見、ラーの鏡を取り戻すことよ」

「いや、ちょっとまで形見だったのかよ！！」

私は、あれを取り戻さなければならない。

だからこそ、前にノエルがやったように叔父上の名をかたる人間と戦わなければならない。

「私はきつと、叔父上と戦うことになる。その時はみんな、手を出さないください」

「……分かった」

私は、このことに一人でけりをつける。

……私の身代わりになった、エールのためにも。

第二十九話　フィーナとエール（前書き）

今回、ずっとフィーナ視点です。

第二十九話　フィーナとエール

私は、王の間の扉を開けた。

「叔父上！」

「な、フィ、フィーナ！？　なぜ貴様がここにいる……！」

「ラーの鏡を、今すぐに返してください！」

「……なぜだ、なぜお前は記憶を失っていない」

「返してください……！」

「やつら、失敗したのか……いや、私も確認した。ではなぜだ」

「返して……！」

「なぜだ、なぜだ……！！！」

ダメ、聴いてない。　だったら……！！

「力づくで、返してもらおう……！」

私は幻想の槍を取り出し、叔父上に向かった。

「あの槍……！」

「あれは……！」

この槍は、この世界には存在しない架空の槍。 私がエールから授かった物だ。

「なぜだああああ！！！！」

叔父上は右腕を振りかざし、槍をはじいた。

いままでマントに隠れて見えなかったけど、今ので分かった。右腕が、剣になっている。

「なぜだ、なぜだ、なぜだ！！！！ なぜ貴様は記憶を失わん！！！！」

叔父上は剣をがむしやりに振り回した。

「……………！！！！」

「貴様が記憶を失いさえすれば何も恐れるものはない！！！！ なのに貴様は記憶を失わん！！！！」

叔父上の声がだんだんと大きくなる。

「なぜだ！！！！ なぜだ！！！！ なぜだ！！！！！！！！」

「……………その理由を、教えます。 ですから気を落ち着かせてください」

私は落ち着いた口調でそう言った。

「……………くっ！！！」

叔父上は静止した。

「……………私が記憶削除装置にかけられる直前、私の中にいたもう一人の私、エールが私に言ったの。『私が代わりになる。私の記憶をすべてあなたにあげるわ。だからお願い、ラーの鏡を必ず取り戻して。世界の破滅を導く前に』。……………今の私はエールの助けを得ることはできない。でも、今の私はフィーナでもありエールでもある。光と影が共になった存在。この武器も彼女の物」

「……………」

「さらに言えば、私とエールの立場は気づかぬ間に入れ替わっていったらしいの。つまり、本当は私がエールでエールがフィーナ。私があとから生まれた存在なの」

「……………そういうことか」

「どうやら分かってくれたらしい。いやでも、本当に理解できたかどうかは分からないけど。」

「……………分かってくれましたか？」

「……………殺す」

「え??？」

「殺す殺す殺す殺す殺す！！！」

我が究極の計画を阻むものはす

べて排除してくれるわ!!!」

「やべえ、病んでるぞ!!!」

「本当に援護不要なの!!!?」

「ピキーーーーッ!!!」

『大丈夫なですか』

「ええ!!! みんなはノエルを守っててください!!!」

今みんなで動くとノエルを守る人がいなくなる。それに、このことには私がけりをつけなければならぬ。

「我が計画はもうすぐ完成する!!! その計画を、阻むなああああああああ!!!」

叔父上はマントを脱いだ。

右腕は剣、左腕は大砲、胴体には大型の盾……これはもう改造人間サイボーグだ。

「すべて消えろおおおおおおおおおおおおおおお!!!」

ズガアアアアアアアアアア!!!

大砲が放たれ、私は扉を突き破り、城の中央広間のシャンデリラまで吹っ飛ばされた。

「っ！！！！」

私はシャンデリラに乗っかるような体勢になった。

「フィーナ！！！」

リベロの声と同時に、叔父上が突進してきた。

「ば、バギガロン！！！！！」

私はエールが研究していたバギムーチョを越える新呪文、バギガロンを使った。

キイイイイイン！！

え？

バギガロンは盾にあたると私のもとに跳ね返ってきた。

……反射効果付加！？

ドガシヤアアアン！！！！

私は間一髪でよけたけど、すぐ隣にあったシャンデリラの鎖が砕け散り、地上へ急降下することになった。

「……っ！！！！」

更にその下には叔父上が待ち構えている。

その剣には電流が走っているように見えた。

「っ！　ブラインドノア！！」

これもエールの技だ。　幻想の槍専用で、槍の最先端から相手の視界を無数の幻で包み込む。

「グルアアアアアアアア！！」

もうこの世のものとは思えないほどの声で大砲を撃った。

そしてすべての幻想を打ち破った。

まずい……やられる！！

第三十話 仁義無き血縁死闘

私を乗せて落ちゆくシャンデリラ。

その下では叔父上が電流を放った剣を構えている。

ブラインド・ノアも打ち破られ、私は打つ手がなくなってしまった。

叔父上の右腕が動く――――。

……斬られる、そう思い、目をつぶった。

……

…

……あれ？ なんとも、ない？

目を開けると、ノエルが叔父上の剣を白刃取りしていた。

「の、ノエル!？」

「……なにやってんだよ、おまえ」

声は冷静だったが、やはり病み上がりなので辛いらしい。

「はやく避難しねえと下のやつらが潰れちまうぞ!」

「トの……」

私が下を覗き込むと、スランボーちゃん、リベロ、ミーナの3人（？）がシャンデリラを支えていた。

「ちょ、ちょっとみんな！！！」

「さっさと、降りろ……」

「シャンデリラだけでも重いってのに、あんたもいたらもっと重いわよ……！」

「す、すみません」

私はシャンデリラを降りた。

それと同時に、3人を抱え、バギマを地面に向けて連射し、螺旋階段へと避難した。

「すみません、みんなに迷惑をかけてしまっ……！」

「……謝るのはあとだ。ノエルも避難させなきゃな……」

「まったく、復活して早々また死のうつつのよ、あいつ……！」

下を見るとノエルはまだ白刃取りを続けているが、だんだん押されてきているのが分かる。

しかも向こうは大砲も備えている。いつ撃たれてもおかしくない。

「……私、言ってきます」

私は幻想の槍を持ち直し、下にジャンプした。

「な、おい!!」

「ちょっとまってそれ自殺行為!!」

「死にませんから大丈夫です!!!」

私は床につく直前にバギマでスピードを緩め、普通に地に降り立った。

「ちょ、ファイナ!! 逃げろって言っただろ!!」

白刃取りしながらノエルが叫ぶ。

「逃げるのはノエルの方よ!! このことには私がけりをつけなければならぬ!! だからお願い、逃げて!!」

私は叔父上の後頭部目掛けて槍を突いた。

でも、叔父上はノエルのほうを向いたまま、私を蹴った。

「っ!!」

「無茶すんな!!」

「そっちだって、また死ぬ勢いでやってるでしょ!!? ノエルが死ぬなんて、もう見たくない!!」

私は槍を地面に突き刺し、立ち上がった。

「無茶なのはノエルの方。　　なんでそんなに必死に、それも命を賭けてまで戦うの!?　　この前だってそうじゃない!!　　捕まった私たちを助けるためにギリギリまで敵の攻撃を受けようとしてたじゃない!!」

「……それとこれとはかんk「関係あるよ!!　　自分を助けるために誰かが死んだら、誰でも辛いわよ!!」………」

「話してる暇などない!!!!」

叔父上は剣を引き戻した。

「あんなこともできたんだ………」

「しまった!!」

「死ね!!!!」

叔父上は右腕も大砲にし、右左連続で放った。

「!!!!」

「白昼夢・幻想曲!!」

私は幻想の槍の力を使い、叔父上の脳内に幻を送り込んだ。

さらに幻聴も流し、その威力は制御不能。

「ぐわあああああああああああああああ！……！」

「「ノエル（フィーナ）！……！」」

同時に叫んでしまった。

「「……………こうなったら」

どつやら同じ結論に達したらしい。

「「一緒に戦う！……！」」

私は槍を構え、ノエルはどこからともなく剣を取り出した。

「はあああああ！……！」

「うおりやあああ！……！」

私は槍を突き、ノエルは剣を振った。

第三十話 仁義無き血縁死闘（後書き）

ちよつと中途半端ですがまた次回。

第三十一話 仲間の意味（前書き）

最近、オリ技が増えてきました。

……大丈夫かな？

第三十一話 仲間の意味

俺とフィーナは、同時に王に向けて刃を向けた。

「はあああああ!!」

「うおりやあああ!!」

「無駄だ!!」

王は両腕の大砲を俺たちに向け、それらを撃った。

ズギヤアアン!!

「!!!!」

俺たちは壁まで吹っ飛ばされた。

「我が計画を阻む者は例え姪でも始末する!!
それがあの方と
の条件!!!!」

あいつは右腕をドリルにし、それを天に振りかざし、そこから分散型の電撃を放った。

「ぐっ……!!」

「きゃあ!!」

電撃は空中には届かない。

だから上にいる連中は大丈夫だろう。

……でも、俺らは

「やべえ、視界が……!!」

「身体が……!!」

全身の神経が麻痺してきたようだ。

そしてしばらくしてからやつは電撃を止め、ドリルを剣にした。

今度の剣からは闇のオーラが感じられた。

「姪を殺すのは容易いことよ……。だからまず、貴様から始末させてもらう!!」

瞬間的に俺の目の前に来て、すぐさま剣を振った。

っ!! 体が動かねえ!!

やばい!! もう直撃を避けられない!!

「森羅万象斬・改!!」

「スラ・サイクロン!!」

「ピキーーーーッ!!」

目の前にミーナが眩い閃光とともに降り立ち、王を斬り、竜巻と一体化したスランボアの直撃を喰らい吹っ飛んだ。

ます！！」

レイアのバリアはひびが入り、もう限界そうだった。

『あなたはマスターにこう言いました！！』 『自分を助けるために誰かが死んだら、誰でも辛い』と！！』 でもそれは、マスターにも同じ事が言えます！！』 私はマスターの命を聞く守護者^{ガーディアン}。例えそれが勅命でなく私の推測だとしても、遂行するのが私の役目！！』 マスターの大切な人を、見す見す殺すわけにはいきません！！！！』

レイアの言う事は正しかった。確かに私も独行していた。ノエルに怒鳴ったのはいいけど、私も人の事を言えない。

「レイア、バリアそのままで！！」

私はレイアを抱え込んだ。

バリン！！

叔父上の剣により、バリアが粉碎された。

「ギアバギオルン！！」

私は右手を叔父上に向け、歯車のように鋭く縦回転する竜巻を放った。

歯車は叔父上の腹部にある盾にぶつかり、その場で急回転、火花を放ち叔父上を吹っ飛ばした。

「レイア、行くわよ!！」

『分かりました! Final Brake Mode...
Xculliber』

「バギガロン!！」

レイアのエクスカリバーという名の凄まじい剣撃に、私のバギガロンが合わさった。

合わさった二つの技は、叔父上の盾を突き破り、身体をも貫通した。

~~~~~ノエルside~~~~~

一瞬の出来事だった。

リベロに言われて、フィーナのほうを見たときに、王は吹っ飛んだ。

しかも身体を突き抜けて……。

「ノエル!！」

『マスター!！」』

2人がこちらに向かって走ってきた。

「おう、無事か?」

「『はい！』」

「よし、それなら」

よかった。      と言いつもりだった。

だがそれは、ある人物の登場によりお預けとなった。

「やっぱり、無理でしたか。      ダルビス・アルノミア」

そいつは突然王の真横に現れた。

薄緑の髪で顔の右半分が覆われている。

いかにも知系の感じだ。

「ぐっ……、すいみま、せん、でした……。      例の儀式を行う」とは、出来ませんでした……」

「せっかく、あなたに科学の力を与えたのに、失敗ですか？」

謎の男は王を見下していた。

「でも、まだあなたの真の力は目覚めていませんよ？」

「……な、なんだと……」

「今からあなたの力を目覚めさせます。      そしてこの転生者たちを足止めさせてください」

「……………わかった」

その後男は謎のカードを取り出し、それを王の上にした。

するとそのカードから激しい電流が走り、王を包んだ。

「う……………うがあああああああああ！！！！！！」

断絶魔のような叫びのあと、王は、完全なる機械となった。

第三十一話 仲間の意味（後書き）

後書きにノエル登場はアスカナ国編終了後にします。

……感想がほしい。

## 第三十二話 とある国王と改造人間

完全機械化した王はそれまでとは比べ物にならないスピードで襲い掛かってきた。

「お前ら、分散しろ!!」

「」「」「おう!!」「」「」

全員で一斉に散らばり、王は俺に目をつけた。

「さあこい!!」  
作成・銀河の剣!!」

俺は銀河の剣を作り、それでつばぜり合いを仕掛けた。

ギギギギギギギツツ!!

激しい火花が散り、こちらの刃が欠けてくるのがわかる。

「ギガガガガガ!!」

「何言ってるのかわかんねー!!」

もうもはや意味不明だ。それでも前よりも確実に強くなっている。

バキン!!

剣が折れ、剣先が吹っ飛んだ。

パシュン！！

王の剣は空を斬り、衝撃波を生んだ。

「うおわああああ！！！！」

この至近距離では避けられない！！

「イマジンブレイカー！！」

「サイクロンアックス！！」

「スラ・ミラージュー！！」

一瞬、なにが起きたのか分からなかった。

気が付くと王が吹っ飛んでいた。

どうやら、スラ・ミラージューによるマヌーサ効果と、それを打ち砕き威力を上げるイマジンブレイカー、そして斧を二本使った高速回転斬りで吹っ飛ばしたらしい。

「あのイカレ野郎を、ぶっ飛ばすぞ」

「もちろんよ」

「……ノエル、フィーナ。お前らはあの男のあとを追え」

「「え??」」



「あの男はなにをしでかすか分からん。儀式とか何とか言ってたからな。あと、もちろんだがレイアも行け」

『分かっています』

「大丈夫よ、あんなやつ。私たちだけで何とかするわ」

確かに、あいつ相手は俺のような接近系よりも、こいつらのような間接系のほうが向いてるだろうな。

「分かった。あの男は俺たちがなんとかする。フィーナ、あいつが言ってた儀式について、何か心当たりは？」

「……ある。というよりも、エールが知っていたみたい」

……なんかいまいち理解できないが、まあいいだろう。

俺たちはあの男のあとを追い、地下へと向かった。

~~~~~リベロside~~~~~

あいつらが行ったあと、俺たちはまた戦っていた。

「メラガイアー!!!」

「スラ・ホームラン!!!」

俺はメラガイアーを、ミーナは斧の柄で思いっきりスランポーを吹っ飛ばして攻撃した。

が、ダルビス（国王）は目の前で剣を激しく振り、攻撃を相殺した。

「ピ、ピー！」

スランポーは剣があたる直前で急停止し、地面に落ちた。

そしてダルビスはそれを見逃さなかった。

「ガギゴ、ギガガゴ、ゴガガー！」

やばい！！　そう思ったとき、俺の体は動いていた。

王は右腕を大砲にし、それをスランポーに向けてぶっ放した！

ドンッ！！

大砲は俺に当たった。

当然だ、俺がスランポーを突き飛ばしたからだ。

そして弾は激しい爆発を巻き起こし、俺を天井まで吹っ飛ばした。

「リベロ！！　逃げて！！！」

ミーナの叫びは、無に終わった。

ダルビスは俺の真上に瞬間移動し、俺を叩き落とすかのごとくハン

マーを振り下ろした。

ドガバギ!!

怪しい音がして、俺は地面に撃ちつけられた。

地面は激しく潰れている。

「っ!!」

更にハンマーを持って急降下してきた。

これは確実に俺が潰れる。

「アホウ!! アクスブレイダー!!」

これにはまじでビビった。

俺のすぐ目の前で斧が二本、ブーメランのように宙を舞っていたからである!!

おかげでやつハンマーは粉碎できたが…… 実を言うとミーナの方が怖かった。

「お前アホか!! なんてモロに喰らってんのよ!!」

こいつは仰向けになっている俺のわき腹を蹴った(怪我人なのに)。

「……アホなのはおめえだろ!! なんてかなり危険な技使うんだよ、もう少しで俺の顔が半分消えるところだったぞ!!」

「そんなことどうでもいい。それよりもスランボー!!」

「ぴ、ピキッ!?!」

「もうちょっとスピードを速くして。そうすればあの鎧も打ち砕けるはず」

「……ピキッ!?!」

「お、俺は……!?!」

「あなたはスランボーの攻撃を援護。さっきのようなことにならないようにするためにね」

「い、イエッサ……」

そう言うしかなかった。

このときのミーナ、すっげえ怖かった……。

第三十三話 スランボ―第二形態?? (前書き)

今回はリベロsideです。

第三十三話 スランボー第二形態??

「斧無双!!」

「スラ・デイン!!」

ミーナの斧による衝撃波とデインをまとったスランボーによる突進攻撃で、ダルビスは吹っ飛んでいった。

「お前ら俺の後ろに移動しろ!!」

「おう!!」「ピキッ!!」

「吹っ飛べ、メラギユラン!!」

二人が俺の背後へ避難した事を確認し、俺はメラガイアーを強化したメラギユランを放った。

大広間の半分ほどの大きさはある火の玉が空中に現れ、地面に落下した。

ただ、このままだと俺らも被爆するから……

「マホカクタ!!」

光の壁で被爆を防ぎ、その上反射効果で威力を倍増させた。

あとは、あいつに効いてるかどうか……。

「……リベロ、来たわ!!」

「なにっ!?!」

本当に来た。　　やつはこの炎の中をごく普通に歩いてこちらに向かってきた。

「アスカナ国の人間は、化け物か!?!」

「いやそれ以前に化け物でしょ」

そう言いながら、俺たちは間接攻撃でやつを足止めしようとした。

だが、どれもやつの鎧によって消し去られてしまった。

「ゴグラ!!」

何語だよ!!　　そう思うが速いが、やつはガトリング砲を放ってきた。

「ちよつとまで死ぬ!!」

「ちよつと!　　なんとかできないの!?!」

「無茶言っな!!　　呪文ならまだしも兵器だぞ!!　　俺は呪文全般しか対処できない!!」

「そんなこと自慢すんな!!」

やばい、このままじゃらちがあかねえ!!

「スランボー、すまん!!」

「ぴ、ピキイ!?!」

俺はスランボーを掴み、まだ研究中の呪文を唱えた。

「アルケミーガ!!」

スランボーの体は人二人が入れるぐらい円に引き伸び、そして盾になった。

盾となったスランボーはガトリング砲を全てはじいた。

「レリス」

盾は縮み、もとの姿に戻った。

「ぴ、ピキツ??」

「ちょっとあんた、なにしたのよ!?!」

「スランボーを盾にした」

「は!?!」

「俺が研究していた呪文『アルケミーガ』でスランボーの体を盾に変換させた」

「それで!?!」
それでスランボーが死んだりしたらどうすんのよ

「!!」

「そんなときは……そんなときだ!!」

俺はそう言い放ち、右の手のひらにイオラを溜め、やつに向かってダッシュした。

そしてその手のひらをやつの頭部に打ちつけ、爆発させた。

「ミーナ!!」

「まだ納得したわけじゃないけど……大車輪!!!!」

ミーナの前転型の回転斬りが決まり、鎧は粉々に粉碎された。

「よし!!　こい、スランボー!!」

「ピキッ!!」

俺はスランボーを掴んだ。

「アルケミーガ!!」

スランボーはレイピア状の剣になった。

「これで、終わりだ!!　サンクチュリオン!!!!」

サンクチュリオンは光の速さで敵を何度も突く技。

鎧もないこいつじゃ、耐えれないはず!!

ズザズザズザズザズザズ

俺が突くと、突いた場所から火花が飛び出る。 どうやら、肉体
までもを機械にしたらしい。

「だがこれで俺の勝ちだ」

俺はレイピアで突くのをやめ、剣先を天井に向けた。

するとそこから眩い光がほとばしり、俺を包んだ。

俺はそのまま剣を降ろし、身をかがめ突進した。

「スプレンドェットバニッシュー!!」

光の速さで突進し、やつの腹を突き刺し、やつを激しく斬った。

やつの腹は真っ二つになり、そこから機械の部品などが大量にあふれ出た。

「……こんなのが、本当にあいつの叔父なのか」

「だとしたら彼女、すごく悲しむわ」

こいつの機能は停止している。

だからもう動く事はないだろう。

「……ニフラム」

俺はこのガラクタを消し去った。

……あいつを、悲しませない為に。

第三十三話 スランボー第二形態?? (後書き)

……感想がほしい。ただそれだけです。

第三十四話 ラーの鏡と謎の男(前書き)

今回、おまおまです。 リーアトキ。

第三十四話　ラーの鏡と謎の男

俺とレイアはフィーナについて行き、地下の最深部に辿りついた。

そこは明らかに怪しげな儀式を行うかのような場所だった。

床に巨大な魔方陣が描かれ、その中心に真正面にある壁にかかっている鏡にむけてラーの鏡を掲げている男がいた。

壁の鏡とラーの鏡は一筋の光で結ばれ、ラーの鏡から男を伝って魔方陣へと光が送り込まれている。

壁の鏡には怪しげな空間が映し出され、今にも飛び出てこの部屋を包みそうなほどだった。

さらに俺たちの体は金縛りにでもあったかのように動かない。

「...Das gromen garhald. Deffe
rendimenlin. Kamnas FULLMET
AL ALCHEMIST」

激しい地鳴りとともに魔方陣から光があふれ出た。

しばらくして、光が収まると、体が動けるようになった。

「これでこの世界はさらに繋がった」

男がつぶやいた。

「あと一つで我々の計画は完了する。……だからそのために、邪魔なものは消す」

男は右手を地面に乗せ、そこから何かを取り出した。

……槍だ。……ということは錬金術か。

「お前、干渉者だよな」

「まあ、そういうことだね。確かに、私達は干渉者と呼ぶに等しい」

「お前らが何を企んでるかは知らねえが、俺はお前を許すわけにはいかない」

俺は双剣を取り出した。

「ほう、それはどうしてだい？」

「……仲間の唯一の肉親を、あんな戦いの道具にして、拳句に親の唯一の形見を世界を壊す道具にした。そんなことをして、俺が黙っているとも思っただろうか？」

メラゾーマ。

俺は炎をやつに向けて放った。

「そうか。でもそれは勘弁してほしいな。だってこうするしか他になかったんだからね」

男は槍で炎を打ち消した。

「だからって、他に何かなかったのですか!？ それになんで私の周りのものがこんな事に使われるんですか!！」

フィーナは叫び、真空刃を放った。

その真空刃をも、男は打ち消した。

「お前らがやっていること、それが本当にうまくいくとも思っているのか……？ もしそうだとしたら、それは大きな間違いだ」

「？ なぜですか？ 私達の計画は着実に進んでいる。もう完成するのは時間の問題なんだがね」

「はあ……やっぱバカか……。教えてやろう!！」

俺は双剣を持ち直した。

「なぜなら、俺たちが、その幻想を、ぶち壊すからだ!！」

俺は男に突進した。

だが剣は空を斬った。ギリギリのところでは避けたらしい。

「フィーナ、レイア！　遠慮なんてするな、全力で行くぞ！！」

「遠慮なんて絶対しない！！」

『マスターの仰せのままに』

フィーナは槍で、レイアは特殊機能で応戦した。

しかし困った事に相手は錬金術を使うみたいだ。　錬金術は状況に応じて武器を変える事だってできる。

「私たちの計画は誰にも邪魔させない！　ゾンデー！！」

突然、頭上から電撃が走った。

まさかテクニクまで………ということはいつ、俺と同じチートか！？

「私はリーダーに従い、もういちど命をもらう！　だからそのために、邪魔するものはすべて消す！！」

男からもすごい魔力を感じる。

逃げようにもさっきの電撃で体が動かない！

「死ねええええええええええ！！！！」

男の両腕から、すべての魔力を解き放ったかのような衝撃波が放たれた。

やばい、おわ「させない！」

俺の目の前でフィーナが仁王立ちをした。

なにやってる！ このままじゃお前が！

「ノエルを死なせたりしない。私の大切な人は、もう誰も、死なせない！！」

フィーナが構えた槍から光がほとばしる。

そしてその光は俺たちを包み、やつの攻撃から俺たちを守った。

「私は、あなたを許さない。あなたは私を怒らせた！」

フィーナは槍をバトンのように回転させ、槍からは電流が走る。

「ふ……、その程度の力ですか」

男は槍を更に錬金し、ガトリング砲を造った。

そしてそれをフィーナに向け、放った。

「レイア、今よ！」

『Degend THUNDER RAIN』

フィーナの合図で、いつの間にか男の背後に回っていたレイアが、雷の雨を放った。

「っ!!」

だが、ガトリング砲は尚もフィーナ目掛けて飛んでいる。

フィーナは回転させていた槍先を弾のほうに向け、さっきまで溜めていた電力を一気に放出した。

弾は全て消え去り、電撃は男目掛けて走って行った。

第三十四話 ラーの鏡と謎の男（後書き）

ノ「そういやさ、藤龍」

藤「ん？」

ノ「お前、高校大丈夫なのか？」

藤「……………」

ノ「…………勉強しろよ」

藤「…………サーセン」

あ、そうだ。

予め言っておきます。

5月31日から6月3日まで修学旅行です。

さらに明けの土曜には塾のテストです。

なのでその間は更新不可です。

第三十五話 繋がる世界（前書き）

久しぶり、かな？かな？

第三十五話 繋がる世界

フィーナのはなった電撃は、男目掛けて直進している。

「くっ……。錬金！」

男は錬金術でガトリング砲を盾に変えた。

盾は電撃を防いだ。 が

『Blust』

レイアの指先から放たれた無数の弾がやつの中身に当たった。

「お前、名前はなんという」

「ぐっ……。レイガンだ」

「そうか、レイガンか。 できるだけ覚えておくとしよう。
ま、お前はここで俺たちに消される運命だがな」

俺は錬金術で壁を、壁全体を巨大な刃で埋め尽くした。

「行くぞ」

「ええ」

『……………』

「10秒間だけ相手してやる」

俺は超高速移動してリイガンに近づき、やつの盾を錬金術で分解した。

フィーナは俺が高速移動する前に呪文を唱えた。だから、俺の高速化が終わると同時にやつはぶっ飛ぶ。

レイアは俺の高速化についてきている。

『Whip sebred』

十の指から出した光の鞭でやつを縛り、フィーナの呪文に近づける。

「時間切れだ」

高速化が終わり、時の流れが元に戻った。

「…………ギガロン!!」

バグムーチョをも超える大きさの風の刃がリイガンむけて進んで行った。

そう、フィーナの放った呪文はバギガロン。しかも高速化中にレイアがリイガンを風の刃の進む方向に移動させていたから、どうあがいても避けられないのだ。

「…………なっ、いつの間に!!」

後ろに逃げようにも背後にはトゲの壁。

…………勝った。

バギガロンはリイガンにぶち当たり、壁へと吹っ飛ばした。

だが、突然リイガンとトゲの間に巨大な魔法陣が現れ、そこから巨体の男が出てきてリイガンを受け止めた。

「ご苦労だったなリイガン。　だが遊びすぎだ」

「ト、トドロキ様……！！」

トドロキと呼ばれたその男は一見プロレスラーのような体格だ。いや、下半身は魔法陣の中だからわかんねえけど。

「もう世界の融合は完了している。　そして残り一つの世界ももうまもなく完了する」

プロレスラー男は俺たちに言った。

「……なあ、残り一つの世界って、その世界の融合も完了したらどうなるんだ？　世界は無限にある。　このドラクエの世界は今のところファンタシースターとしか繋がっていない。　そしてついさっきに新たに融合したんだよな。　てことは、全部で4つの世界が融合したら何かが起こるってことだよな。　……どうなるんだ？」

俺は男に聞いた。　応答しただいでは斬ろうかと思っている。

「……それが知りたければ、二ヶ月以内に^{ヘルクラウド}天空城まで来るがいい。　二ヶ月以内に来れば面白いものが見れる。　魔族の王も待っているぞ」

男はそういいながらリイガンを連れ、魔法陣の中に消えようとしていた。

「魔族の王ってピサロのことか!? ピサロは今、天空城にいるのか!？」

俺の質問は耳に入っていないかのように男とリイガンは消えた。

あと二ヶ月でなにかが起こる。

今まで集まった竜神王の装備は二つ。 残りも二つ、竜神王の剣と兜だ。

残りの期間でそれらを集める事はできるのか……？

「……フィーナ、お前これからどうする?」

「へ?」

「お前はこの国の王女なんだ。 このままこの国に残って統治するのがいいんじゃないのか?」

そのほうがフィーナを辛い目にあわせなくて済むんじゃないかと思っただ。

「……それはダメ」

「え？」

「私がこの国にいても出来る事はなにもない。政治とかわからないから。それに私はノエルやみんなと一緒に旅をするのが一番楽しい。たとえ辛い事があっても、みんながいっしょならきつと乗り越えられる」

「……本当に、それでいいのか？」

「うん!!」

それは、本当にいい返事だった。

だからこそ守ってあげようと思った。

その後俺たちはアスカナ国を後にし、次なる目的地「グランバニア
大国」へと向かった。

……あれ、どっかで聞いたような名前だな？

幻想殺しの墮天使 フィーナ・アルノミア
賞金 1億7千8百万G

第三十五話 繋がる世界（後書き）

藤「長かったアスカナ国編もようやく終了〜！」

ノ「いつになったらシリアスな展開から抜け出せるんだ？」

藤「ん〜・・・第二章からかな？」

ノ「おそっ！！！」

藤「第一章のこの続きから終わりまでは脳内では物語が出来上がっているのですが、どうもシリアスでね・・・」

ノ「たつく・・・」

第三十六話 クリフト、いまこそザラキだ（前書き）

今回、ゲストが出ます。

ノエルとの関係は、クラウドさんの「最強による異次元輪廻」を「
覧下さい。

第三十六話 クリフト、いまこそザラキだ

アスカナ国をあとにしてグランバニア王国へと向かう途中、俺たちはとある町へと立ち寄った。

町の名前はフロブナらしい。

ただ、一つ問題がある。

「みんな、これから町で一休みしようと思っただが……一つ問題がある」

「なんだ？」

「ここに来るまでに何回か狩人ハンターに襲われたよな。アスカナ国を出る前までは俺だけが狙われているような感じだったが、出てからはなぜかフィーナまで狙われ始めている」

「そついえば……」

「俺の推測が正しければ、フィーナも賞金首になったんだ。おそらくアスカナ国の王を消したのはフィーナだと思われてるんだろ
う」

そうになると、このまま町に入るのもすごく困難となる。

「じゃあさ、ノエルが女装してフィーナが男装すりゃいいんじゃないの？」

とんでもないことを言うなこの女は。 絶対にお断りだ。

「あ、確かにそれ名案じゃね!？」

『確かにその方が危険も少ないと思います』

てめえら……!!

「はいはい、そうと決まれば早速お互いの服を交換しなさい」

「っ! なんてだよ」

「だってそれが一番手っ取り早いじゃん」

「そ、そういう問題なの……?」

俺はトベルーラで上空に逃げようとした。 でも飛ぶ前に捕まっ
た……。

「いいからさっさと脱ぐ!」

「「キヤアアアアアアア!」」

~~~~~数分後~~~~~

「……結構にあっじゃん」

「うん、悪くない」

「……もうどうにでもなれ」

今の俺はフィーナの服をまとい、胸にスランボーをつめている（これでスランボーが見つかる恐れもない）。

フィーナは、俺の服で、胸はどうしようもないのでリベロのローブをかぶった。

『これではれませんね』

「スランボーもおとなしくしてなさいね」

「ピキ」

……まさかまた女装するはめになるとは。

「……フィーナ、大丈夫？」

「……もうお嫁にいけない」

「いや、お前の着替えを手伝ったのはミーナだろ？  
問題なくね？」

「……女なのに男の格好をしてしまった……」

……

~~~~~フロブナ町~~~~~

……確かにこの作戦はうまくいったらしい。簡単に入れた。

そしてやはり俺の推測どおり、フィーナは賞金首になっていた。

幻想殺しの堕天使 フィーナ・アルノミア

賞金 1億7千8百万G

……なんかワンースミたいな展開だな？

とりあえず町は平穏無事らしい。

だが、ひとつ気になる。

……男がまったくくない。

別に女だけの国もある。だから別に不思議なことではないのだが……なんか引つかかる。

『マスター、あれがこの町で一番大きな家のようです』

「よし、じゃあ行こうぜ！！」

やけにテンション高いなりべロ。一体何があった。

俺たちは家のドアを開けた

「しつれーしま」キヤアアアアアアアアアアアアアアアア！」「なにごと
！？」

入るや否や悲鳴が聞こえた。

俺たちは悲鳴の方へと急いだ。

バンツ！！（扉を開ける音）

扉の向こうは、大量のおねーさん方にキヤアキヤア騒がれて囲まれている男がいた。

……こいつがこの家の主？　　ってどっかで見たとあるような気が……。

「やあ、ようこそ我が屋敷へ」

男は優雅に言った。

「そこのお嬢さん方二人。　　どうぞこちらへ……」

そのとき、男が差し伸べた手から超音波らしきものを見た。

「左右に散れ！！」

「『え！！？』『』」

俺はみんなを左右に散らばせた。

超音波は扉の向こう側へと飛んでいった。

（レイア、さっきの超音波……分析したか？）

(はい、マスター。 あれは洗脳音波のようです)

……やっぱり、な。

「どうしたんですか?」

「……お前、ブリーチの世界でレイの地獄ヘルヘブンor天国で地獄に運ばれた大原仁おおはら ひとしだよな!？」

「……え、なんでそれを……」

「忘れたか?」

俺は服を……脱いたらダメダメ。 服からスランボーを取り出した。

「あのと時転校してきた神谷聖夜ノエルだ!!」

「!!!! な、なぜ貴様が俺のハーレムランドに!？」

「それはこっちが聞きてえよ!! ていうかこの町に男がいなかったのはお前の仕業だな? どうせ女もお前が洗脳して無理矢理ハーレムにしたんだろ!？」

「ぐっ……まあいい。 お前が女装していたってことはそっちのロープの人は幻想殺しの堕天使だろ?」

仁はまた超音波を飛ばした。 この距離だと無理だ……!!

第三十六話 クリフト、いまこそザラキだ（後書き）

ノ「MP無駄遣いしちゃった」

藤「ほんつとうに無理矢理ハレムとかやめてほしいよね」

仁「なんだと貴様！！」

ノ「ところでじいさん、判決は？」

神「うむ。能力悪用、非合理転生、契約踏み倒し（世界を守っ

ていない）の罪により、お前を最高冥界へといざなう」

仁は泡のように消え去った。

ノ「ところでお前、来週の事大丈夫か？」

藤「ノノノ」

ノ「ま、いつか。詳しい事は活動報告を読め」

クラウドさん、仁の登場は第二章にする予定でしたが・・・早め
だしてしまいました。

不都合がありましたらご申しつけください。

第三十七話 全国首脳会議開催！（前書き）

新キャラ登場です。

そしてちょいグダ気味です。

第三十七話 全国首脳会議開催！

仁の野郎をぶつたおした後、俺たちはグランバニア大国へついた。

だが、腐っても指名手配犯。ただで入国する事は難しい（グラ
ンバニアは入国の検査が厳しいらしい）。

俺たちは門の前で立ち止まった。

……どうやって入ろう？

「……なあ、この国って町はないのか？」

「町は城の中にあるみたいだからな。そこまで大規模なんだよ
この国は」

「ちえ、金持ちの考える事はわからねえよ」

うん、俺もわからない。

「あ、お兄ちゃん危ない！」

「へっ？ ……おわっ！」

振り向き際にサッカーボールが俺の顔面に直撃した。

「う、うめんなさい……」

俺にボールをぶつけたのは、濃い青っぱい髪で短髪の男の子だった。

「いや、いいんだ。 ところでキミはこの国の人かい？」

「ううん、違うよ。 僕はセントハイムの王子だよ」

……セントハイムということは、アリーナの国か。 その王子で濃い青の髪ってことはクリフトの血が混じってるな？

「お兄ちゃんたち、もしかして旅人？」

「ん、まあ、そういうことになるな」

「だったら一緒に来てよ！ この国の王様は旅人が大好きだからきっと歓迎してくれるよ！」

王子なのに俺たちを見てもなんの反応もない……どゆこと？

まあ、こんな感じで俺たちはいとも簡単にグランバニアに入ることができた。

~~~~~城内~~~~~

グランバニアはとても穏やかな国だ。

国民の笑顔がとても暖かく、なにかを企んでいるような雰囲気でもない。

「ななな！                   エーミール王子！                   なぜそのようなものと共にい



るのです!？」

声の主は赤い兜と赤い鎧で身を包み、口ひげが特徴的な兵士だった。

……ライアンか。

「あ、ライアン! さっき外で遊んでたらこの人たちにボールをぶつけちゃって、だからそのお詫びにと思って中を案内してるんだ!」

「い、いけませんぞ王子! この者たちはあゝ、まあよいではないか」リュカ様! あなたまで何を!」

ライアンの言葉をさえぎったのは、一目でわかる。紫のターバンと質素な服装の男。

グランバニアの国王だ。

「僕にはその人たちが悪者には見えない。それに、キミの胸に隠してるスライムも、キミたちとうちとけてるようだしね」

……さすがは魔物使い。隠し場所をあてましたよ。

(フィーナ、スランボーをだしてくれ)

(え? いいのですか?)

(別に大丈夫だろ)

フィーナは服からスランボーを取り出した。

「ピキッー！」

スランボーは元気良く着地した。

「な、スライム！？」

「ほお、なかなか強いスライムだね。見たところレベルは48だね。灼熱の炎を使えるけど、まだ完全なコントロールは不可能か。……でも、それを抜きにしてもスラリンと張り合えそうだね」

なんで一目でそこまで分析できるんだよ！！

「ところでリュカおじさん、会議はいつ始めるの？」

「ん？ ああ、そうだったな。キミたちも参加するといい」

「リュカ様！！」

「キミたちはどうやら竜神王の装備を集めてるみたいだからね。もしかしたら、どこか行きたい場所があるのかもしれない」

こんな感じで、俺たちは会議に参加する事になった。

~~~~~会議室~~~~~

「で、リュカ。指名手配犯をこの会議に呼ぶとは……一体何を

考えているんだ?」

青いヘルメットにゴーグルをつけた男が言った。　　おそらくローレンシアの王子だろう。

「まあ、そう固い事言うなローレ。　こいつの考える事だ、おそらくなんか意図があるんだろ?」

今度は茶髪の男が言った。　　アリアハンの勇者か。

「そういうことだ。　で、早速だが本題に入る」

リュカは数枚の紙を取り出した。

「最近、ソロを見かけないよな?」

「ああ。　ていうかあいつ、そのやつらと同じように指名手犯扱いになっちまってるからな」

そう言っただけ俺たちを睨んだのは青髪の青年、おそらくレックだ。

「そ、そこまで毛嫌いする必要はないんじゃないでしょうか?」

ローレの隣に座っていた桃色のローブを身にまとった女性、ムーンブルクの王女が言った。

「話を戻すぞ。　ソロを最近見かけた者はいない。　そしてそんなとき、ロザリーヒルに住んでいたピサロにソロからの呼び出しが来たらしい」

「「なに!?!」」

「……よく知ってんな」

「ロザリーヒルの住人から通告があったんですよ」
なるほどな。

「……ところで、さっきから気になっていたんだが」

「? どうした?」

「この中に、魔物がいる」

「……そこにいるスライムか?」

「ピキーツ!!」

いや、スランボーじゃない。

「……そうか。 わかったわよ、ノエルが言いたいことが」

ミーナが言った。

「わ、私もわかりました」 「ま、まさか……」 「まったく、
なんで今まで気づかなかったんだよ」

左から順にタバサ（リュカの娘だろう。髪は金）、バーバラ、ロー
レだ。

「……そう、レイドックから来た、レック。 お前だ」

俺は言い放った。

そしてそれと同時に、レックの身体が歪み、ムドーと化した。

第三十七話 全国首脳会議開催！（後書き）

ノ「……なんかいいところで終わってんだけど？」

ファイ「仕方ありませんよ、この人が作者なんですから」

藤「……………」

レ「……なにがあつたのでしょうか？」

ミ「時期的に考えて……失恋、かな？」

リ「リア充ルートへの道がふさがって崩れたか」

藤「……もういい」

ファイ「あの……？」

ス「ピキツ？」

藤「……俺は二次元に走ってやるうううううううううう！！

！……！！」

ノ「それ絶対にダメだああああああああ！！！！」

藤「うるせええええええええええ！！ 走ってやるんだああああ

あああ！！！！」

注）まじで走りかけています。

第三十八話 守られる者(前書き)

やはりシリアス……。
そして妙にsad sad。

第三十八話 守られる者

全国首脳会議の途中で、レックはムドーと化した。……いや、俺が正体を暴いたからか？

とにかく、もう参加者全員大パニックだ。特にレックの妻でもあるバーバラからしてみれば……

「……………」

気絶してるので俺が抱えました。

「よくも、よくも我が完璧なる計画を始める前に終わらせおつたなあ！！」

自分で言ってる情けなくならないか？

「だが、我が計画はまだはじめることができる！！ 出でよ、我が僕たち！！！」

ムドーの叫びとともに、どこからともなく魔物が大量に出現した。

「くっ……おい、リュカ！！！」

「なんだ？」

「ここじゃ狭い。 同士討ちになる可能性がある」

「それもそうだが、場所を変えると何の関係のない人たちにも被害

g「キヤアアアアアア！！！！」！！！！」

その悲鳴は外から聞こえた。

「おい、城下町にも大量にいるぞ！！」

「本当か、ローレ！！」

「ああ、やべえよ……もう、地面が見えない」

窓から外を見たローレが言った。

そしてその窓から紫色の風が出て行った。

……あいつ。

「ふははははははは！！　これでこの国も滅亡！！　幸せなも
のなど消え去ればいいのだ！！」

ムドーは笑いながら消えていった。

これで残ったのは無数の魔物たち……。

「リベロ、ミーナ、スランボーここを頼む！！　俺とフィーナと
レイアは町のほうでリュカを応戦する！！」

「了解！！」

「行くぞ、フィーナ、レイア！！」

「『はい!』」

俺たちはリュカと同じように窓から飛び降りて町へ向かった。

~~~~~城下町~~~~~

もう、めっちゃめっちゃだ。

本当に地面なんか見えないぐらい魔物だらけだ。

辛うじて地面が見えても、赤く染まっている。

.....

「錬金、アナザーステルス」

俺は錬金術で地面に魔物だけに反応する地雷を仕掛けた。

バポーン!!

周りにはいる魔物は吹っ飛び、視界が開けた。

「フィーナ、まずはリュカを探すぞ」

「ええ」

「レイアはほかに人がいないか確認してくれ」

『はい、マスター』

……ムドー、絶対に許さない!!

~~~~~リベロside~~~~~

ノエルたちが城下町の方へ移動してから、会議室はもう壊滅と言っているほどだった。

俺とミーナとスランボーで他国の王たちを援護するような形になっていた。

まあ、当然だわな。

……あれ、誰かいないような気が……。

~~~~~ノエルside~~~~~

「僕は、お前たちを絶対許さない!!」

やっとリュカを見つけた。ただ、リュカの目には怒りと悲しみがこめられていた。

「ドラゴンの杖!」

リュカの持つドラゴンの杖から炎がほとばしり、魔物たちを一掃した。

……やっぱすげえな、ドラゴンの杖は。

「リュカー!!」

「……ノエルか。結局僕は、父さんとの約束を守れなかった」

「……………」

「前にエビルマウンテンで、母さんと会ったとき、父さんの霊に言われたんだ。『グランバニアを守ってくれ』って。でも結局、このありさまだ」

……そんなことがあったのか。

「……まだ、あきらめるのは早い。まずは魔物を全滅させるぞ」

「……そうだな」

俺たちは互いに背を向け合い、魔物と向き合った。

「スラりん、ピエール、スミス、来い!!」

「ピキーーーーッ!……!」

「おっしやーーーー!! やつと出番だ!……!」

「……オマエラ、絶対、許サナイ」

突然、どこからともなくスライムとスライムナイト、そして腐った死体が現われた。

リュカの仲間か。

そいつらはかなり強く、一匹でも一度に10匹を相手にできた。

「……さあ、お前らの罪を数えろ!!」

俺は右手に作ったドルマドンを握りつぶし、それを一気に解き放った。

魔物たちは一瞬で消え去った。

「う、うわあああああ!!!!」

突如、聞き覚えのある声が聞こえた。

「「エーミール!!」」

俺とリュカは、声の元へと走っていった。

~~~~~

俺たちがついたころには、エーミールの前にライアンが仁王立ちし、ライアンの胸部を魔物が刺しているという状況にあった。

「ラ、ライアン……!!」

「……この魔物めが、ワシの目の黒いうちに王子を刺そうなどと百年早いわぁ!!」

ライアンは刺さっている魔物の剣を抜き、自分の剣で魔物をぶった切った。

それと同時に、ライアンはひざを突いた。

「ライアン、ねえライアン!!」

「……王子、どうか落ち着きなさい」

「で、でも!!」

「もうワシは王子を守ることはできない。だからせめて最後にこれだけハハッ」

ライアンは血を吐き、倒れかけた。だが、俺が倒れないように支えた。

「……フィーナ、レイア。周りの連中を頼む」

「わかりました。そちらもお気をつけて」

『すべてはマスターの仰せのままに』

フィーナとレイアは他の魔物を討伐しに行った。

「すまない、ノエル殿…ゴハツ」

「無理すんな」

「だが、どうしても最後に、王子に伝えなければならぬことが…」

「なに？」

「王子……。今まで黙っていたが、今言っておきます。王子のご両親、アリーナ様とクリフト様はそれぞれ武闘家と僧侶。その二つの血が混ざり、子供として生まれたあなたは生まれながらにしてパラディンなのです」

「……僕が、パラディン？ 冗談でしょ？ だって僕は、誰も守れない。誰かに守られながら生きてるんだ。今だってライアンが僕を守って、それ以上は言わないでください」……」

「……どうか、誰かに守られるのではなく、誰かを守る……そんな人間になってください。あなたはパラディンなのだから、誰かを守る能力は持っています」

「そんな……いきなりパラディンとか言われたって、僕、どうしたらいいか……」

「それから、王子。クリフト様の形見の指輪は持っていますな」？

「え、う、うん。これでしょ？」

エーミールは左手の中指にはめられた指輪を見せた。

「それは、賢者の石の原石です。だからそれを、絶対に誰にも渡さないでください」

賢者の石！ まさかそうつながるとは……。

「ノエル殿」

「ああ」

「王子を……頼み……ます」

「……………」

「どうか……立派な……にんげ……んに……」

ライアンはそう言い、冷たくなった。

「ライアン！？　ライアン……！！」

その後、エーミールは、俺たちとともに同行することになった。

第三十八話 守られる者（後書き）

ノ「……なあ、なんでこんな重苦しい終わらせ方なんだ？」

藤「すみません。もうドラクエ編はシリアス続きになりそうです」

ノ「……リュカも結構辛かったしな」

藤「……」

第三十九話 盜賊団カンダタ（前書き）

藤「お久しぶりです、無事、帰還しました！」

ノ「夏休みの宿題も終わってたしな」

藤「これからまたがんばります！」

第三十九話 盗賊団カンダタ

俺たちはライアンの遺体を埋葬した後、新たな仲間エーミールとともにグランバニアをあとにした。

一応アレからあともいろいろとあったんだけど……今は話すべきじゃないよな。

生きている人はわずかながらいた。ただ、ショックで記憶を失ったり意識不明になっている人もいた。

結局竜神王の装備に関する話は聞けずじまいだった。

ところで……

「おい、その茂みに隠れているお前ら。そう、お前らだよ。出て来い」

俺が茂みに向かって言いうと、そこからパンツ一丁でムキムキマツチヨな連中がわらわらと現われた。

「へへ……一発で見破られるとは、やはり噂どおりの方だ」
「どんな噂だよ。」

「お、おい、ノエル。こいつら、お前の知り合いか？」

「いや、少なくとも俺は知らん。カンダタ共、俺が誰か分かってんのか？」

「へへっ、それはもうよく知っていますよ。 『国の破壊者』ノエル』とは、旦那のことでしょう?」

国の破壊者だったのか、俺。

一応フィーナの二つ名は知ってるけど俺のは知らなかった。

「お……まさか『幻想殺しの墮天使 フィーナ』さんまで一緒に……これは心強い」

「なあ、なんかよくわからん。 説明しろ。 なんでお前らはあんなところに隠れてコソコソしてた」

「いや、実はですね……。 ノエルの旦那に頼みたいことがあります」

「俺に?」

「ええ、さいです。 実は……」

~~~~~

俺への依頼は、何者かに捕まったカンダタ親分を救出することだった。

「親分はある豪邸に盗みに入りました。 オラたちはいざという時のため外で待機していたのですが……」

副親分と思われる青頭巾のやつが言葉を濁らせた。

「ですが？」

「……いや、その……」

なかなか言いそうにない。 頼んでんのはお前らだろが？

「……実は親分、3時間経っても戻ってこなかったんすよ！」

代わりに赤頭巾が言った。

「戻ってこなかった？」

「ええ！ その後俺らで見にいったんすけど、どこにもいなくて……」

「行方不明……か」

「そういうことっす」

大体分かった。 さて、どうしようか……。

「お前ら、こいつら助けるか？」

別にスルーしても問題のなさそうなイベントだろ。 ファイアー  
エ プレムに時折出てくる外伝みたいな。

「私はどちらでもかまいません」

「俺もだ」

「あたしもね。困ってる人を放って置けるはずないでしょ？」

『私はマスターのご意思にあわせるだけです』

「ピキピキッ！」

「……………」

約一名だんまり。

「お前はどつだ、エーミール？」

「……………この人たち、盗賊なんだよね？」

「ああ、そつだよな？」

「ええ、まあ、これでもですがね」

「……………でも、困っている。僕はライオンに誰かを守る人間になれって言われた。誰かを「守る」「つてことは、「助ける」「つてことと同じだよな？ だったら僕は、助けてあげたい」

全員一致か。にしてもまだ小さいのに、よくここまで考えられるな。

「じゃあ、そついうことだ。まずはその豪邸に案内してくれ」

「へい、わかりました旦那」

俺たちはカンダタ子分についていった。

~~~~~豪邸前~~~~~

「ここです」

俺たちがついた豪邸は、まあなんともすごいものだった。……
こんな森の中にあっという間かと思っぐらい。

森つてのが逆に怪しいぐらい。

「よし、じゃあ早速入るぞ。　フィーナ、レイア……と、あとも
う一人来てほしいんだよな……」

理由は、まだ言わないけどな。　とりあえず4人パーティにした
い気分。

「……じゃあ、僕でも、いい？」

「ん、ああ別にかまわん。　じゃあ、リベロ、ミーナ、スランボ
ーとカンダタ子分たちで見張りを頼む」

「わかった。　気をつけろよ。　……妙にいやな臭いがする」

「……そうか」

これで搜索メンバーは俺、フィーナ、レイア、エーミールとなった。

見張りメンバーはリベロ、ミーナ、スランボー、カンダタ子分。

俺たち搜索メンバーは豪邸に突入していった。

しかし、この後に起きる悲劇を、俺たちはまだ知らなかった。

第四十話 凶器豪邸 (前書き)

藤「今度、郡司侑輝さんの小説にノエルとフィーナが登場すること、
けっぺい!!」

ノ「仮面ライダーの世界らしい。 どんな人たちがいるのか俺と
しては楽しみだな」

フィー「はい。 そうですね。 (仮面ライダーって……何でし
よう?)」

第四十話 凶器豪邸

カンダタ親分を救うためにある豪邸に侵入した俺、フィーナ、レイアそしてエーミール。

この豪邸、やはりリベロが言うように、妙な臭いがする。

まあ、その原因はすぐに分かった。

……いるんだよ。 悪魔系やゾンビ系のモンスターどもがウジャウジャと。

「フィーナ、対ゾンビ系の攻撃重視。 レイアはとにかく敵を攻撃。 エーミールは悪魔系重視で頼む」

「はい、分かりました!!」

『Battle Mode・・・SET』

「や、やってみるよ!!」

フィーナはゾンビガードを発動してから槍で攻撃、レイアはロケラをぶっ放しエーミールはタナトスハントで攻撃している。

え、お前は何してるのかって？ いろいろとこの屋敷を調べてみた。

……限りなくやべえぞこの屋敷は。

「一通り終わったけど……どうしたの、お兄ちゃん」

「いや、ちょっと引っかかることがあってな」

俺たちは先を進んだ。

……思ったとおりだ。

廊下を進んでいくと、絵が壁一面にかけられていた。しかもその絵の目はこちらを見続けている。

さらに天井のシャンデリラは次から次へと落ちてくる仕組み。

そしてシャンデリラ同士の間は歯車型のギロチンが転がってくる。

「きゃっ!」

「うわっ!」

俺とレイアは難なく避けているが、あとの二人はそうは行かない。

……しょうがねえ。

「THE WORLD! 時よ止まれ!」

俺は時を止め、二人を一番奥まで運んだ。

「……な、なんだったのですか、あれは」

「死ぬかと思った」

「ああ。　だが、まだ安心できねえぞ」

「え……」

進んだ先は大広間だ。　そこでは、無数の骸骨や幽霊であふれていた。

「ア、アアアアッ！　イツマデココニレバツ！！」

「オ、オオオオオッ！　ムコウヘイキタイツ！！」

そうか。　ここにいる幽霊たちは成仏ができない人たちなのか。

「おい、お前ら。　軽いノリでここまで来たが……どうやらんでもない事件が起こっているみたいだな」

「ええ……」

「この人たちも、助けなきゃ……」

俺たちは先を進もうとした。

しかし足を一步踏み出した途端、突然肩をつかまれた。

これはフィーナでもレイアでもエーミールでもない。　もっと他

の……何かだ。

俺はゆっくりと後ろを見た。

そこにいたのは……。

~~~~~リベロside~~~~~

おいおいおい、なんじゃこりゃ！

なんか見たことの無い魔物がうじゃうじゃいるんですけど!?

「相手が何者だろうと、関係ない。全滅させる!！」

いや、ミーナよ。確かにそれは正しいが、こいつらどう見たっ

てやばいぞ!!

~~~~~ノエルside~~~~~

俺の肩を掴んでいたのは、鎧だった。

さまようよろいとかそういう類のものではない。これは明らか
に何者かが飾ってあった鎧に憑依したものだ!!

『マスター! あちらにも!!』

……悪いが今そつちを見たら確実にこいつにやられる。

「せいけんづきー!!」

俺は鎧を一気にぶつ飛ばした。

そしてレイアが指差していた方を見ると……なにっ!?

幽霊たちは隅にかたまって震えている。

そう、なんとそこに置いてあった物が勝手に動き出していたのだ。

オルガンは不気味な音を立て、剣は空を舞い、シャンデリラは炎の勢いを強めて回転し、カーペットは踊っている。その他にももるもると……。

「な、なんなんですかここは!?!」

「知らん!!　だがカンダタの野郎、厄介なところに忍び込んでくれたな!!」

「そんなことより早くアレをなんとかしないと!!」

めんどくせえ!!

「イオスランド!!」

「バギガロン!!」

「デスストライク!!」

『FULL CHARGE . . . ETERNAL FALL』

即死技連発で全滅させるつもりだった。

しかし、まったく効いてない！！

それどころかさっきよりも強くなっているような気が……！

「お前らとにかく散れ！！」

「！！！！」

俺たちとはとにかく散れるだけ散った。

そしてその直後、俺たちがいた場所へいつせいに攻撃が放たれた。

あぶなかったあ……。

『先ほどの攻撃、まともに受ければ即死です』

「だろうな。　どうやって戦えってんだ？」

「さっきの変化の仕方を見ると、どうやら呪文や特殊攻撃では無意味みたいですね」

「じゃあ、通常攻撃！？」

「無茶言うな。　確かに通常攻撃は無駄なく攻撃できるが、基本的に攻撃力が無いフィーナとエーミールはほとんど無意味だ」

「じゃ、じゃあ、どうするんだよ？」

「……見たところ、あれは、魔物じゃない。何者かが憑依したか操っているんだろう。だったらそいつをぶっ潰せばすべて結果オーライだ」

「手っ取り早っ!!」

『確かにその方が速いですね』

俺たちはステルスを使って家具どもに見つからないようにして奥へと進んでいった。

チユドーーーーッ!!

背後で爆発音がした。

……って、家具ども追いかけてきてるし!!

ステルス意味無え!!

第四十話 凶器豪邸（後書き）

ノ「本つつつつ当になんでこんなところに忍び込んだんだよカンダ
タ……！」

フィ「かなり死にそうでした」

藤「さて、カンダタを無事救出できるのだろうか……？」

ノ「その前に……まじで死にそう」

フィ「カンダタさんは……生きてるのでしょうか？」

ノ「そっちのほうに気になる」

藤「……では！」

第四十一話 憑依

ステルスを使つたにも関わらず、謎の家具どもに襲われ、追いかけてらるている俺たちは、通路をただひたすら走っている。

そしてふと、視界の端に赤いスイッチが入った。

.....

「レイア、あのスイッチを押せ!!」

『Yes、マスター』

「ちょっとまって罨かも!?!」

「一か八かだ!!」

レイアはスイッチを押した。

すると、突然背後でシャッターが落ち、敵の行く手をふさいだ。

.....ぎりぎり。

俺たちは気を取り直して通路を進もうとした。

しかし.....通路がふさがれてしまっていた。

「どうやら先のスイッチが.....」

「一も出たし八も出たか……」

「もう一度押すの?」

「いや、そしたらやつらも来るだろう。それだけは避けたい」

『ではどうします? わたしの力でもこのシャッターは壊せませんよ?』

……鉄の扉をも斬れるもの……あれだ!

「作成メイク・斬鉄剣!!」

初っ端で使って失敗して以来使ったことが無いが、今が力の見せ所ってやつだろ!?

「うおらあ!!」

俺は斬鉄剣でシャッターを真っ二つに斬った。

よしっ、斬れた。

「あ、あの……ノエル?」

「え?」

「あれ……」

フィーナが指差した先には、無数の魔物が待ち構えていた。……さっきの家具軍団っぽいのもいやがるし!!

「どつすりゃいいんだ!」

「振り切るしかないんじゃないの!」

『通常攻撃のみで戦つ……ですね』

「……それで行くのですか?」

「……お前ら」

「「え?」

「遅れるなよ!」

俺はやつらのところにダッシュした。

倒せる敵は倒し、家具は攻撃しない。
安全だ。

この戦い方で行けばより

「ちょ、ちよつとノエル!」

「お兄ちゃん!」

「いいからついて来い!」

俺は敵を切り倒し道を作っていた。

「お前ら、大丈夫か？」

しばらく進み、連中が見えなくなったところで聞いた。

「む、無理。 どうしてノエルは無事なの……？」

「ほ、本当に無茶ばかりする……」

「前に姉ちゃんが言ってたんだ。 『思い立ったらまず動け』ってね」

「お、お姉さんがいたのですか？」

「ああ。 俺より2歳上だけだな」

……そういや、姉ちゃんはどうしてるんだろ。 いまさらながら気になる。

と、そんなこと考えてる間になんだか怪しい部屋に着いたぜ。

その部屋にはいくつもの石像があった。

そのうちのひとつにムキムキマッチョが……。

「カンダタ!!」

「え、これがですか？」

「なんでこんな姿に？」

『マスター、これは一種の呪いです。おそろくこの部屋に何かあるのではないのかと』

呪いかよ……厄介だな。

「う、うわああああ!!」

突如、エーミールが悲鳴を上げた。

エーミールを見ると、なんかよく分からん黒くてモヤモヤしたものが彼に絡まっている状態だった。

するとそれは一気にエーミールの体内へ入り込み、目が闇色に染まった。

「……あの、エーミール？」

「お…兄…ちゃん……」

エーミールは短剣を構えると、俺に攻撃してきた。

俺は間一髪のところまで避けた。

「いきなり何するんだよ!!」

「まって、様子がおかしいです!」

「助け……クロス!」

はい!?

「コロスコロスコロス!! 憎キ人間ドモハ全テコロス!!」

『憑依されてますね』

「そ、そんな……」

恐らく倒せば元に戻るだろう。でも場合によってはエーミールが死ぬ恐れもある。

どうすりゃ……いいんだ。

第四十一話 憑依（後書き）

ノ「エーミール……ったく、どうすれば……！」

藤「カンダタはノーコメですか」

ノ「ったりめえだ……！」

第四十二話 怨霊(前書き)

ちよいグダです。

第四十二話 怨霊

えと……現状を説明しよう。

エーミールが何者かに憑依された。

「人間……憎イ！ 全テ、消シ去ル！！」

怨霊ですね、分かります。 エーミールは手に持った短剣で切りかかってきた。

俺はそれを避けた。 が

「ぐはっ！」

体に衝撃を受けた。 衝撃波か！？

でもエーミールには衝撃波を使うような能力は無いはず……！

『エーミールにとりついているものの能力でしょう。 闇の力で
す』

「闇……」

闇に対抗するには光だな。 光の呪文は……。

「ライデインツー！！」

何処からともなく稲妻があたりを包み、エーミールを直撃した。

弱めに放ったから……多分、大丈夫だろう。

「貴様……今……何ヲシタ？」

「へ？」

「今ノハ、攻撃力^か？」

「……効いてないみたいです」

「……マジ？」

「ソノヨウナモノ……痛クモ痒クモナイ!!」

エーミールは一瞬で消えた。そして俺のすぐ目の前に現われると、首元で短剣を振った。

「危ねっ!!」

俺は間一髪で避けた。だが、速い!!

エーミールはまた先ほどと同じように消え、今度は俺の背後に周った。

させるかよっ!!

俺は肘鉄でエーミールの腹を殴った。

「……悪アガキヲ! 我ヲソノママ倒セバコノ身モ滅ブトイウノ

「ダゾ！」

「何っ！？」

「予想通りってか！」

「そんな……！」

『マスター、どうしますか？』

「……フィーナ、シャナクは使えるか？」

「シャナク……ですか？」

「呪いならそれで解ける。だがこれは憑依だから効くかどうか分からん。でも、もし使えるのなら……」

「分かりました。やってみます」

「すまん。俺がやつのを引き付けるから」

「俺は斬鉄剣を消し、無防備の状態になった。」

「……ノエル……」

『マスター……！』

「さあ、攻撃しろ……」

「俺はエーミールを殺したくない。」

「もしも武器をもって、憑依し

ているやつがわざと刺さったりしたら、終わりだ。

「何ヲ考エテイル、貴様」

「さあな、俺にもわからねえよ」

俺は喉元に迫ってくるやつの短剣を右腕ではじいた。右腕から血が出た。

「ノエル!!」

「フィーナ、準備しろ!!」

俺が怒鳴ると、フィーナは言うとおりにシャナクを唱える準備にかかった。

シャナクはどうやら唱えるのに時間がかかるらしい。

次に、エーミールは俺の鎧では覆い切れない場所を集中的に狙った。

血がどんどん出る。目眩も感じる。

……まだか、まだなのか!?

「ごめんなさい、もうちょっと待って!!」

『マスター、援護します』

「レイア、手え出すな!!」

『…………分りました』

メイク
作成・黄金の鎖

俺はスマブラでタブーが使う鎖を取り出し、エーミールを拘束した。
最初からこうやってりゃ良かった。

「さて、おとなしくしてな」

「…………コノヨウナ鎖デ、我ヲ封印デキルトデモ思ツテイルノカ？」

エーミールは一気に闇のオーラを放った。

「…………へ？」

バリイイイイン！

闇のオーラを受けた鎖は木端微塵に粉碎され、跡形も無くなった。

ありかよそれ！！

「いつでも発動可能です！！」

「おっしゃ！　じゃあ何とかして動きを封じるからその隙に！！」

俺はまたやつに向き直った。

「さあ、殺せ。　思っ存分！！」

俺はそう言った、笑顔で。

「死ニ急グカ。 ナラバソノ望ミ通りニ殺シテヤロウ」

エーミールの持つ短剣に闇の力が集中する。

……今だ！

「チート能力、スライドターン！」

俺は一気にやつの背後へ回り、抑えた。

「貴様……ドウイウツモリダ！」

「どうもなにも、仲間を取り戻す！ フィーナ！」

「シャナク！！」

フィーナがシャナクを唱えると、フィーナの槍から暖かい光が出てきて、それがエーミールの中に入った。

「オ……オオオオオオ」

頼む、効いてくれ！！

「オオオオオオオオオオ！！！！」

「ふっ、無駄な足掻きを」

どこからか声が聞こえた。

「だ、誰だ!？」

そいつは部屋のさらに奥の通路から現われた。

闇色のローブで身をまとい、髪は黒。そして目は朱色ときた。

「セブレム」

男が言うと、エーミールの身体からシャナクが出てきた。

そしてさらに怨霊と思しき気が次から次へとエーミールの身体へと送り込まれた。

「う、ウガアアアアアア!!!」

「そ、そんな!」

「……………てめえ、干渉者か!？」

俺は男に聞いた。

「……………そうだ。俺はお前らの言う干渉者の一人、レアラードだ」

レアラードはそう言うと、人差し指と中指を重ねた。

「結!」

「なっ!？」

「えっ!?!」

『くっ!』

俺たちは結界に閉じ込められてしまった。

第四十二話 怨霊（後書き）

藤「新たな敵、登場！」

ノ「おい、早速と結界に閉じ込められちゃったが……」

藤「ガンバ！」

ノ「うおい!!」

第四十三話 干渉(前書き)

今回は前回よりもかなりgoodgoodです。

第四十三話 干渉

「そのまま大人しくしている」

俺たちはレアラードによって結界の中に閉じ込められた。

……ま、なるようになるだろう。

「……どうして、こんなことをするのですか？」

フィーナが聞いた。

「お前らに知る権利はない。 知ったところで、計画が終わり次第死ぬ運命なのだからな」

「俺たちが死ぬ？ なに寝言言ってるんだよお前」

「……そんな状況でよくそんなことを言えるな」

「お前こそわかってねえな。 死ぬのはお前だぜ？」

「今、お前の仲間はこちらの手にある。 戦いを選べば、こいつと戦うことになるぞ」

「人質ってか？ しかしなぜエーミールを選んだ」

「簡単なことよ。 お前らの中で一番心の乱れが強いものを選んだ。 乱れが強ければ強いほどより強力な能力を引き出すからな」

……許さねえ、兵器扱いかよ。

「まあ、なんにせよ、お前らには手も足も出まい。お前らはそのままこの世界の終わりを見届けるがいい」

「させるかよっ！！」

俺は地面に手をついた。

すると、レアロードの周囲を地面からの爆撃が包んだ。遠隔錬金だ！

「無駄な抵抗をするのだな、お前は。滅」

「ガハッ！」

俺の結界が粉碎された。

妖じゃないから肉体までは滅ばないが、それでも相当なダメージだ。血を吐いちゃったぜ。

「だが、お前も甘いな。滅して結界を自ら粉碎しやがって、俺を自由にしたも当然だぜ」

俺ははやぶさの剣・改を取り出し、構えた。

「お前こそ、バカなのか？俺と戦うのは不可能だ」

レアロードが言うと、エーミールがやつの前に仁王立ちした。

「お前と戦うのは、こいつだ」

「!?!」

やはりそう来るか……!!

「解!!　お前ら、サポート頼む!!」

「はい!!」

『Yes、マスター』

俺は二人を解放した。

厄介だが、なんとかするしかねえ!!

「おりゃ!!」

俺はレアラードに斬りかかるつもりだったが、やはりエーミールによって防がれる。

そしてエーミールからのカウンターを喰らう。

さっきからこれの繰り返しだ。

「べ、べ、ほまー!!」

『Fire Blast』

フィーナの補助を受け、レイアが援護射撃する。

しかしこのままじゃちがあかねえ!!

「その程度か」

「ウガアアアアアア!!」

レアードの手からは紅蓮の炎、エーミールの短剣からは巨大な闇の力が解き放たれた。

「うおわあああああ!!」

「きゃあああああ!!」

『グアツ!!』

全員もろに喰らった。それと同時に、激しい煙が巻き起こった。

「神谷聖夜^{ノエル}、神に選ばれた者にしては、弱いな」

「グ、アアアア!!」

「……言ってるよ!!」

煙が晴れた。俺たちは思っていたよりダメージを喰らっていなかった。

「お前ら、無事か？」

「まったく、なに厄介なことになってるのよ」

「旦那あ！ 助太刀に來ましたぜ！！」

「ピキーツ！」

あいつらが俺たちを守ってくれた。 よくここまで來れたもんだ。

「そついえば、ここに來るまでの間、家具とかが乱雑になっていたが……お前らか？」

「え、動いてなかったのか？」

「ああ」

ということとは、エーミールに入り込んでいったやつらは家具に乗っ取っていた連中だということだな。

まあ、なんにしてもこれで勝機が見えた。

「現状説明はしない。 しなくてもいいだろ？」

「ああ」

「あの男を倒せば、エーミールは救えるのね？」

「そついうつた。 ……行くぞ」

俺ははやぶさの剣・改を構えなおした。

「フィーナ、サポート頼んだ!」

「はい!」

俺はエーミールに斬りかかった。

すると予測通り、エーミールは短剣でつばぜり合いを仕掛けてきた。

今のうちに……!

「アルケミーガ、スライムブレード!」

「ピキッ!」

「旋風斬!」

リベロはスランボーを剣にし、ミーナは旋風斬でそれぞれレアライドを攻撃した。

しかし、それはかなわなかった。

エーミールの力はつばぜり合い中でもレアライドを守るために発動されるらしい。つまり、エーミールの魔力があいつらにぶつけられたということだ。

「ウガアアア!」

「うわっ!」

余所見してる間に剣を吹っ飛ばされ、俺の腹は次から次へと刺された。

「ぐっ……!!」

「べ、ベホマズン キャア!!」

フィーナはベホマズンを唱える前に地面から突如生えてきた闇色のツタにより拘束された。

まずいな、あれじゃ呪文を唱えられない。

『G i g a n t C y b e r E n d i n g g』

レイアはパワーをかなり溜めた。 ……て、あれやばくね？

『 …… B e g a n o f E N D 』

すると、レイアの周りに巨大なレーザーの柱が次から次へと降り注いだ。 ……どこのホーリー？

ねえ、死んじやいますよ、俺たちが。

「 ……危ねっ!!」

俺はレーザーを避け、フィーナに絡まっているツタを切り刻んだ。

「大丈夫か!？」

「ノエル……。はい、だいじょうぶです」

言い終わらないうちにフィーナがさっきまでいた場所にレーザーが落ちた。

……。本当にギリギリだったな。

しかし屋敷は崩壊寸前。

「お前ら、まずはここから脱出すつぞ。レイア、お前もいい加減やめろ」

『……Blust Dimension』

「もしもし?」

「……暴走してやがる!」

「えっ!?!」

「なんで、そんなことに……」

「そんなことより、さっさと止めないと!」

俺はレイアを止めに行った。

「……すっかり忘れられたな」

「ウグググッ！」

レアードはエーミールを見た。

「賢者の石の原石……まさかこんな形で見つけるとはな」

闇色の時空を作り出すと、レアードとエーミールはその中に消えていった。

「レイア、いい加減にしろっつってるだろ!!！」

『……Fords Dekadofgg』

もはや何語？つて感じた。

俺の体は徐々に消えていく……つて消滅技!？

「レイア、マスターの命令だ!!　やめろ!!！」

『……………』

「ポチツとな」

レイアの動きが止まった。　どうやらリベロが緊急停止ボタンを押したらしい。

「これでなんとかなるだろう。　あとで暴走の原因を調べてみる」

俺たちはこのあと、幻想の槍の力でカンダタを元に戻し、近くの町で休憩を取った。

……エーミール。 どうすればいい。

「何か困ったことがあったり悩むことがあれば、いつでも相談していいのよ?」

「いくらでも相談に乗ってあげるよ。 だって聖夜はあたしの大切な弟だもん」

ふと頭に、姉ちゃん言葉が浮かんだ。 そして思った。

一度、元の世界に戻ってみよう。

こんなときどうすればいいか、あの人に相談に乗ってもらおう。

そして俺は眠りについた。

第四十三話 干渉（後書き）

藤「次回予告！」

ノ「お前の予告はネタばれなのだが……」

藤「うっさい！ 次回、ノエルが元の世界にいったん帰ります。

そして姉ちゃん初登場！！」

ノ「……それだけだよな？」

藤「さらに厄介ごとの予感」

ノ「……は？」

藤「いやあ、ぶっっちゃけるとさ、ノエルの元の世界もやはりひとつの世界なんだから他の世界と繋がってもおかしくないじゃん？」

ノ「……それ以上言ったら消す」

藤「サーセン。 それではまた次回！」

第四十四話 ただいま、さよならした世界（前書き）

夢の中で、俺はあの空間にいた。

「……じいさん」

「なんじゃ？」

じいさんは俺の目の前に姿を現した。

「あのさ、一時的にもこの世界に戻るこつて、できる？」

「……理由は」

「姉ちゃんと、話がしたい」

「……そうか。よかろう」

いいのかよ!!

「ただし、一日たてばドラクエに強制移動じゃからな！」

「わかった」

「それから、そなたの姉はそなたが一度死んだことも、別の世界にいることも、すべて知っておる」

え……なんで!?

「わしが教えた」

「お前かよ!!」

じいさんが杖を振りかざすと、俺の体は光に包まれた。

「今いる世界に戻るときはそなたは眠りから覚めたときと同じになる」

「分かった!!」

俺は、世界を移動した。

第四十四話 　　ただいま、さよならした世界

俺が目を開けると、そこは近所の空き地だった。　　目の前に人がいる。

黒と茶の間ぐらいの長髪、目は大きく茶色。　　ちょっと幼げが残る顔だがプロポーションはかなりのもの。　　俺の知っている中でこんな女性は一人しかいない。

「…………姉ちゃん？」

俺がそう聞くと、女性はにこやかに微笑んだ。

「おかえり、聖夜」

「！」

やっぱり姉ちゃんだ、そう思うと自然と涙が溢れ出た。

「…………な、なんで泣いてんだよ俺」

「ノエル！」

姉ちゃんは俺を強く抱きしめた。　　胸のあたりに強い弾力が感じられるほど。

「もう、心配したんだから！！　　もしも聖夜が向こうの世界で死んじゃって、もう、もう、会えなくなるんじゃないかって！！」

「ごめん、心配かけて……姉ちゃん！」

俺たちはお互いに泣きながら、しばらくの間抱き合った。

姉ちゃんの名前は神谷愛音^{かみやアノン}。年齢は16。俺と同じ趣味の持ち主で、そして、俺が唯一信頼できる肉親ともいえる。

しばらくした後、俺たちは家に戻った。

家は相変わらずだった。一見は普通の家。しかし、よくみると本棚にはとんでもない量のマンガがあり、ビデオテープがあり（時代はDVD？うるせえ）、さらには大量のゲーム機。

俺たちの両親は、数年前に離婚した。

俺たちは父親とこの家で暮らしたが、その2年後に交通事故で死んだ。

そのときすではあちゃんやじいちゃんもいなくて、父親には兄弟もいない。母親との連絡もつかないで、そのときちょうど高一になった姉ちゃんと二人暮らしになった。

「懐かしいな、やっぱ」

「そうね。聖夜がない間、ずっと寂しかったんだよ？寝るときはいつも一人で、ご飯を食べるときも一人。テレビを見

るのもゲームをするのも一人で昔よく夜中に聖夜の部屋から聞こえてきた可愛い声も聞けない……」

それどういう意味だよ!! 読者が勘違いするだろうが、おい!!

「だって事実じゃない。一人だと寂しいだろうからよく一緒に寝てあげてたじゃない」

「それはあんたが勝手に俺の布団にもぐりこんできたんだろ!!」

「もう逃がさない これから毎日毎日愛でてあげるんだから!!」

と、姉ちゃんは俺の頭を右手で激しくなでながら抱いた。

そう、確かに姉ちゃんは優しい。しかし、困ったことに極度のブラコンなのでした。

ちなみになんども告られているが、弟がいるからと言って断り続けているらしい。

……どうでしょうか、こんな人。

「そ、そんなことより……」

俺は姉ちゃんを引っぺがした。

「俺がこの世界にとどまれる時間は限られてるんだ。一日のみ。その間に、聞きたいことがあって来た」

「聞いてるわよ、あのじいさんから」

やはり姉ちゃんも神のじいさんと接点があったらしい。　　いったいどんな経緯なのやら。

「ま、話をするならやっぱりあそこね」

「そうだな。　　じゃ、ここは姉ちゃんのおごりで」

「いいよ、愛する弟のためなら一億だって払ってあげる」

一億も払ったら生活できねえだろ!!

俺たちは家を出た。　　すると、目の前にはなんか平成ライダーっぽいバイクが……。

「こ、このバイク何？」

「え？　　ああ、乗る？」

「あ、ああ。　　てか免許あるの？」

「あるから安心して」

俺は後部座席に座り、姉ちゃんの運転による二人乗りで例の店へ行った。

~~~~~例の店~~~~~

カランカラン

「へいらっしやい！　お、愛音ちゃん、いつものかい？」

扉を開けると、ここも相変わらずだった。

「ええ、あたしはいつもの。それから、今日は久々に弟が来てるの」

「弟……」

おじさんは俺を見た。そしてすぐに叫んだ。

「聖夜じゃねえか！　いやあ、久しぶりだなー！」

「はい。おじさんも相変わらずお元気なようで何よりです」

「いやあ。おつと、ほら座って座って。　すぐにいつもの用意するから待っててくれ。　おゝい、源一、ゲンイチ手伝ってくれー！」

おじさんは奥の部屋に向かって叫んだ。

「断る。俺は今チェスの研究で忙しいんだー！」

「まだそんなこと言いおつて……聖夜も来ておるぞー！」

「……聖夜！？」

奥の部屋から朱色の髪の子が出てきた。

「聖夜、聖夜じゃねえか！！　久しぶりだな、おい！！」

「あはは、お前も相変わらずっぽいな」

この男は須藤源一。俺の幼馴染だ。　ちなみに説明を忘れていたがこの店はラーメン屋。

「おっし、ちょっと待ってる。　　いまずぐ格別なうまさのラーメンを作ってやつからな！」

源一とおじさんはすぐに麺のこしらえに入った。

「さてと、話って？」

「ああ、そうだった。　　懐かしすぎて忘れるところだったよ」

俺は水を飲んだ。

「……なあ、俺がドラクエの世界にいるってことは知ってるよな」

「……ええ」

「実は、あつちで仲間になったやつが怨霊っぽいのに憑依されて操られちゃったんだ。　　そして敵の操り人形となっちまった！　　シヤナクも通用しない！」

「……………」

「なあ、姉ちゃんなら何か分かるんじゃないのか？　　「こつこつと

きどつすればいいのか。俺は、俺は、俺のせいで誰一人不幸に  
させたくないんだ!!!」

俺は声を張り上げた。須藤親子は厨房のほうにいたので聞こえ  
てないらしい。客もいなかった。

「……あなたも相変わらず見たいね。5年前のあのときから少  
しも変わらない」

5年前のあの時とは、親が離婚したときのことだ。

「いいよ、教えてあげる」

「ありがとう」

「いいのいいの。……まず、憑依された人間h「キヤアアアア  
アア!!!」悲鳴!？」

店の外から悲鳴が聞こえた! それは厨房にも聞こえたらしい。

源一も駆けつけた。

「今の悲鳴、なんだ!？」

「わからないけど行ってみよう!」

「え、ちょ何!？」

いまいち現状がつかめない俺。何がなにやら。

「聖夜も来て!!! あなたの助けもきつと必要だろうから!!!」

「はiiiiiiiiiiii!?!?」

俺たちは店を飛び出した。

~~~~~店の外~~~~~

……え、ちょ、待って、何!?

店の外には血まみれで倒れている数名の人たちとそのそばに緑色の異性物が何体かいた。あれって確か……。

「ワームだわ!」

「ちっ、厄介なのが来たな!」

「いや、だから、何!?!」

「聖夜は少し下がって。ここはあたしたちでなんとかするか
ら、いざと言うときはよろしく!」

「???」

「行くよ、源!」

「おじ!」

すると、姉ちゃんはポケットから紫色のデジタル時計らしきものを

『ポーンキー』

「変身!?!」

そう叫び、白が上を向くようにカギを回した。

『ホワイト アンロック』

そういう電子音が鳴ると、バックルからさまざまな白いパーツが飛び出て、源一を包んだ。

その姿はまさに、ポーンを人型にしたような感じだ。

.....

.....姉ちゃんたちが、仮面ライダー!?!?

ていつかどうして仮面ライダーがこの世界に!?!?

第四十四話 　　ただいま、さよならした世界（後書き）

ノ「ちよい待て、なんで姉ちゃんと源一がライダーなんだよ!!
それも俺の知らないやつ!!」

藤「いやあ、オリジナルです」

ノ「そういう問題じゃねえ!!」

藤「というか最初はこの設定無かったんですけど、仮面ライダー
もの書いてみたわいいがうまく書けそうに無かったので一度削除。

その後試行錯誤して考えた結果が「異世界冒険期」の番外編扱
いです!!」

ノ「つまりこれは……」

藤「ライダーものを始めるための伏線でございます!!　　もちろ
んこの小説のストーリー的な意味もあります!!」

ノ「むちゃくちゃしゃがるぜ」

藤「ライダーものを書くのはもうちょっと先になります。　　はい」

ノ「……ん、ちょっとまてもしかしてその番外編で……」

藤「愛音の詳しい情報が出てきます。　　というか彼女が主人公で
す」

ノ「やっぱりな」

第四十五話 仮面ライダー（前書き）

今回はあまり本編とは（あまり）関わりがないので飛ばしちゃっても結構です。

第四十五話 仮面ライダー

「変身!!」

『カメンライド デイ・オーバー!』

『ホワイト アンロック!』

俺の目の前で、姉ちゃんは紫のデイケイド系のライダーに、源一はポーンのようなライダーに変身した。

……一体、なにがなにやらわけがわからないよ!

「行くよ、源一!」

「おっし!!」

「あ、あの、俺は?」

「いざと言うときのために待機お願い」

ラジャー……。

俺は観戦することにした。

「相手はワームだから……これ!!」

『カメンライド カブト!』

姉ちゃんの姿がカブト・マスクドフォームに変わった。

やはり

ディケイド系か。

でも、ディケイドとは違い、ベルトもそのライダーの物に変わるらしい。現にカブトゼクターがついている。

「早速とポイ捨てるけどごめんね　キャストオフ！」

『キャストオフ』

いきなり!?

姉ちゃんはキャストオフを使い、マスクドフォームの装甲をすべて吹っ飛ばした。

『チェンジ・ビートル』

ライダーフォーム……。　ていうかマスクドフォーム思いつきり邪魔扱いじゃねえか。

「じゃ、さようなら」

『クロックアップ』

次の瞬間、姉ちゃんのそばにいたフォーム数対が爆破した。

本当に速いな……。

「……」

次は源一だ。

こいつのバトルスタイルは想像がつかないからな。　　いつたいど
うやるのか。

と、言ってる間に攻撃を喰らった。

「ぐっ……！　　やっぱホワイトはむかねえか！」

源一は右手でバツクルについたポーンのカギを、今度は黒が上を向
くように回した。

『ホワイト　ロック！　　ブラック　アンロック！！』

源一についた白いパーツがすべて一瞬だけはずれ、黒色に反転する
とまたついた。

「さあて、どんどん行きますか」

源一はワームを次から次へと殴っていった。

さらにワームの攻撃には先のように喰らわない。　　その前に攻撃
している。

黒が攻撃型で白が防御型？

「おらおらおらおら……！」

今度は蹴りの雨だ。　　ほんと、さっきよりも攻撃力が上がってる

気がする。

ワームどもを全部吹っ飛ばしたところで、源一はカギをそのまま抜いた。

「じゃ、これで終わりだ」

『ポーンキー』

バックルの上部分にも鍵穴があるらしく、源一はそこにポーンを差し込み、右に回した。

『チェックタイム……ポーンモード!』

源一はワームどもの目の前に立つと、右足で地面を思い切り踏んだ。

「うおっ!」

こっちにまで響いてきた。

その衝撃でワームどもは打ち上げられ、源一もそれに続いてジャンプする。

「チェックメイトだ!」

源一は三角跳びをするかのようにワームを次々に蹴り、着地した。

それと同時に、源一が蹴ったワームがすべて爆破した。

「これで全部?」

「ああ。　　そうみたいだな」

「あの……説明をお願いできませんか？」

はつきり言つて訳がわからんやつてきた。　　どうして仮面ライダー
―とその怪人がこの世界にいるんだよ！

「そうね……。　　じゃ、ラーメン食べながらにしましょうー！」

「あ、いけね。　　俺先に戻つてるー！」

源一は急いで店に戻つた。

~~~~~店の中~~~~~

俺たちの座っている席に、ラーメンが二人分きた。

麵太めチャーシュー大盛りメンマ少なめとどっかで聞いたような感じだが、やはり最高だ。

「で、まあ、この世界の話だけど」

姉ちゃんが話を始めた。

「実はこの世界、仮面ライダーの世界と繋がっちゃったらしいの」

「らしいのじゃなくて確実にそうだよ」



俺は突っ込んだ。

「あなたが死んだあとにあたしも死んだ。　で、そのときに聞かされたわ。　あなたが死んでドラクエの世界に行ったこと、この世界が仮面ライダーの世界と繋がったこと、そしてあたしは『仮面ライダーディオーバー』として蘇ることができるということ。」

「……つまり、姉ちゃんも俺と同じ道を選んだってこと？」

「そういうことになるけど、ちょっと違うわね。　あなたは色々な世界を旅しなければならぬけど、あたしはこの世界だけ」

ちなみに俺はまだドラクエしか行ってないぜ。

……ん、ちょっと待て。

「じゃあ、源一は？　源一もじいさん選ばれたのか？」

「いいえ、源一は偶然バツクルとカギを手に入れたらしいわ」

「てか、実際にそうだよ」

カウンターのほうで源一が言った。

「ちょっとその森までラーメン用のきのこを採りにいったら、偶然魔化魍まかもつとかいうのに出くわしちゃってな。　あんときはおどろいたぜ。　ま、なんにせよお」「はいはい、その話はあとで」「…」

「ところで、ディオーバーの能力ってディケイドと似てる感じがするけど……どこが違う?」

「ええ、大いに違うわ。まず、ディケイドはベルト部分はそのままであたしはベルト部分もそのライダーのものに変わって、フォームチェンジにカードがいらわないの。まあ、ディオーバー自体のフォームチェンジには必要なだけだね」

「え、フォームあるの?」

「あるの。まあ、その説明はあとでね。あと、本家ライダーたちは、性能はテレビのと同じだけど変身者は違うの」

なるほどな……。

俺たちはラーメンを食べ終え、姉ちゃんが金を払い終えた後、店を出た。

「まいどあり〜」

……あ、なんか忘れてる。

「姉ちゃん、あやふやになっちゃってたけど、憑依された人間のこ  
と、ちゃんと教えてくれ」

「わかったわかった。でも夕飯の準備があるからなあ……  
夕飯終わってから!」

「頼むよ?」

俺たちは家に向かってバイクで走った。

第四十五話 仮面ライダー（後書き）

藤「次回、ノエルがこの世界をあとにする！」

ノ「本当は二話で終わらせるらしかつたぜ？

なんで延びたんだ

か」

藤「いやあ、意外と文字数あるんだなと」

ノ「本当に無計画だな」

## 第四十六話　ブラコン

店から引き揚げ、俺たちは家に戻った。

そして戻ってからすぐに姉ちゃんがイスに座るよう言ったので、俺はイスに座り、姉ちゃんも机をはさんで俺の前に座った。

「ノエル、やっぱり今言う。　夕飯のあとって言ったけど、やっぱりご飯の前に言ったほうがね」

「……そうか。　で、俺はどうすればいい？」

姉ちゃんは一拍空けてから口を開いた。

「……もともと憑依っていうのは対象とされる人間が、憑依される際にその怨霊とかを受け入れたときに初めて成功するの」

つまり、エーミールは拒まなかった。　逆に受け入れた……。

「その怨霊を追い出すには、取り付かれた側の大きな動揺、拒絶、外部からの精神回復などで戻るのが。　大切な人との思い出とかもあるわ」

「でも、あいつは……まだ小さいのに、両親ともに亡くして、自分を支えてくれた側近が死ぬのを目の前で見た。　大切な人の思い出なんて、あいつには……」

「じゃあ、『約束』ね」

「約束？」

「約束もある種の思い出よ。ま、あたしはノエルたちの旅のこととは何も知らないに等しいから何もいえないけど」

約束……。それを証明するような物があれば、さらにいいかも。

「でも、シャナク使ってもダメとはね……」

「いや、成功はするはずだったんだ。だが、あともう少しのところであの男が……」

今思えば、なんなんだよ干渉者って……一体何が目的で……

フィーナを、エーミールを、リュカを、世界を……苦しませるんだ……

どうして人の幸せをそう易々と奪えるんだ……

「干渉者、あたしもあつたわよ」

「えっ!？」

「鳴滝よ」

「鳴滝って、あのデイケイドの!？」

「そう。あいつもある意味干渉者ね。あたしのことを悪魔

呼ばわりして他のライダーたちに始末するように仕向けやがって……

…あの野郎……!」

あ、やばい。 姉ちゃんの怒りのスイッチが入った。

姉ちゃんは一度スイッチが入るとなかなかとまってくれない。

「でも、今のところは無事じゃん」

「うん、人に恵まれた。 ほぼすべてのライダーがあたしを倒そうとしたけど、結局は和解できたし」

「今のところ会ったのは？」

「今のところは、クウガ、ファイズ、ブレイド、カブト、キバ、W  
ね。 やっぱ変身者が違うのもいいよね」

「ははは」

良かった。 あまり辛くないようだ。

「ところでさ、ノエルの旅について、もっと教えて」

「ああ、いいよ。 もともとそのつもりだったし」

俺は今までの旅のことを話した。

「……いろいろあったのね」

「ああ、本当に色々ありすぎた」

「多分この旅は、辛いこともあるけどいい旅になり、いい経験になると思う」

「はは、姉ちゃんが言つと説得力があるよ」

「そうでしょ？　アハハ」

「ハハハハハッ」

俺たちはしばしの間、笑いあつた。

「……でも、今の話で気づいたことがあるわ」

口を開いた姉ちゃんの顔は、なんか、怖い！

「な、なに？」

「あんだ、一番最初に仲間になった子のこと、好きなんでしょ！？」

「はiiiiiiiiiiii!?!?」

急に言われてびくつた。　ていうか一番最初の仲間ってスランボ

ーでは??

「じゃなくて女の子の!!　確かフィーナって言ったっけ!？」

「フィーナかよ!!　　ていうかなんでそういつことになるんだよ

!?!?」



俺はあまりの恥ずかしさにより反発した。 自分でも顔が赤くなっているのがわかる。

「だってフィーナの話をしてるとき、すごく楽しそうだもん!!  
その子が辛かったであろう時の話はいつにもまして深刻に語るし  
!..!」

「う、うっせえ!!」

「さあ、正直に白状しなさい! あんたはあたしを捨ててその子に浮気をした!! イエス・オア・ノー!?!」

「いや、もともと姉ちゃんのことには恋愛対象にしてないから質問が間違ってる!!」

「ひどい!! あたしはノエル一筋だったのに!!」

そついやこの人、毎週のようにくる愛の告白を弟がいるからと断り続けてるんだっけ。

……前にも言ったか、これ。

「で、イエス・オア・ノー!?!」

「……わかった白状する。俺は、フィーナのことを……好きだ」

いままでがんばって表に出さないようにしてきたけど、やっぱり姉ちゃんには敵わねえか。

「……聞こえなかった。もう一度言って」

「俺はフィーナが好きだ」

「もう一度!!」

「俺はフィーナが、好きだああ!!」

「よし、OK。これからお仕置きね」

はい？

「確かに男に走るよりはましかけど、あたし以外の女の子を好きになるなんて許さないから!!」

そう言って姉ちゃんはダンスから女物の服を取り出した。

「これを、いまずぐに着なさい!!」

「いやだ!! てかそれってまどギのまかのコスプレでは!」

「い・い・か・ら、着なさい!!」

「いやだああああああ!!」

こうして俺は、夜までコスプレをして過ごした。

……フィーナには見せられん。 うん。

~~~~~そして翌日~~~~~

「もう、行くの?」

「ああ。世話になったな」

「ぜんぜん、そんなことはないよ。久々にノエルと一緒に寝られてうれしかったノノ」

そう、この女は夜中に俺のベッドにもぐりこんできたのだ。いい加減俺の貞操が心配だ。

目の前に光の柱が現われた。

「じゃ、役目を果たしたらまた戻ってくるから」

「うん、待ってる。そのときには、フィーナをちゃんと落とすて、あたしに紹介しなさい!」

「落とすってあんたねえ……」

俺はいままで恋愛というものの経験がない。告られたことはあるが、それはすべて、俺の女装を見た男どもからだ!!

あんときはまじで怖かった……。

俺は光の中に入り、姉ちゃんのほうを向いて手を振った。

すると、姉ちゃんも手を振り替えしてくれた。

そして俺は、この世界をあとにした。

この世界を頼んだぜ、姉ちゃん。

第四十六話　　ブラコン（後書き）

俺が目を開けると、そこには天井が見えた。

「あ、ノエル。　起きた？」

フィーナが俺に言った。

「ああ」

俺はベッドから起き上がり、フィーナを見た。

「え、どうかしましたか？」

「いや、なんでもない」

「？」

俺はベッドから降りて、旅立ちの準備を始めた。

エーミールが何処に連れて行かれたかはわからない。

だったら

まずは竜神王の剣と兜を探す。

「お、やっと起きたかノエル」

「もう大丈夫か？」

「おう。　再開しようぜ、俺たちの旅を！」

俺たちは町を出て、竜神王の兜があるといわれる祠へ向かった。

そこは、ここを北へ進み、海を越えた先にある。（クロウド情報）

……え、海なんてどうやって越えるんだって？

それはな……次のお楽しみだ。

第四十七話 船旅（前書き）

今回はほのぼのです。

ノ「久々だな、こういう話」

藤「ていうか今まであったっけ？」

第四十七話 船旅

俺たちは町を出たあと、北の海岸まで歩いた。

そこには、一隻の船があった。

……カンダタたちが用意したものだ。

あの凶器豪邸事件のあと、結局カンダタは助かり、その礼にと俺たち
ちに船をくれた。

ま、乗組員はカンダタどもだけだ。

「いやあ、本当にこの説はお世話になりました、ノエルの旦那あ」

「いいよ、旦那なんて呼ばなくても。それにこれからは俺らが
世話になる番だ」

「へい、そうですか？ ……北の祠、であってますよね？」

「ああ、あってる」

「へい。では、どうぞお乗り下さい」

ムキムキマッチョで目だし帽でパンツ一丁というのを除けば（いや、
それじゃカンダタじゃねえか）普通の船員だ。^{クルー}

~~~~~船内~~~~~

「まさか盗賊団にお世話になるとはな……」

リベロが言った。ま、俺もこんなことは予測してなかったよ。

「でもよかったです。優しい人たちで」

「本当ね。盗賊ついたらなんか略奪とか強奪とか女襲ったりとかそういうイメージが多いもんね」

「失礼つすね、これでも一応義賊なんすよ？」

カンダタ子分（黄）が言った。……義賊？

「そうつす。これでも俺ら、正義の味方つすよ？ 正義がそんなことしません！」

「じゃあ、どうしてあの屋敷に忍び込んだんだ？」

「ピキ〜？」

「それに関しては俺から説明しますよ」

カンダタ親分直々らしい。

「実は依頼がきたんですよ」

「依頼？」



「そう。あの屋敷の庭に入ってしまった野球のボールを取りに行った子供が帰ってこない。警察に言って協力してもらっても誰一人帰ってこなかったらしいでしてね」

「それでついに自称義賊のもとへ言ってみたと」

「はい、さいです。でも入ってみたはいいのですがその中で変な呪文をかけられてしまいましたね、しばらくの間石像にされていました」

「はは、お疲れ」

「ありがとうございます」

そんな感じで、この船旅はのほほんとしたものとなった。

~~~~~ファイナ side~~~~~

ノエルとスランボーちゃんがカンダタさんと話している間、私は船の甲板にいた。

風が気持ちいいです。 いやなことを全部忘れさせてくれるような、そんな気がします。

……でも、最近思うことがあるのです。

ソロさんを見つけてそのまま解決したら、ノエルがいなくなってしまうような、そんな気がします。

もしも本当にそうだとしたら……

「なにしけた顔してるのよ」

「あ、ミーナ。　　ううん、なんでもない」

「なんでもないはずないでしょ？　……もしかして、そのうちノエルがいなくなっちゃうとか考えてるんじゃない？」

「！」

凶星だった。　　でもどうしてわかったんだろう……。　　。

「だってねえ、ノエルのことでなんか悲しいこと考えてるあんたっていつもそんな顔よ？」

「えっ、そうですか？」

「そうなのよ。　　……ねえ、いつそのこと今度ノエルに好きだって言っちゃえば？」

「ど、どうしてノノノ」

顔が赤くなってしまった。

「も、もし言ったとして、嫌われたら「大丈夫よ」え？」

私の不安をミーナはすぐに否定した。

「だってあたしの推測正しければ、ノエルだってあんなのことが好きだもん」

「か、からかわないでください／＼／」

そんな会話のあと、ミーナは甲板に私一人を置いてどこかに行った。

……人のことばかりを言うけど、実はあなたもそうなんじゃないの、ミーナ？

~~~~~リベロside~~~~~

船、か。

俺は船の最後尾にあるバルコニーっぽい場所に座った。

……そういえば、船を作ろうと考えたことはなかったな。

今度、作ってみるかな。

「……で、なんのようだ、ミーナ？」

俺は背後にある柱の陰に向かっていった。

「あ、バレた？」

そこからは俺の予想通り、ミーナが出てきた。

「……お前、フィーナのときにはもう行ったのか？」

「ええ、行った。恋に悩むところも可愛いわね。」

「その考え方が俺にはわからん」

「まあまあ、そう言わずに。あたしたち二人とスランボーとレイアで二人の進展を見守ろうではないか」

「……ほんと、フィーナも多重人格だったけどこいつもそうなんじゃないのかと思うくらいのギャップだ。」

「……ところでさ、あんたどうして発明家になったの？」

「……それを知ってどうする」

「いや、別に？ ただたんに気になったから」

俺はこのとき、言うか言うまいか悩んだ。

あのときのことを克服して、人に話すか、それとも怯えて逃げるか。

「……今は言えない」

「……そっか」

「……もうすぐつくだろっから準備すっぞ」

「わかったわ」

ミーナはそう言ったあと、俺の耳元で囁いた。

「勇気が出たら、言ってね？」

「……………」

その後、ミーナはみんなのところへと向かった。

……………結局、俺はまた逃げた。

いつまでも抱え込んではいけないってわかってるのに、でも、逃げたくなる。

「おい、リベロ！　そろそろつくそうだ！！」

「わかった今行く！！」

ノエルが呼んでいる。　俺は甲板へ向かった。

……………レナ。　俺は、どろろすれればいい。

第四十七話 船旅（後書き）

藤「早速次回予告！」

ノ「早速すぎるわっ！」

藤「北の祠にたどり着き竜神王の兜を手に入れたノエルたち。しかし、そこにはとんでもない罠があった！」

ノ「いやほぼネタばれじゃねえかよ！」

藤「乞うご期待！」

ノ「どアホウ！！！」

## 第四十八話 北の祠に待つもの

船を降り、俺たちは北の祠へと歩いていった。

カンダタどもは船が獲られないよう見張りだ。

祠の入り口は堅く閉ざされていた。なにやら結界らしきものが張ってあるらしい。

俺は試しに扉を押してみた。

「……無理だな」

「ちょっと失礼します」

今度はフィーナが幻想の槍をかざしてから押してみた。

だが、開かない。

「うおおおおおおー!!」

次はリベロが渾身の力をこめて押したが無理だった。

「……な、なんなんだよ、これ」

最後はミーナだ。

「……そんなに難しいの？」

ミーナが扉を開けようとそれに触れたとき、不思議なことが起きた。  
ミーナが触れた場所は扉の中央。      そこから扉の紋章をたどるよ  
うに光が走った。

「へ？」

そして光が紋章を作ると、扉が開いた。

「……へ？」

「……お前、もしかしてこの祠と関係あり？」

「え、いや、全然？」

それならなぜ扉は開いた。

ま、そんなことはさて置き、俺たちは祠の中に入った。

~~~~~北の祠~~~~~

祠の中ある祭壇の上に、それはあった。

「……竜神王の、兜」

「なんだ、案外簡単だったな」

俺は竜神王の兜を手に入れ、早速装備した。

「確かに、本物だ」

「敵の気配もありませんね」

「じゃ、行こか」

俺たちは祠を出ようとした。しかし、動こうとしない人が約一名。

「おい、ミーナ。 どうしたんだ？」

「……知ってる」

「え？」

「あたし、ここのことを……知ってる」

「……それってどういう」それに関してはわたくしから説明させていただきます」誰!？」

突然、祭壇後ろの壁画の目の前に一人の女性が現われた。

「……もしかして…母さん？」

「大きくなりましたね、ミーナ」

「ミーナの……お母さん？」

「いや待て、それは本当か!？」

「ん、どういふことだリベロ？」

「あいつ前に言ってたんだ。

母さんはもうこの世にいないって」

それってまさか……。

「嘘……！ 母さんははずない……！ 母さんは6年前にすでに死んでいるのよ……！」

「ミーナ……。この世には、死者が蘇ることだってあり得るのよ」嘘っ……！「嘘ではないわ。現にそこにいる男の子だって……」

ミーナの母親は俺を指差した。

「俺……？」

「そう、あなたよ。あなただって、すでに死んでるんでしょ？」

「……！」

改めて考えてみればその通りだ。俺はすでに、死んでいる。

まさかこんな形でこいつらに……！！

「ノエルが……死んで……！！」

「違う、フィーナ！ 俺は、俺は……！」

俺は慌てて弁解しようとした。

……弁解してどうする。あとで言うつもりだったろ、俺。

「あの子と同じように、わたくしも蘇りました。そしてその事件としてある人物の抹殺を依頼されたのです」

「ある……人物……？」

「そう。あそこにいる神谷ノエルという男の子、あれは非常に危険な人物だと聞いております」

「ど、どういう意味だそれは……！」

「わたくしはわたくしを蘇らせてくれた人に『神谷ノエルは全世界を滅ぼす。やつを消せ』と言われました。ねえ、ミーナ。

わたくしと一緒にあの悪魔を消しましょう。そして世界を守りましょう」

「ミーナ、騙されるな……！ そいつは母さんじゃない、死んだ人間は蘇らな「それなら、ノエルは？」「え」

「あんたが今ここにいることを、どうやって証明するの。死者が蘇らないのなら、あんたは何」

そう言われると、言い返せない。

……俺は……。

「母さん、あたしはどうすればいいの？」

「フッフ　わたくしがミーナの体に入り込みます。　そうすればミーナの力は想像を絶するものになるはず」

「わかった。　いいよ、来て」

その途端、ミーナの母親の体が小さな光となり、ミーナの体に入った。

ミーナの髪は徐々に薄くなりプラチナブロンドぽくなった。　そして背中には左右それぞれに天使と悪魔の翼が。

「……レナ」

その姿を見たりベロが反応した。　レナって誰だ？

「フッフ　さあ、行きましようミーナ」

ミーナは銀色の鎌を取り出した。

「やばい、お前らなんとかしてミーナを助けるぞ！」

「ピキッ！」

『すべてはマスターの仰せのままに』

「「……………」」

反応したのは二人だけ！？

「おい、フィーナ、リベロ!!」

「……あなたには、騙されました」

「え？」

「あなたは私に優しくしてくれて、助けてくれて、辛いときも一緒にいてくれて、私はとてもうれしかった。でもそれは、私を世界を破壊するための道具として使うためのお芝居だったんですね!?!」

「い、いや、そんなことはな「嘘、絶対嘘!!」フィーナ!!」

「私にとって、ノエルが既に死んでいるなんてことはどうでもいい。ただ、そばにいらればそれでよかった。私は、あなたのためにここまで来た。でも、今は違う」

フィーナは幻想の槍の柄で俺の腹を殴った。

「ぐっ!!」

「私は、私を騙したあなたを、許さない!!」

「フィ、フィーナ……」

「フフフフ」

何笑ってんだよ貴様!! ミーナとフィーナを盾にしやがって!!

「俺は、あの人は戦えない!!」

「どうしたんだお前は!!」

「レナに、似てる!!　レナを攻撃するなんてこと、俺には、できない!!」

「だからそれ誰だ!!」

「すまん、ノエル!　俺は、降りる!!」

リベロは祠を飛び出した。

「リベロオオオオオオ!!」

「フッフ　味方は一人だけね」

「何っ!?　てスランボーお前!!」

「このスライムも、わたくしの味方ですわ」

「ピ、ピキーンッ!!」

事情を知っている者から見れば敵との戦い、だが知らない者から見れば味方同士での戦い。

こんなことが、許されていいのか!!

第四十八話

北の祠に待つもの

(後書き)

藤「ほぼ全員、敵に回しちゃいましたね」

ノ「ていうかよ、ただ単に兜入手して終わりじゃダメだったのか？」

藤「それだと、ねえ。　ちよつとストーリー的に長くなっちゃいますので」

ノ「？　それってどういう意味？」

藤「だから長くなりそうだったところ、例えばリベロやミーナの過去とかをまとめてやっちゃおくてこと」

ノ「で、俺の正体も一気に暴露」

藤「そ。　まあ悪魔ってのは間違った情報だけだね」

ノ「てかもうネタばれじゃねえか!!」

第四十九話 仲間割れ、そして絆

俺の目の前には、絶望しか見えない。

……今までともに旅してきた仲間を、攻撃できるかよ。

『マスター、指示を』

俺はレイアのその言葉に無言でいた。

『……マスター！』

「……分かった、指示を出す」

俺は一拍置いてから言った。

「レイア……スリープモードに入れ」

『……それは、なぜですか』

「命令だ。理由は聞くな」

『……Yes, Master』

レイアは安全なところまで移動すると、スリープモードに入った。

「あらあら、唯一の味方まで逃げさせるだなんて……死ぬ気？それとも余裕？」

「……作成・隼の剣（改）」

俺は隼の剣（改）を造り、手に取った。

「後者のほうね」

「……勘違いするな。

俺は戦わない。

思う存分攻撃して来

い」

俺は右手に剣を持ったまま、両腕を広げた。

「……ノエル、私は、あなたを本当に殺しますよ？」

「ああ、構わん。

お前に殺されるのなら……本望だ」

俺は正直に言った。 実際、殺されるのならそこら辺に居るようなゴロツキよりもフィーナのほうが断然いいに決まっている。

「……そう、ですか」

フィーナは幻想の槍を両手で持ち、俺のほうに向けた。

「……行きます！」

「……ああ」

フィーナは俺の目の前にすばやく移動すると、俺の胴体をものすごい速さで突いた。

……しかし、鎧を装着しているのもあるが、槍に迷いがある。

俺にダメージをほとんど与えられていない。

「っ！っ！っ！っ！」

「どうした!？」

フィーナの槍のスピードはだんだん落ちていった。

「っ!!-- くそっ!!--」

フィーナは槍を少し上に挙げ、俺に向かって思い切り突いた。

……そこは、俺の額部分だ。

~~~~~リベロside~~~~~

俺は走ってカンドタたちのいる船まで戻ってきた。

「あれ、リベロの旦那。 どうしやした?」

俺は無言で船に飛び乗った。

「うわっ、またそんなに急いで……。 いったいどうしたんですか? 他の方はどうしたんですか?」

その言葉で、俺は一瞬、自分のしたことを考えた。

……俺、何してんだよ。

なんで俺、こんなところにいるんだよ。

「……もしかして、恐くなって逃げ出しちゃったんですか」

逃げ出した……そうだ、俺は逃げ出したんだ。

いまさらながらそう思うと、不意に涙が出てきた。

「あ、あり？」

「……リベロの旦那。

なにがあつたかは聞きあせんけど、もしも自分の過去と関係があるのだとしたら、そしてもしも旦那がそれを断ち切るために旅をしているのなら、逃げるのは間違っていると思いやすよ」

「……………」

「時には逃げるのも必要。でも、断ち切ろうと思っていたものから逃げるのは、とても情けない事だと思いやす」

……超図星。 胸が痛くなる。

「今からでも遅くない、戻って、過去を断ち切ったらどうでやんすか？」

「……………そう……だな……………」

俺は涙を手で拭くと、自分の船室から例の物を持ち出した。

「……………行ってくる。　　ありがとうな」

「応援してます」

俺は気持ちを切り替え、船を降り、北の祠へと走っていった。

~~~~~ノエルside~~~~~

フィーナの槍は俺の額の数ミリ手前で止まっていた。

「……………やっぱり…出来るはず……ないよ」

フィーナの体が小刻みに震え、目からは涙が出ている。

「……………フィーナ」

「ノエルは……………私を…なんども……………助けて…くれて……………いつも…一緒に……………仲間だって…言ってくれた。　　そんな人を……………殺せるはずが……………ない。　　絶対……………できないよ……………!!」

カランツとフィーナの手から槍が落ち、彼女は俺の胸に顔を当てるようにして泣き崩れた。

「……………ノエルは…私にとって……………大切な…人……………だから……………!　　刺すなんて事……………できない……………よ……………!」

「……………俺もだ」

俺はフィーナをそつと抱きしめた。

「俺にとつても、フィーナは大切な人だ。お前と戦うなんて事は、絶対にできない」

「ぐすつ」

「ピキッ!」

スランボーもこちらへ駆け寄ってきた。

……よかった。こいつらと本気で戦うなんて事にならなくて。

俺はフィーナを離した。

「さあ、涙を拭け。俺達にはやるべきことがある。俺達で、仲間を助けるぞ!」

「……ええ」

「ピキッ!」

俺達はミーナ(母)のほうに向き直った。

「……ちょっとまった俺もいるぜ!」

ふと、入り口のほうから声がした。

振り返ると、全力疾走でこちらにダッシュしてくるリベロがいた。

「リベローー!!」

「俺はもう逃げない!!」

俺は自分の過去と戦う!!」

……あとで、こいつの過去とやらを聞いて見るとするか。

「フフフフ、いい絆ね。 じゃあ、こちらも本気を出させてもらうわね」

ミーナ(母)はどこからともなく光色の鎌を取り出した。

……更に強くなった俺達の絆を、見せてやる!!

第四十九話 仲間割れ、そして絆（後書き）

藤「いやあ、絆っていいねえ」

ノ「次回はミーナにとりついた母親との対決。

・・・正直言っ

て勝機は？」

藤「さあ？ でも絆と愛に勝る力はない!!」

ノ「だといいんだが・・・」

第五十話 再結束した俺達の絆は誰にも壊されない！（前書き）

記念すべき五十話目。でもキリ悪い、悪すぎる。
そしてリベロが暴走気味な回。

第五十話 再結束した俺達の絆は誰にも壊されない！

勝つ、絶対に。

そしてミーナを取り戻す！

「ノエル、指示を！」

「ピキッ！」

「早くしてくれ！」

全員、指示待ちらしい。……よし。

「フィーナはサポートに、スランボーは命大事に。そしてリベ

ロ。お前は思う存分暴れろ！」

「いいのか！？」

「ああ。お前の過去とやらを吹っ飛ばして見せろ！！」

「おっしやー！！」

リベロはどこからともなく、俺には見覚えのない杖を取り出した。

「それは？」

「まだ試験中だがな。これは『幽体の杖』だ。人間に憑依したり合成した魂を開放する！」

すげえ設定だなそれ。 ていうかエーミールにも使えるじゃん！

「おりゃー！」

「甘い！ー！」

敵の鎌が俺の肩を掠めた。

危ねえ……速すぎるぜこの鎌。

「ノエル！ いったん下がれー！」

「はい！？」

「じゃねえと巻き込まれるぞ？ ドルマ、ドルクマ、ドルマドン
ー！」

リベロは3つの呪文を一つにあわせた。

「じゃ、吸い込まれな。 ドルガルドー！」

リベロが作り上げた球体……それはまるでブラックホールのように
まわりの空間を吸い込み……え？

「何しとんじゃおんどりゃあああー！ー！」

「これではサポートのしようがありませんー！ー！ー！」

「ピキーーーーッ!!」

「……凄い力ねえ」

リベロを除き、吸い込まれないようにしている俺達。だが、約一名平然としている者が……。

「うおいいいいいい!! なんて狙うべき相手が吸い込まれねえんだよ!!」

「知るか!!」

「も、もう、限界……」

「ピ、ピキーーーーッ!!」

フィーナとスランポーは柱にしがみついているが、限界が近いらしい。かく言う俺もいい加減何かに掴まらないと……!

「お、おい、リベロ」

「なんだ」

「お前、もしあれを吸い込めてもさ、肉体はミーナのだから……ミ
ーナも死んじまうぞ!!」

「!! しまった!!」

「なんとかして取り消せねえか!？」

「…………無理だ！」

……ああ、今ものすごい後悔をした。　暴れるなんて言うんじゃない。
なかった、うん。

すると、リベロは杖を構え、集中した。

「（…………行ける！）ノエル、ミーナを、しっかりとつかんでるよ！
？」

「どいうこと!?!」

「あいつの肉体から…………母親を抜き去る!!　　ヴェルラン・ソ
ル・ジェラリエラ!!」

「もはやドラクエでもファンタシスタでもハガレンでもねえ!!」

幽体の杖から光の弾が全方向に放たれた。

実際、当たってもなんともない。　…………まあ、ドルガルドの方へ
放たれたのは吸い込まれたが。

「これしきの光で、私を倒せるとでも？」

ミーナ（母）は鎌を振り、光の弾を斬った。

でも、斬れない。　同じ光でも斬れないって…………どいう仕組み
だよ、おい。

「なっ！！」

光の弾はミーナ（母）に当たると、一瞬で体内へ入り込んだ。

「う………がああああああ……！」

ミーナの体は激しい光を放った。

目が………開けられねえ……！」

「ノエル、油断するな！　母親が抜けたミーナの体は恐らく放心状態となる………　だからこの球体に吸い込まれないようにお前が………！」

「そうか………　フィーナ、俺の目を頼む……！」

「ふあ、ふあい………　イマジンプレイカー……！」

フィーナのイマジンプレイカーは攻撃と補助両方に使えるらしい。
俺の目は見えるようになった。

しかし、時は既に遅し。

ミーナの体は無力な状態となって、ドルガードへと吸い込まれる――
歩手前だった。

「や、やばい………　リベロ、お前が行け……！」

「なんでだよ………　てか何も見えねえ……！」

「ドルガルドの内部にだ！　もともとお前が原因だし、ミーナの体が入ってた！！！」

「……たく、しょうがねえ！！！」

リベロはそう言うと、ドルガルドへ自ら吸い込まれに行った。

それと同時に、光が消えた。

そして先ほどまでミーナがいた場所に母親らしき人物が……。

「フ、フフフフ。　もう、手放しませんよ、ミーナ。　どこへでもついていく」

ミーナの母親はそんなヤンデレ風なセリフを言いながら、ドルガルドに入ってしまった。

……やばい、すごくやばい事になるぞこれは！！

まだドルガルドの吸い込みは続いている。　俺は急いでフィーナとスランボーの元へ行き、結界を張った。

「お前ら、これではばらくは耐えられる。　少し窮屈だが、我慢してくれよな！？」

「ええ、大丈夫よ」

「ピキッ！」

俺たちは結界の中から、リベロとミーナの無事を祈った。

しかし

「……ねえ、ノエル。　　レイアは？」

「え？　　確かあっちの方でスリープして………ていない!!」

「び、びキッ!?!」

……まさかとは思いが、あいっ……

どうしようおおおおおおお……!!

第五十話 再結束した俺達の絆は誰にも壊されない！（後書き）

藤「リベロ暴走、ミーナ放心、レイア行方不明で終わった回」

ノ「なんか次回の俺達の出番がないような気が・・・」

藤「うん、おめーらの出番ねーから！」

ノ「何こいつ超うぜえ!!」

ファイ「確かに、いやな人ですね・・・」

藤「へ、そうかな？」

ノ・ファイ「どうかんがえてもそうだ!!」「」

次回はリベロside基本で行きます。

では、また次回！

第五十一話 母親の執念って・・・怖い

ドルガルドの内部は、混沌の闇の渦だった。

こんなものを作り上げてしまったのか、俺は。

この中に吸い込まれた置物などはすべて無重力状態で浮いているよ
うだ。

その中のひとつにミーナの体があった。

俺はミーナの救出に向かった。

しかし、どこからともなく電撃が放たれた。

「グワッ！」

「ミーナには、近づかせない。 ミーナは私と、ずっと一緒にい
いいいいいいい！」

そう、電撃の主は母親だった。

母親はミーナに近づくと、中に入り込んだ。

「しまった……！」

再び憑依されたミーナは、またも光の鎌を取り出した。

「消え去りなさい、ミーナを苦しませる人間は、すべてええええええ

えええー!!」

しばらくの間、ミーナ（母）の衝撃波による攻撃が続いた。

俺は避ける間もなく、それらを何度も喰らった。

~~~~~ノエルside~~~~~

結界の中にいる俺たちは、如何にして内部での戦いを見届けるか考えていた。

「レイアがいねえから、こればかりは大変だな」

「あの……ノエルって千里眼みたいなのは使えませんでしたっけ？」

「あの空間は範囲外だから無理だ。……あの中を見るにはあの中に直接入らねえと」

「だ、だったら、リベロさんを助けることも含めて、中に入れば」

「いや、それはダメだ。これはあいつの戦いで、あいつがケリをつけなきゃならないんだ」

「……私ときは、私にケリをつけさせてくれませんでしたよね」

俺はフィーナの言葉を無視した。そして考えた。

……通信機的なもの使えばよくね？

俺はあれこれといろいろな作品を思い出していった。

いざって時に思い出せないってよくあるよね、うん。

「作成・バットメイクショット、スタッグフォン！」

俺は「仮面ライダーW」から蝙蝠型のカメラとクワガタ型の携帯を作った。

そして「バット」のガイアメモリをバットショットに差し込んだ。

『バット！』

「な、なんですかそれ？」

「まあ見てな。しばらく踏ん張っておけ」

俺は結界を一時的にとき、バットショットをドルガルドに送り込んだ。

そして結界をもう一度……。

あとはスタッグフォンでバットショットの映したものを見るだけだ。

俺たちはスタッグフォンの画面を覗き込んだ。

「じ、これは……！」

「そ、そんな……」

「ピキピキーン！」

そこにはミーナの攻撃を受け、立つのがやっとなほどにまで体力を消耗されたリベロが映っていた。

~~~~~リベロside~~~~~

「グアッ!!!」

ミーナ(母)は俺の体を切りつけた。

「この程度？ そんな力でミーナを奪おうなんて、1000世紀早い!!!」

1000世紀って……地球すら滅ばないか？

しかし、実際に押されている。 またあれを使ってもすぐに憑依されるのが目に見えている。

「大丈夫、すぐ楽になるから。 本当にすぐよ、0.1秒もかからない」

俺は背筋が凍りついた。

ミーナ(母)は一瞬で消えた。

その瞬間、俺は身を伏せた。

スパッ！

「ちっ！」

ミーナ（母）の鎌は空を斬った。そこはちょうど、俺の首があった場所……。

なんとか助かったが、このままじゃ勝てねえ！！

俺はあたりを見回した。

ここには祠の中にあつたものが大量にある。……これらを使えば！

俺は1つの石像に近づき、両手でそれに触れた。

錬金術で、武器を作る！

ぶっちゃけ錬成陣はいらない。俺は石像を1本の槍に変えた。

遠距離だと確実に不利。だからここは接近戦だ。

……しかし、気になるものを見つけた。

ミーナ（母）の背後に、スリープしているのかレイアがいた。

ミーナ（母）は気づいていない。

ま、いいか。今はとりあえず……狐叩き戦法でミーナの体から

追い出す！

「おりゃっ！」

俺は槍で突きまくった。実を言うと杖と弓矢以外の武器は使ったことないからド素人です。

「……弱いですね？」

やはりすべて避けられ、鎌で一回斬られただけで粉碎した。

……やっぱ呪文か。

「メラ、ヒヤド、バギ、デイン、イオ、ギラ、ドルマ！」

俺は下級攻撃呪文をすべて唱え、ひとつに合わせた。

「？」

ミーナ（母）は俺が意味不明なことをしたので少しひいたようだ。

「メヒヤバデイギド！」

もう名前なんて適当じゃボケ！！

「何っ！？」

突然のことだったので、驚くので精一杯だったらしい。

七色の魔力は一筋の光となり、ミーナ（母）を貫いた。

「ぐあああああああああ！！！！」

「うおっしゃー！！！」

結構あっさりと行けたな！

母親はミーナの体から出てきた。俺はミーナのところへ向かった。

「ミーナに、触るなああああ！！！！」

母親の怒号が象ったのか、あたりを炎が包んだ。

……こいつ、まさかミーナのことを心残りで蘇ったのか？

「マヒヤデドスー！！！」

俺はその炎をすべて凍らせた。

「お、おおおおおおお！！！！！」

母親はまるでこの世の終わりかのような雄たけびを上げ、白目を向
き、ドルガルドの間の空間をすべて吸収した。

その時に俺はミーナとレイアを担いで、巻き込まれないように脱出した。

第五十一話 母親の執念って・・・怖い(後書き)

藤「リベロが錬金術つかっちゃった回です」

ノ「ていうかなんで使えるの？」

リ「さあ、物心ついたときから」

ノ「・・・はい？」

藤「そのことは次回か・・・その次回で！」

リ「・・・そういや、本当にどうしてだろ」

第五十二話 過去・・・それは人を苦しめる。(前書き)

今回もリベロsideでいきます。

それを思い出した瞬間、俺の心臓が激しく痛くなった。

「グ……く、くそっ、なんだよ、これ!!」

自分の身体の創りが変わり始めている、それがすぐに分かった!

やばい……いまここで、まさか……グッ!

「グ、ググ、グアアアアアアアアアア!!!!」

俺の脚が、腕が、胴体が、頭部が、めまぐるしく……蠢く!!

「アアアアアアアアアアアア!!!!」

~~~~~ノエルside~~~~~

俺たちの目の前で、信じられない出来事が起こっていた。

母親の魂が一気に魔物（キラールパンサーとガーゴイルの合成で人間の銀髪）へと姿を変え、さらにそれを見たりベロまでもが肉体を変え始めている!

「ノ、ノエル、リベロさんのあの姿は……!!」

「ああ、分かっている。あれは、『メツサーラ』だ」

変わり果てたりベロの姿は、まさにメツサーラだった。

いや、正確には人間とメツサーラの間と言ったところか。

髪は相変わらず赤で、肌の色は赤と灰色の間……ニビ色。目は真つ赤で、歯と爪は長く鋭い（ちなみに、爪も赤い）。脚は思いつきりメツサーラ。

「……これが、あいつの過去か」

「でも、リベロさんからは『邪』をあまり感じませんでしたよ！？」  
ごく一般の人間と同じ割合でした！」

「ピキーツー！」

「ああ、俺もそう思っている。それに……」

俺はリベロを見て言った。

「例えあいつが化け物だろうが、俺たちの仲間であることに変わりない」

~~~~~リベロside~~~~~

くそっ！ まさかまた、この姿になっちまうとは……！

ノエルたちは……見なくても分かる。

どうせ俺のことを化け物を見るような目で見てるんだろ！？
……はたから見たら化け物か。

しかしどうしてあの母親は、あの姿になったんだ？

「ギャアアアアアア！！！」

母親……めんどくさいから合成獣と呼ぼう。　　は、炎を溜めて、
空中に飛び上がった。

……エクスプロージョンが、くる！

俺は右手にメラ、左手にヒヤドを作った。

……呪文を言わなくても発動できるのが……まあ、なんとも。

両手に作った対極の魔力を一つに合わせた。

「ガアアアアアア！！！」

合成獣から巨大な炎の弾が放たれた。　　……メラギュランと同じ
くらいか。

俺は一つに合わせた魔力を一気に解き放った。

「メドローアア！！！」

俺はメドローアでエクスプロージョンを相殺した。

そしてすぐにピオラ二回重ねてすばやくその場から離れた。

俺が離れると同時に、その場所に合成獣の叩き落としが落ちてきた。

これくらいのスピードでないと、勝てない。

俺はドルマドンを作った。……ドルガルドは、もう作らん!!

そしてその弾を、俺はそのスピードの脚で、蹴飛ばした。

「ドルマドンシュート!!」

「グギャツ!! ギャアアアア!!」

ドルマドンシュートは見事に炸裂した。……でも、これだけじゃ終わらない!!

俺はすばやく奴の背後にまわり、ドルマドンを連発した。

「オラオラオラオラ!!」

「キシヤアアア!!」

「いったん退け、リベロ!!」

「!!」

ノエルが叫んだときにはもう遅かった。

俺は合成獣に背後を奪われその後、

強烈な叩き落しを喰らって地面と腕に潰された。

第五十二話 過去・・・それは人を苦しめる。(後書き)

ノ「リベロがまさかメツサーラと人間の融合体だったとは……驚いた」

藤「……それほど驚いてないよね？」

ノ「まあ、そうとも言えるな。 実際、さっきも言ったがあいつが俺たちの仲間であることには変わらない」

藤「いい言葉だ、感動的だな。だが、無意味だ」

ノ「はい、ムツコロス」 十字架に縛り付けて剣を突き立てる

藤「イヤアアアアア!!!」

フィ「じ、実際には無意味ではないようですが……」

レ「今は駄作者の始末が優先でしょう」

フィ「……ですね」

第五十三話

遺言とは約束（前書き）

勉強の合間に。

ノ「落ちるぞ、お前」

・
・
・
・
・

第五十三話 遺言とは約束

合成獣は叩き落しをした体勢から動かなかつた。

あれじゃ助けようにも助けられない！

「！ ノエル、ミーナが！！」

「ミーナ！？」

ミーナを見ると、目を覚ましたようだ。

「……大丈夫か？」

「……ええ」

「……」

「……」

ダメだ、会話が続かない。

それに今はリベロの救出を……！

「……結界を……解いて」

「え？」

「……あたしが……リベロを……助ける！」

ボソボソ声で聞き取りにくい、気はしっかりしている。

「……わかった。リベロを頼む！」

俺が結界を解くと、ミーナは斧を構えてすぐに飛び出した。

「オラアアアアアアアア！」

それと同時に合成獣の腕の下からその腕を持ち上げて、立ち上がる者がいた。

目が金色に光っている、リベロだった。

~~~~~ミーナside~~~~~

あたしが飛び出してすぐに、リベロと思しきモノが立ち上がった。

「リベロ！　大丈夫!!?」

「……ミーナ……か……?」

声が地味に合成されている。　おそらくもう少しで完全体になるだろう。

「助けに来た」

「……へっ……こんな化け物……助けて……何になる」

「あたしはあんたが何者だろうと関係ない。 それにあんたはま  
だやらなきゃならないことがあるでしょ？」

「……………」

あたしは斧を合成獣に向かって振った。

「キシヤアアア！！！」

「あたしの母さんは、こんなじゃない。 れっきとした人間だ  
った！！！」

あたしは斧の刃先を地面にすばやく擦りつけ、摩擦で火をつけた。

「もしもあたしのせいでこんな姿になったのなら、あたしが、この  
世から消す！！！」

「……………ミーナ……………」

あたしは合成獣をなんども叩き切った。

「キシエエアアアアア！！！」

「火の車！！！」

別に借金があるわけではない。 だが、この借りを返すには充分  
な名前だ！！！」

まあ、簡単に言っと大車輪。

「タアアアアアア！！！！」

合成獣の背中を直撃した。

でも、油断してた。そのまま飛ぶな！！

飛ばれたらバランスが崩れる！でも途中でキャンセルできない！！

「く………のわっ！」

あたしはバランスを見事なまでに崩し、合成獣の背中から頭が下になるようにした地面に落ちてしまった。

でも、衝撃がない。衝撃の変わりにどこかやわらかいような……。

「無茶すんじゃねえぞ」

「リベロ！？」

あたしを墜落から救ってくれたのはリベロだった。落ちる直前でキャッチしたらしい。

メッサーラのような姿だけど、やっぱりリベロはリベロね。

「行くぞ」

「い、行ってくて？」

「やつをぶつ倒す。それに俺はもう迷わないと決めた。だから例え完全な魔物になろうと、お前を守る為に戦う!!」  
だ

「……一つ訂正」

「？」

「その言い方だと、あたしがまるで戦わないみたいじゃない？」

「……そうか」

リベロに地上に降ろしてもらい、あたしは斧を構え直した。

「じゃ、行くわよ!!」

「ああ!!」

あたしは火がまだついている斧を振つての衝撃波、リベロは炎と闇の呪文でそれぞれ合成獣を攻撃した。

「キシエエエアアアアアアア!!」

合成獣は攻撃を諸に喰らいながらも更に上昇し、息を思い切り吸った。

「……ミーナ、攻撃に備えろ!!」

えええええ!?      んないきなり!!!?

「グシエアアアアアアアアア！！！！」

合成獣は口から巨大な火の弾を放った。

狙いは……あたし！？

「危ない！！！」

「キヤアツ！！！」

あたしは両腕で身を守るようにしてしゃがんだ。

ドゴオオオオオオオン！！！！

爆発音がすぐそばで鳴った。でも、なんともない。

あたしはそつと目を上げた。……そこには

「リ、リベロ！？！」

「バツキヤロ！ 備えろって言ったただらうが！！！」

ポロポロになつたりベロが立っていた。

そこから流れ出ている血は、紫だった。

「まさか、完全に……！！！」

「言つたら、お前を守るってな！！！」

リベロはそう言って右手に弾けるような光、左手に風の呪文を作った。

「あいてが爆風なら、こつちも爆風だ！！　爆裂旋風・イオナ口ス！！」

一つに合わさった二つの力はまるで爆弾が爆発したかのようなすさまじい力を発揮した。

爆風は合成獣もろとも祠にあるものすべてを吹き飛ばし、粉々にしていった。

巻き込まれたら……確実に木端微塵ね、うん。

「おおおおおおお！！！！　……も、無理」

「限界早ッ！！」

爆風はおさまり、合成獣は地面に墜落した。

右目と左翼が吹っ飛んで、右前足と左後足の皮がない。

正直言ってグロい。　改めて、こんなものを母親だと誰が思いただらうか。

もしもあたしが魔物と人間のハーフだったらまた話は違ってくるだらう。　でもあたしは、れっきとした人間の娘だ！

あたしはリベロの肩を少したたいた。



「？」

「トドメは、あたしに刺させて」

「……わかった」

あたしは立ち上がり、合成獣に向かってゆっくりと歩き出した。

<……ミーナ>

ふと、頭の中で声がした。

<……母さんを……消すつもり？>

「……あなたはあたしの母さんじゃない」

あたしは歩く足を止めずに言った。

「確かに見た目は母さんそのものだった。でもね、母さんは力  
ずくであたしを連れていこうなんて、絶対にしないわよ！！」

<……なんで……そんなことが>

「あなた、母さんのくせに知らないの？ あたしが、母さんの死  
に直面して、遺言もちゃあんと聞いたことを」

<……>

「母さんは確かこう言ったよね？ 『私はもうあなたを守れない  
から、誰にも負けないくらい強く、そして人を愛するようになって』

ってね」

<……………そういえば、そんなことを…>

「母さんは約束を絶対に忘れない人だった。この遺言もある種の約束だし、本当の母さんは天国で今もあたしのことを見守っていると思う」

<……………>

反論をしない…この時点でバレバレ。

「それに母さんはあたしに攻撃しないわよ？ ……さっきのエクスプロージョン、あれ明らかにあたしを狙ってたよね？」

<そ、それは……………！>

「何度弁解しようと無駄。あたしが出した結論は、『あなたは母さんじゃない』ということ」

あたしは合成獣の目の前に立ち、斧を振り上げた。

「母さんの名を語り、そしてあたしの大切な人を殺そうとした罪…  
…その身で償え！！ 魂玉砕大剣落とし！！」

あたしは振り上げた斧に渾身の力をこめて、合成獣の頭に落とした。

「グシャアアアアアアアア！！！」

<ア……………アアアアアアアアアアアアアアアアアア！！！！>

目の前では紫色の血を大量に噴出しながら苦しむ合成獣。脳内には断絶魔のような叫び声。

あたしは気が狂いそうになった。今にも発狂しそうなくらい。

でも、それはおさまった。

メッサーラのような姿のリベロが、その気持ちを静めてくれた。

「……………落ち着け。お前は充分頑張った。何も悔いることはない」

「……………リベロ」

そしてあたしの目の前は、真っ暗になった。

第五十三話 遺言とは約束（後書き）

やっと祠編がおわったあ……。

ノ「ほんと、いつになったらドラクエ編自体が終了するんだ？」

・・・・本来なら1年で終わらせる予定だったんですけど受験等いろいろありましてそれはほぼ……というか確実に不可能となりました。ノ「……ま、一応『仮面戦闘期』のほうもキリがいいし……そろそろ集中しようや？」

・・・・ふあい、そうします。

・・・・あ

ノ「どした？」

よく考えたらリベロとミーナの過去書いてねえ!!

ノ「受験終わったらにしろ。キリがないしお前の両親だってい

つ爆発するか……」

・・・・ですね。

第五十四話 愛、戦士（前書き）

久々の更新です！ でもまた間が開きます！！

ノ「なあ、今回のタイトル、なんだ？」

藤「え、ああ。劇場版ファーストガンダム中篇の主題歌をいじった」

ノ「ただ単に漢字変えただけじゃねえか」

藤「うっさい！！」

## 第五十四話 愛、戦士

祠での激闘が終わり、俺たちはカンダタたちの待つ船へと戻ってきた。

リベロは元の姿に戻り、気絶したミーナをここまで抱えてきてくれた。

彼は今、自室にいる。

「ミーナが目を覚ましたら呼んでくれ」

あいつはそう言った。

スランポーはミーナの部屋に入った。

そして俺たちもそれぞれの自室に戻っていった。

……ちなみにレイアはちゃんと回収した。

~~~~~俺の部屋~~~~~

トントン

ベッドの上で横になっていると、誰かがドアを叩いた。

「入って」

「……………」

無言で俺の部屋に入ってきたのは、フィーナだった。

「……………どうした？」

「……………」

俺が聞くと、フィーナは無言でその場に正座した。

「……………ノエルに、謝っておきたくて」

「謝る？　何をだ？」

「……………」

フィーナは少し置いてから、急にしゃがれた声で話し始めた。

「……………あの時、私は本当にあなたを殺そうとした。　いまはどうしてだかわからない。　殺さなきゃ…殺される気がした」

そうか、と俺は言った。

正直言って仲間に殺されると思ったときはヤバイ、と判断できたけど、でも、殺されるなら姉ちゃんかフィーナって決めてたからな。

「でも私に殺されるってわかっていて……………それでも無防備で攻撃を全部受け止めて…最後に頭を狙ったときもまったく逃げようとしな
い……………」

「……………」

「そうだよな、ノエルはいつもそうだよな。ノエルは仲間を自分から傷つけるなんてこと絶対にするはずないよね。それに気づかないで殺そうとした、私がバカだった」

「…………いや、お前はバカじゃない。ちゃんと説明しなかった俺に非があるんだ」

「…………ううん。それもいずれば教えてくれるはずだったんでしよう？でも私は、何も考えずに、ノエルを、殺そうとして……………」

フィーナはそこで、ポロポロと泣き出した。

「ちょ…………フィーナ」

「だって…………！私のせいでノエルはベホマ4回分の怪我を負った。私がちゃんと考えていれば、そんなことには……………」

「フィーナ!!」

俺はフィーナを無理やり立ち上がらせ、ひしと抱きしめた。

「……………」

「自分を責めるな。俺は気にしてないと言ってるんだ。それに何度も言うが、悪いのはお前じゃない」

「で、でも……!」

「お前はちゃんと俺の治療をしてくれた。俺にとっちゃ、それで十分な償いだ」

「……………」

「……………フィーナ。俺の過去はあとでみんなにも言うが、先にお前に聞いてほしいことがある」

「……………何？」

俺はフィーナの両肩を持ちながらゆっくりと離し、目を合わせた。

「……………好きだ」

「……………え？」

「俺は、フィーナのことを好きだ」

「!」

顔が熱い。

「で、でも、私はノエルを殺そうとして……………!」

「まだ言うか」

「そ、そりゃ、私だってノエルのこと……………好き、だけど……………」

そっか。…………えっ？

「じよ、冗談でしょ、自分を殺そうとした人間を好きだなんて」

「じゃあよ…………」

俺はフィーナの頭を右手でこちらに寄せて、俺の唇を、彼女の唇に重ねた。

「！！」

数秒して、それを離れた。

「ノ、ノエル…………ノノノ」

「…………これでも、嘘だと思っつか？」

俺が聞くと、フィーナは赤くなりながら首を横にぶんぶん振った。

「…………例え俺を殺そうとしても、俺にとってそれ相応の償いをしてくれれば俺は許す。それが愛してる人間なら、尚更だ」

「え、あ、愛？」

「……………あ」

しまったやっちゃった！！！！

いくらなんでも初っ端からそこまで話を進めるのはいかんだろっ！！！！

「す、すまん、フィーナ、いまのはt「じゃあ、これがいんじゃないんですか?」え?」

こんどはフィーナが顔を近づけ、俺の唇に彼女のそれを重ねた。

しかもさっきよりも……長い!!

「私も、ノエルのことを愛してますからノノ」

「……え、あ、えっと……とにかく!!　いつまでも自分を責めてるのはお前らしくない!!」

「……本当に、許してくれるのですか?」

「まだ言うか。　俺は最初から気にしてねえし、例え気にしてたとしても、ここまでされたら怒る気もなくなるだろ」

「……そう、ですか。　よかった」

フィーナは少し微笑んだ。

やっぱフィーナには、笑顔が一番だ。

「あ、そうだ。　フィーナ、すまないがミーナの様子を見てきてくれないか?　そろそろ目を覚ますはずなんだが……」

「うん、わかった」

フィーナは部屋を出……ずに俺にキスをした。

「じゃ、行ってくるね」

そう言っつて、フィーナは今度こそ部屋を出ていった。

……まさかの、か。

絶対に護つてやらねえとな。

俺は机に置いたレイアのスリープモードを解除した。

『……おはようございます、マスター』

「おう、おはよう」

『……フィーナと接吻をしたのですね』

「え……?」

『マスターの口内のDNA情報物質にフィーナのDNA情報物質が紛れ込んでいます。つまり、接吻をして互いにDNA情報物質を少量、移動させたのでは』

んなこと分析するな!!

「ノエルー……ッ!! 目を覚ましたよ……ッ!!」

少し遠くから、フィーナが大声で俺を呼んだ。

「おう、今行く!!」

俺も大声で応えた。

『……………どうやら、分析通りみたいですね』

うっせえー！

俺とレイアは部屋を出て、みんなを甲板に集めた。

~~~~~甲板~~~~~

船は聖水を思い切りぶっ掛けているので、魔物の心配はない。

甲板は話し合いにはもってこいの場所だ。

「……………まず、俺から話そう」

リベロが口を開いた。

「俺がどうして錬金術を使えるのか、どうして科学者目指してるのか、そしてどうして俺が魔物になったのか……………みんなに、聞いてほしい」

俺たちは静かに、リベロの話聞いた。

それはどこかで聞いたような話で、でもとても残酷な話だった。

第五十四話 愛、戦士（後書き）

藤「・・・いやあ、よかったですね、ノエル君」  
ノ「何がだ」

藤「ほんと、憎たらしいよ、キミみたいな人は」

ノ「ただのひがみじゃねえか」

藤「うるさいなあ・・・。ラブシーンあまりうまく書けなくてすみませんでした！！初めてだったんで！！」

ノ「・・・次回は・・・リベロの過去だな」

藤「ええ。そしてその次はミーナです」

ノ「リベロの過去・・・聞けば聞くほど干渉者のしてきたことが許

s「それ以上言うな！！」……………」

藤「では、また次回！！」

ノ「また間が開くみたいだけだな」

藤「うつせえ！！」

第五十五話 思い出・リペロ編(前書き)

やっと過去話突入です！

## 第五十五話 思い出・リベロ編

17年前、俺は小さな村にて魔法使いと錬金術師の間に生まれた。

そんな2人の親を持ったからか、物心ついたときから俺は下級攻撃呪文をすべて使いこなせ、錬金術もある程度使えた。

あの時は何の不自由もなく育ち、俺が生まれてから五年後、妹のレナが生まれた。

俺たち兄妹はよく遊び、よくケンカし、時には飯の取り合いもした。

まあ、仲がよかつたんだな。

そしてなんだかんだで年月が過ぎて行き、俺は12歳、レナは7歳になった。

このときから呪文の合成実験が好きでな。      よく実験してよく怒られた。

そのころからレナは、体を患わせていた。      だから俺は成功した実験をレナに見せて喜ばせてあげた。      レナの喜びが、俺にとつての生きがいみたいなものだった。

そんなある日、レナは急に倒れた。

心臓発作だ。

その時村にいた医者ではどうすることもできず、近くの町までもかなりの距離がある。



そんなとき、一人の医者が村を訪れた。

俺たちはわらにもすがる思いでその医者に頼んだ。

「レナを助けてくれ！」と。

すると医者は、うれしいことにレナの心臓発作を和らげてくれた。

そしてその医者は「レナちゃんの様子をちよくちよく見に来ます」と言って村に滞在した。

俺たちには、この医者が神様にさえ思えた。

しかし、今思えば、これが始まりだったのかもしれない。

医者が村に滞在してから数カ月後、医者はレナを診療所に呼んだ。

そのとき父親は知人の家を直すために外出中だったし、母親は薬草を摘みに近くの山に行っていた。

俺一人でもレナの面倒は見れたし、医者も数ヶ月間、よく俺たちの面倒を見てくれて、両親の信頼は濃かった。

だから俺とレナの二人で診療所に行くことを許したのだろう。

診療所につき、レナは診断室、俺はロビーで結果を待つことになった。

そして俺は差し出されたお茶を飲んで、結果が出るのを待った。

しかし、そのお茶を飲んだ途端、俺の目は重くなり、うとうとと寝てしまった。

その後のことは、覚えていない。

気づいたときには、俺は魔物の姿で他の魔物と村を燃やし尽くしていた。

「これは……！」

俺は声を出した。声の調子も変だ。まだ声変わりもしていないのに凶太くなっている。

目の前には燃え尽きた家、焼けた野原、そして肌が焼けとけた人間たち……。

俺はその中の一人を見てハッとした。

そこには見覚えのあるペンダントをしっかりと握り締めた人骨……母親がいた。

「かあ……さん……？」

返事がない。手を取ると、腕の骨が崩れ落ちた。

「う……うあああああああああああああああ……！」

俺は絶叫した！　なぜこんなことになったのかは自分のこの姿で  
すぐにわかる。

俺は後ろを振り向いた。

そこにはキラールパンサーのような胴体で、銀髪の長い髪を生やした  
魔物……そう、先の祠で戦ったアレと同じだ。　それと、醜く笑  
っている医者が出た。

「お……前が……！」

「おっと、勘違いしてもらっては困るよ？　私は実験してみただ  
けだ。　人間と魔物を合体させたらどうなるかなってね。　そ  
れに村を破壊したのは私じゃない」

医者はそう言うと、俺を指差した。

「リベロ君、キミだ。」

「……！」

俺は心の底からの怒りを覚えた。　そして魔物に近づいた。

俺はその頭をそっと撫でた。　何もせずに殺すのは、いくらなん  
でも可哀想だろうと思ったからだ。

髪の感触も、サラサラ感も、どこか懐かしさがある。

そしてしばらく撫で続けていくと、魔物が口を開いた。



「何をだ!!」

「自分の榮譽を守るためには実験が必要ということをや」

俺はその言葉を聞き、ゾツとした。

まさか……こいつは……!!」

「そう、キミが今思っている通り、私は今までに何体もの合成獣キマイラを作り上げ、その破壊性を記録していった。おかげで軍事国家からの契約もけっこうあってねえ」

「てめえ、まさかそんなことのために!!」

「そんなこと？ 合成獣を作るだけで有名になれるんだぞ？ すばらしいことではないか！ それにキミとレナちゃんもいずれはもっと広い場所で暴れることができるようになるんだよ？」

「てめえ、黙って聞いていれば!!!!」

俺は右拳に炎を溜め、それを医者に向けてぶっ放した。

すると、やつと炎の間にレナが入り、炎はレナに直撃した。

「!!!!!! レナ!!!!!!」

「才兄ちゃん……」

俺はレナに駆け寄った。

「レナ！！ ごめん、本当にごめんなー！！」

「オ兄チャ…大ス(ダイ)…一好…」

そしてレナは、息を引き取った。

「レナアアアアアアアアアア！！！！」

俺はまたも発狂した。

「ハハハハハ！！！！ まあいい。 他にも実験体はたくさんいる！！！！」

医者はそう言うと、謎の空間を作り出し、その中に消えた。

「う……………うああああああああああああああああああああああ！！！！！！」

その後、俺は元の姿に戻る薬を作ってこの姿に戻った。

そしてあの砂漠の家を造り、あのときに一緒に持っていったレナの細胞を基に、レナの人格をもったロボットの開発を進めた。

それが、レイアだった。

~~~~~ノエルside~~~~~

「レナの人格を積ませるのは無理だったけど、まあ、作ってみてよかったと思っている。……これが、俺の過去だ」

リベロは話を終えた。

その中で俺はいくつか、話せるとしたら神様と姉ちゃんくらいの疑問を抱いた。

「……リベロ。ごめんなさい、あのときあたしが母さんと組んだりしなければ……」

「いや、いいんだミーナ。薬はいずれ切れるもんだし、それに今は人間と魔物の姿の両方にいつでもなれる。例を言わなきゃいけないのはこっちだ」

詫びるミーナに、リベロは言った。

「それに、俺のことを大切な人だって言ってくれて、嬉しかったよ」

「え……うそ、聞いてた？」

「どうも魔物の姿だと聴力が上がるらしい」

……あれ？　なんか二人だけの空間ができちゃってない？

「なあ、フィーナ。もしかしてあの二人……」

「あ、ノエルもそう思う？」

って、話が横道それてる！！

「あ、ごめんなさい。……次は、あたしね」

今度はミーナが話し始めた。

人種差別を実感させられるような……そんな感じがした。

第五十五話 思い出・リベロ編（後書き）

リベロの過去終了！

ノ「乙。 ていうかどっかで聞いたような・・・」

まあ、そういう人もいるだろうね。 それに関してはまたいずれの日にか本文内で説明できるでしょう！

ノ「じゃ、また次回……ミーナ編で！！」

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能たんのうしてください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n8201o/>

なぜか選ばれた俺の異世界冒険記

2011年11月29日00時54分発行